

昭和二年十月廿五日第三種郵便物認可  
昭和六年二月二十八日印刷(每月一日)  
昭和六年三月一日發行(一回發行)

# 通類編



第六号  
三月

春亭

春の装ひ華やか

に出揃ひました

御用命は何卒

丸岩へ……………

四月一・二・三日の三日間

春季大賣出し



日本橋一丁目(停留所前)

丸岩吳服店



電話南(75)一三三六番



風味必ず御氣に召す

天ぶら御料理

季節日本御料理

芝居情緒と食道楽  
喜久屋食堂

御芝居歸りには打揃ふて

お坐席では是非御會食を！

道頓堀戎ざし北詰

支店

大阪支店 北新地裏町

京都支店 木屋町ドングリ橋





道頓堀 昭和六年三月號

第 六 年  
第 五 十 四 輯

繪 口

三月巡業陣・關西大歌舞伎◇「近江源氏先陣館」鷹次郎・佐々木綱盛●浪花座第一劇場三月公演◇「楠木正成」壽三郎正成・扇雀正季・伏見正行・霞仙四條中納言隆資・菊藏菊池武吉・成太郎正成妻久子◇「姉」菊江姉一枝・竹子妹春子◇「町の入墨者」壽三郎岩吉・扇雀第三次郎霞仙おきち・竹子娘おたね・舞臺面◇「嘆きの天使」壽三郎ウナント教授●中座曾我廻家五郎劇創立三十年記念興行◇「山の兄弟」五郎母お順・舞臺面◇「天下の俠客」五郎吞込久太・舞臺面◇「オモチャ」舞臺面◇「宿り木」舞臺面◇「三ッ巴」舞臺面●角座成美團◇「月魄」山田久松高・藤村鍋島直樹・石河久松田鶴子・伊志井正木貞雄・東川上倭文子・都築川上益荒◇「上陸第一步」藤村火夫坂田・石河女さと●松竹座「春のおどり」恩地世之助・香椎太夫・飛鳥紫水晶●文樂座入形淨瑠璃三月興行◇「伊賀越道中双六」天廣間の段・玉松大内記・榮三政右衛門◇「義士銘々傳」彌作鎌腹の段・文五郎女房おかや・榮三彌作・政龜和助◇「義經千本櫻道行初音の旅路の段」文五郎靜御前・榮三狐忠信◇「七代目廣助襲名口上」津太夫・猿兵衛改め廣助・友次郎◇三月巡業陣・關西大歌舞伎◇「戀の湖」福助錦屋小稻・鷹治郎稻野屋半兵衛・市藏望月權之進・延若仲間勘助◇「近江源氏先陣館」延若和田兵衛秀盛・吉三郎妻早瀬・魁車妻篝火◇「白藏主」長三郎狩人駒作

◇表紙……………(楠木正成古版畫)

第一劇場

媚るな第一劇場

西田眞三郎 (二)

「姉」について

關口次郎 (八)

「町の入墨者」に就き

長谷川伸 (九)

嘆「きの天使」その他

森田信義 (一一)

楠木正成 (三幕七場)

浪

花

座 (四)

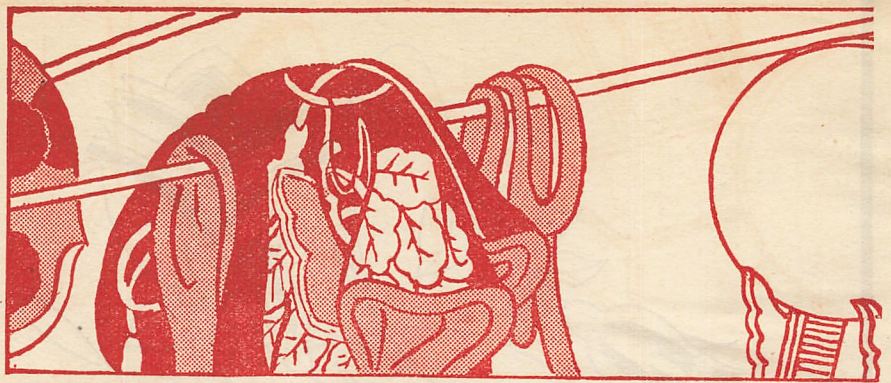
芝見  
居、また

上陸第一步 (五 景)

角

座 (二〇)





**五郎劇** 三十年前の曾我廼家兄弟……………食満南北(七)  
 創立三十年の思ひ出……………曾我廼家五郎(二四)  
 長襦袢その他……………中井浩水(一八)

**成美團** 『月魄』新釋脚色演出考……………山上貞一(二二)  
 『上陸 第一步』……………豊岡佐一郎(二四)

**映畫欄** 愛よ人類と共にあれ(誌上封切)……………蒲田映畫(二七)  
 妻吉物 語(誌上封切)……………帝キネ映畫(二八)  
 河童 又介(誌上封切)……………下加茂映畫(三〇)

下加茂特別通信……………(三四)  
 スタデイオ・ニユース……………(三二)  
**映** 煙室……………(三四)

**第一劇場に寄せる**……………桂田 曉香(三六)  
 ◆二ツの喜劇團……………(三六)

**脚本** 今戒光・倉田啓明・關口次郎・伊藤松雄・小野金次郎・生方敏郎  
 長谷川伸・高安吸江・堀正旗・北村兼子・津村京村・森ほのぼ  
 中山楠雄・畑耕一・北村喜八・坪内土行・大隈俊雄  
**嘆きの天使**……………ハインリッヒ・マン原作  
 森田信義 劇化……………(四八)  
 田中満彦

◇挿 編 輯 後 記……………



に粧化淡な楚+清

# 粉白水圓御新

色櫻・色肌・白純

錢十五各



園蝶胡東伊 鋪本



劇廣宣圖裝  
畫昔傳案飾



阿久田號

神戶市水通三丁目六一  
電話漢(5)二四〇番

輸入品に比し優ることも

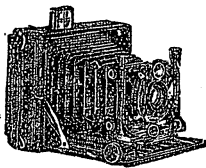
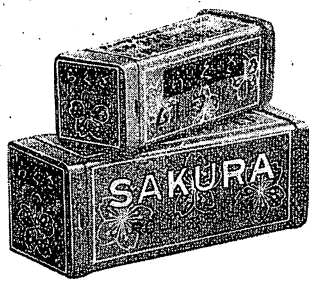
毫も劣らぬ國産品

リリーカメラ  
パールカメラ  
アイデアカメラ  
パールツトカメラ  
さくら

ロールフィルム

各判完成

(カタログ進呈)



カメラは優良國産品を!

寫真機及小型活動寫真機

小西六大阪支店

大阪市長堀橋筋壹丁目





“近江源氏先陣館”



・三月巡業陣・佐々木盛綱……中村鴈治郎

座 花 浪

演 公 月 三 場 劇 一 第

“ 楠 木 正 成 ”

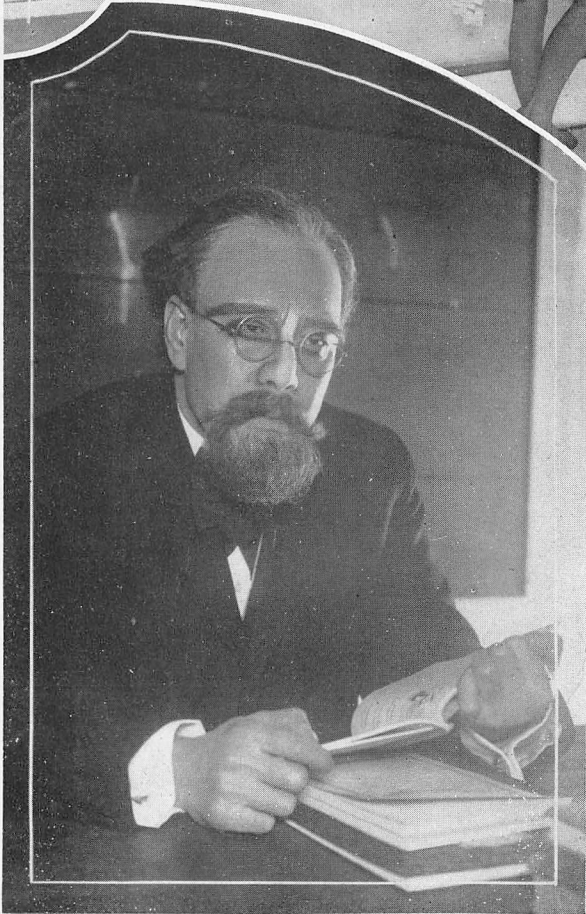
楠 木 正 成

阪 東 壽 三 郎

楠 木 正 季

中 村 扇 雀





“ 嘆きの天使 ”

キャバレーの踊子ローラの美に魂を奪はれ名譽ある教職までも擱つてローラの許に走つたウンラート教授は遂に道化役者にまで成下り故郷の町にお目見得しなければならぬ。……思ひつめて氣の狂つた教授は思ひ出の學校の教壇に還ひかぶさるやうにして死んで行つた。

授教トーランウ・・・の郎三壽東阪





正

成

壽三郎



正成妻久子

成太郎



三月・浪花座  
第一劇場

“楠木正成”

正成 壽三郎  
正季 扇雀





菊藏の菊池武吉



雷仙の四條中納言隆資



壽三郎の正成

上・壽三郎の正成と・・・  
 ・・・・伏見の正行

花浪  
場劇一第



“ 姉 ”

一家の支柱である父を失ったので、健気にも姉が父に代  
つて生活戦線に立たなければなりません。が、か弱  
い女手で母と妹とを養つて行く姉の泪ぐましましまでに雄  
々しい姿……………。

姉	一枝
妹	春子
	村田竹子
	河村菊江



町の入墨者

大詰 伊勢屋の外の舞臺面



郎三壽	吉	岩
雀扇	郎次三弟	
仙霞	ちきお房女	
子竹田村	ねたお娘	





中座・五郎劇  
創立三十年記念興行

“山の兄弟”



母お順

五郎



その舞臺面



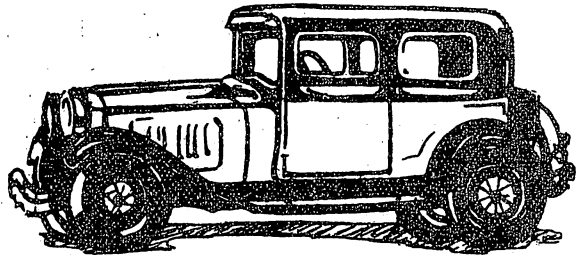


各 郊 外 電 車  
構 内 に 駐 車 場 あり

道 頓 堀 より 自 働 車 の  
御 用 は ……………

相 生 橋 北 詰

電 話 南  
三 〇 五 一 八 六 番



春季三大巨豪篇

栗島すみ子主演・池田義信監督

日本女性の歌

岡田時彦・高田稔・川崎弘子共演

上山草人主演・島津保次郎監督

愛よ人類と共にあり

鈴木傳明・岡田時彦・田中絹代共演

林月高

長形田

龍之浩

郎介吉

共演

黎明以前

衣笠貞之助監督會心作

松竹キネマ株式會社

化粧品界の

スター

發賣元

朝日堂株式會社

大阪南久寶寺町四

# スキナあぶら取紙

皆さんに

愛用されて居る

製造本舗

中田スキナ屋

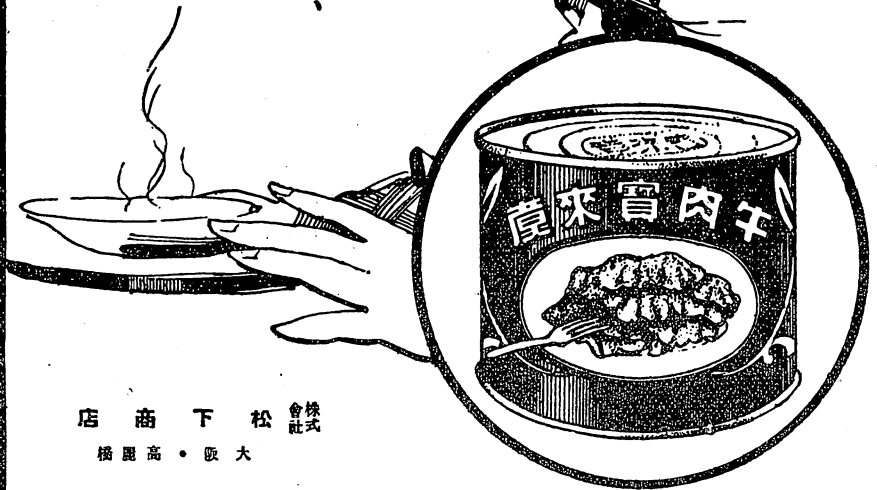
大阪





# 牛肉寶來煮

明日は  
もつと  
おいしく……



松 下 商 店 株式 會社  
大 阪 高 橋



“ 天下の俠客 ”

吞込久太

その

舞

臺

面

五

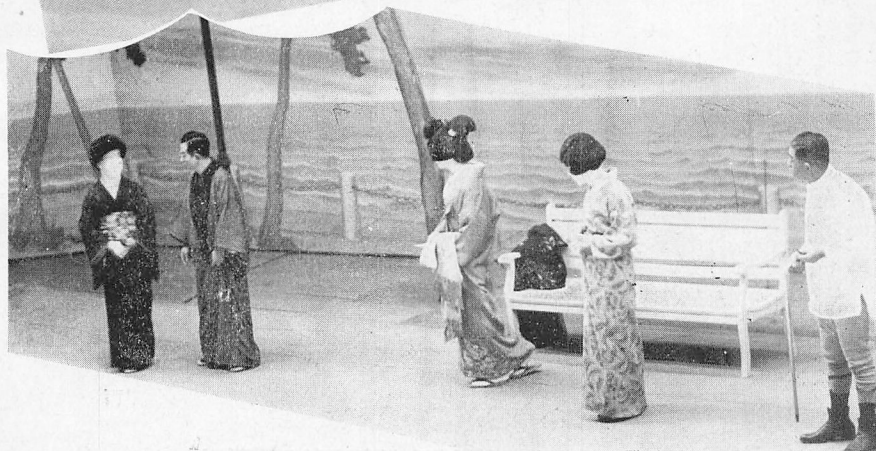
郎



上 "オモ子ヤ"

中 "宿り木" 中座・五郎劇

下 "三ツ巴" の舞臺面





あらゆる印刷



永井日英堂印刷所

大阪市西區土佐堀通一丁目

大阪中央局私書函第壹壹八號

電話土佐堀(44) 三〇八三番  
四九九四番

振替大阪一九三九〇番



小道具  
裂具  
貸衣裳

- ・素人演藝會・宴會の催物・
- ・春秋温習會・婚禮の衣裳・

松竹衣裳部

本店

大阪市浪速區南坂町松竹ビル内  
電話 戎 五 六 三 四 番

東京支店

東京市淺草區並木町十五  
圓電話 淺草 五 五 九 九 番

(其他一般の衣裳多少に不拘御利用下さい、  
御來客の御相談に應じ便利よく取計ひます)

東京銀座山崎洋服店出身

◆ 最高の技術 ◆



◆ 最低の値段 ◆

# ツツキ洋服店

大阪市天王寺区勝山通三丁目

電話天王寺(77)一二九一番


**淋病**

断然たる決心  
を以て、即時  
お求めあれ  
男女、淋毒性、  
膀胱炎、尿道炎、  
等に對し、遺憾な  
達し且治療の目的を  
用なき最も卓越  
せる新薬なり

一圓五十錢 各薬店  
二圓三十錢 にあり

西村久合名會社  
大阪東區伏見町二  
電本局一四六〇番  
攝務大阪六九〇番

**ルーチノゴ**





品作特ネ  キ帝興新

平九呂多喜々壽 督監  
助之々百川市 演主

衛貞見高 督監  
子重八川歌 演主

鼠<sup>ねづね</sup>木の巷<sup>きょう</sup>

心用御氣浮

三寶島中 督監  
郎太玉川市 演主

吉重木鈴 督監  
子映・トナミ 演主

嫁花の港

卷繪祿元雪吹血

吾惠村木 督監  
子駒田砂・兒狂杉 演主

品作部キート

下閣長社女

藏源垣赤

貞見高 督監  
子慶津高・子重八川歌 演主

ンポツニ・ムタマ

郎太新邊渡 督監  
量島上色脚  
茂木三 影撮  
郎三清津河 演主  
丸ノ日田吉 當擔曲浪

一英本松 督監  
子みふ路山・博村津 演主

橋だみな

品作回一第社入子靜森

演出別特迎歡子澄木鈴・兒狂杉

語物吉妻 江堀  
斬人六

稔木三影撮・三純根曾 督監

三月・角座  
成美團

新釋  
"月 魄"

久松 喬  
鍋島直樹  
山田隆也  
藤村秀夫



" 歩一第陸上 "

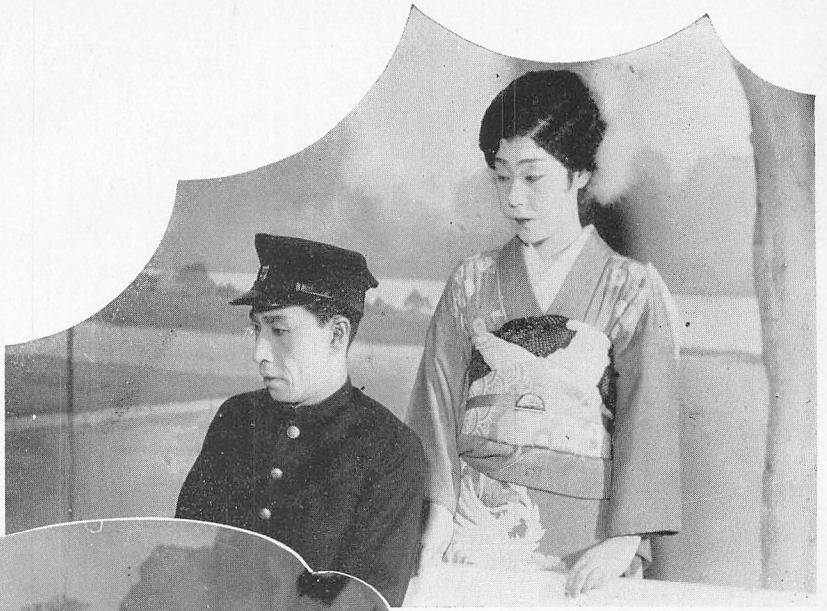
村 藤・田坂夫火  
河 石・とさ 女



角座・成美團

月

魄



川上益荒	川上倭文子	正木貞雄	久松田鶴子
都築文男	東愛子	伊志井寛	石河薰

庭園の雅趣都下一

風味・情緒・設備

斷然斯界の第一位

名代  
電氣

天王寺公園

Tennoji Park, Osaka.

Tel. Nos. Ebisu {1334.1335.1413.  
1336.1337.





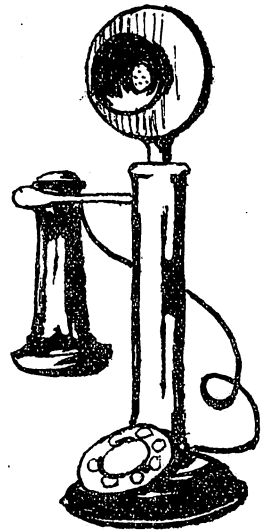
私設電話工事ハ

# 和田電機商店

遞信局指定公認

## 和田電機商店

大阪市北區中之島常安町  
電話土佐堀(44)一七八〇七八番  
一七六〇七八番  
一七九〇一八番  
一七九〇一八番  
一七九〇一八番  
一七九〇一八番  
工場 大阪市天王寺區東上町二〇地





**確實**

本邦最優最大の生命  
保險會社として基礎  
最も確實なり

**有利**

低廉の保險料を以て  
最も豊富なる加入者  
配當を實行す

**親切**

營業機關奉仕設備共  
に完備し加入者各位  
の賞讃を博す

契約高 九億壹千餘萬圓  
總資産 二億壹千餘萬圓

# 日本生命

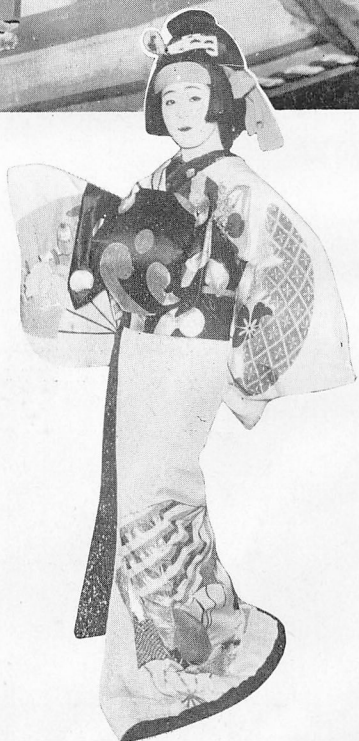
大坂市東區今橋四丁目



！物名！竹松！だ踊！だ春

“りどおの春”

座 竹 松



松竹ガクゲキ・ピツグスリー

世之助

恩地かつ子

太夫

香椎園子

紫水品

飛鳥明子

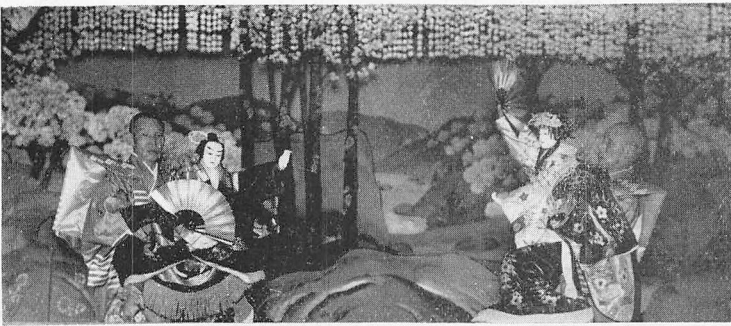




(三榮) 門衛右政(松玉) 記内犬・段の間廣大 [六双中道越賀伊]



(龜政) 助和(三榮) 作彌(郎五文) やかお房女・段の腹繰作彌 [傳々銘士義]



(三榮) 信忠狐(郎五文) 前舞靜・段の路旅の音初行道 [櫻本千經義]



(郎次友) 目人五(助廣) 改糸猿目人三(夫太津) 目人二りよ右 [上口名襲助廣目代七]

腎臟病の積極治療に

世界唯一の新發明藥

# ネリクシ

發賣元 石本藥園

大阪東區森小路四五六

(電話六四七八番)

醫學博士宮田訂先生の驚異的發表………

各百貨店藥品部及有名藥店に有り (説明書進呈)

專 門

## 腎臟病・膽石症

宅 診

無料相談

醫學博士 宮田 訂

宮田 內科醫院

大阪西區ミナミ池田半丁西入

(電話二町八九八番)

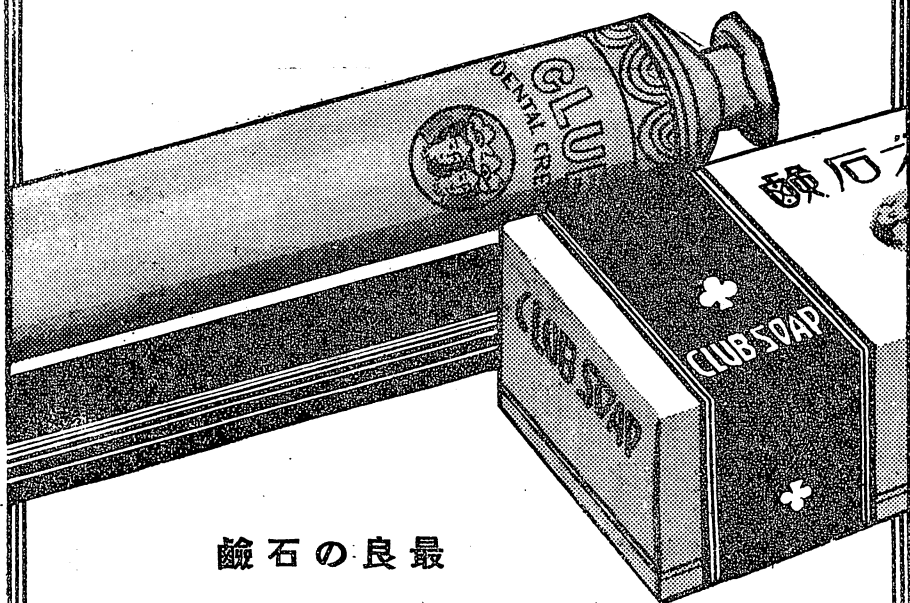
午前十時ヨリ  
午後三時マデ

月曜夜間

な秀優も最果效

# 磨齒煉ブラク

貴方あなたの健康けんかう  
を増進きんしんする  
爲ためにクラブ  
磨ひらの偉大ゐだ  
な效力くわうりきを御  
活用くわつごう下さい



礮石の良最

# 礮石ブラク



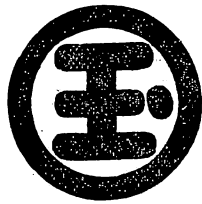
新聞

廣告は電通

本社 東京 日本電報通信社  
 支店  
 局  
 南 北 釜 下 金  
 京 平 山 關 津  
 經 天 京 長 宿 館  
 育 津 城 崎 部  
 巴 背 奉 福 神 札  
 里 島 天 岡 戸 磯  
 倫 漢 大 龍 岡 青  
 致 口 遠 茅 山 森  
 飛 上 哈 鹿 廣 仙  
 港 海 濱 兒 樹 島 盛  
 羅 廣 濠 大 松 長  
 府 東 北 分 山 野

大阪市北區中之島三丁目  
 廣報代通總成  
 大阪電報通信社  
 電話  
 本局 一五五五  
 一五六一  
 一五五二  
 一五五三  
 一五五四  
 一五五五  
 一五五六  
 一五五七  
 一五五八  
 一五五九  
 一五六〇  
 一五六一  
 一五六二  
 一五六三  
 一五六四  
 一五六五  
 一五六六  
 一五六七  
 一五六八  
 一五六九  
 一五七〇  
 一五七一  
 一五七二  
 一五七三  
 一五七四  
 一五七五  
 一五七六  
 一五七七  
 一五七八  
 一五七九  
 一五八〇  
 一五八一  
 一五八二  
 一五八三  
 一五八四  
 一五八五  
 一五八六  
 一五八七  
 一五八八  
 一五八九  
 一五九〇  
 一五九一  
 一五九二  
 一五九三  
 一五九四  
 一五九五  
 一五九六  
 一五九七  
 一五九八  
 一五九九  
 一六〇〇  
 一六〇一  
 一六〇二  
 一六〇三  
 一六〇四  
 一六〇五  
 一六〇六  
 一六〇七  
 一六〇八  
 一六〇九  
 一六一〇  
 一六一一  
 一六一二  
 一六一三  
 一六一四  
 一六一五  
 一六一六  
 一六一七  
 一六一八  
 一六一九  
 一六二〇  
 一六二一  
 一六二二  
 一六二三  
 一六二四  
 一六二五  
 一六二六  
 一六二七  
 一六二八  
 一六二九  
 一六三〇  
 一六三一  
 一六三二  
 一六三三  
 一六三四  
 一六三五  
 一六三六  
 一六三七  
 一六三八  
 一六三九  
 一六四〇  
 一六四一  
 一六四二  
 一六四三  
 一六四四  
 一六四五  
 一六四六  
 一六四七  
 一六四八  
 一六四九  
 一六五〇  
 一六五一  
 一六五二  
 一六五三  
 一六五四  
 一六五五  
 一六五六  
 一六五七  
 一六五八  
 一六五九  
 一六六〇  
 一六六一  
 一六六二  
 一六六三  
 一六六四  
 一六六五  
 一六六六  
 一六六七  
 一六六八  
 一六六九  
 一六七〇  
 一六七一  
 一六七二  
 一六七三  
 一六七四  
 一六七五  
 一六七六  
 一六七七  
 一六七八  
 一六七九  
 一六八〇  
 一六八一  
 一六八二  
 一六八三  
 一六八四  
 一六八五  
 一六八六  
 一六八七  
 一六八八  
 一六八九  
 一六九〇  
 一六九一  
 一六九二  
 一六九三  
 一六九四  
 一六九五  
 一六九六  
 一六九七  
 一六九八  
 一六九九  
 一七〇〇  
 一七〇一  
 一七〇二  
 一七〇三  
 一七〇四  
 一七〇五  
 一七〇六  
 一七〇七  
 一七〇八  
 一七〇九  
 一七一〇  
 一七一〇





# 吳服雜貨

歡樂境の中心

◆御買上品に對しては新舊市内御届致舛

◆御觀劇の御歸りに是非御立寄りを

花觀衣裳

花觀シヨール

宣傳販賣開催中

丸玉 石川

大阪道頓堀

小稲半兵衛 “戀の湖”

錦屋小稻	中村福助
稲野屋半兵衛	中村鷹治郎
望月權之進	市川市藏
仲間助七	實川延若





八

近

八

妻 早瀬

嵐吉三郎

八

近

妻 篝火

中村魁車



八

近

八

和兵衛秀紳  
狩人駒作

林長三郎  
實川延若

製社會一ミラセ・ーリパ國佛  
品粧化ーピツカ料粧化秀優的界世

カ  
ツ  
ピ  
ー  
化  
粧  
料



ンロコデオ・ンヨシーローヤへ・水香  
(色各)粉白粉・水香トツレイト  
(色各)紅頬・(色各)トクパンコ  
鹼石粧化・鹼石リそ髭・(色各)紅口  
油香・ーダウパークルタ・洗髮  
ムーリック・油練・ンチンラリブ水  
切ー他其・品粧化・箱合取用物進

カ  
ツ  
ピ  
ー  
化  
粧  
料  
ホ  
ス  
タ  
ー  
化  
粧  
料  
ジ  
ヨ  
リ  
ス  
ワ  
化  
粧  
料

輸  
入  
元

大  
阪  
大  
浦  
彌  
商  
店

カ  
ツ  
ピ  
ー  
香  
水





アングロス井ス

ミルクチョコレート

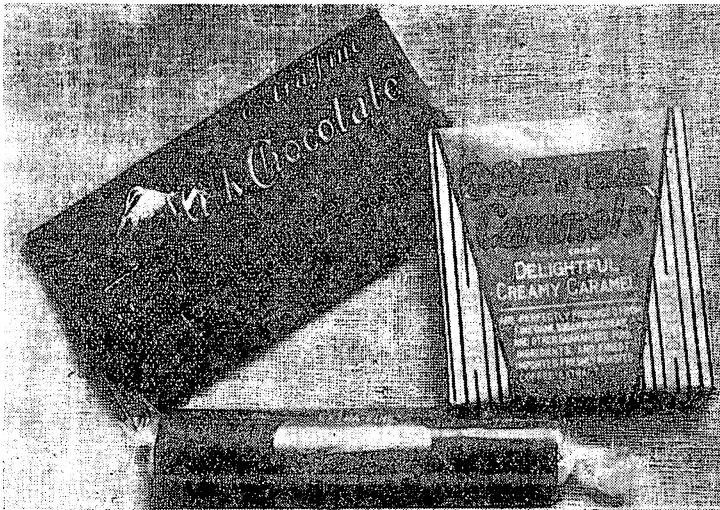
コーヒキヤラメル

チョコ  
レート キヤラメル

大阪市東區豊後町三番地

發賣元 株式會社 横山商店

電話東(94)二〇六一三番



月刊・演劇研究・雑誌

三月號

# 演劇類編

第六年

第五十四輯



三月の中座

お毛午下し

五郎の栄吉

演劇



# 媚るな第一劇場

西田眞三郎

第一劇場が久しぶりに復活の日を、三月の浪花座に迎へるこ  
とが出来たのは結構なことです。大體道頓堀の三劇場にかゝる  
芝居はと言へば瀧治郎中心の歌舞伎を初め、新聲劇、新國劇、  
五郎、淡海、家庭劇位に盡きて居ます。それらが週期的に去來  
するばかりとすれば我等の道頓堀は餘りに寂しいではありませ  
んか。第一劇場の更生をそんな意味で見やうとするのではあり  
ませんが、兎に角、先づ劇團の數が一つ殖えたのを喜びたいと  
思ひます。

◇  
澤正歿後の新國劇に取つて代るべき劇團として最初の第一劇  
場が樹立せられ、多くの歌舞伎俳優の中でも新劇には特異な腕  
を持つとせられてゐる壽三郎を澤正に擬せられたのが當時の第  
一劇場であつたかのやうに記憶して居ます。壽三郎を初め歌舞  
伎の島から出た若い俳優達が新劇島の人々と共に協力して第一

劇場の存在を確立せんとした努力には一方ならぬものがあつた  
ことは否めません。新しい戯曲の演出に血のにちむやうな努力  
もあつたでせうが、諸々の愚劇もするぶん見せられました。第  
一劇場といふ看板をもう一度見直したいやうな感じも受けたこ  
とがありました。解散とか休演とかを聞かされた時もさほど惜  
しい劇團だとは思ひませんでした、と言へば甚だ不人情なやう  
ですが、當然さうある可きであつたと思ひました。

◇  
いかなる劇團も大衆的な支持を得なければ存立することが出  
来ないといふ事は明かなことですが、それを得る方法に誤りが  
ある場合がないとも限りません。人氣を得やうとして媚態の限  
りを盡くすと言つた淺ましいのを既成劇團に多く發見します  
が、そうした態度に依つて示される彼等の演劇には生命がなく  
上ツ面な共鳴を得たりと見えても餘程低下してゐます。大衆の

魂に突き入るほどの自信のある態度がなくてはなるまいと思ひます。大衆に媚びる可く調子を下ける事に依つて、演劇及び劇團そのもの、全生命を覆ふ必要はない筈です。第一劇場の何といふイヤなウインクだらうと感じさせた頃はもうお仕舞だつたでせう。

さて今度更生の第一劇場は矢張り壽三郎を中心に楠三郎、成太郎、霞仙、扇雀等の外に若い新劇島の人々が加つてゐます。やはり第一次第一劇場の如く混成式で、カクテル、メンバーで、丁度猿之助の春秋座獨立の狼火の下に馳せ参じた面々のそのやうな觀を呈して居ます。以前は澤正の穴を行く觀があつたに對し、今度は猿之助の獨立運動に引きずられた人爲的、模倣的な結成様式があるのは獨り私のひが目ではないでせう。けれどそんな更生の動機、様式はどうでもいゝことです。顔ぶれを見ても大いに囑望される劇團です。壽三郎は既に知られて居る通りですし、楠三郎、成太郎も歌舞伎の方では新人であり、嘗て研究室などで眞剣に新劇の演出に研究心の熱烈を示した人で日頃の舞臺にもそのひらめきを見せてゐるし、扇雀は既に周知の如くで、今度の参加に就いては餘程の覺悟があつたことだらうと思ひます。以上の人々には私自身の氣持から言へば、どちらかと申せば依然歌舞伎の舞臺に居つて貰つた方が都合がよくはないかと思はれます。歌舞伎偏重を餘義なくされた此等の人

々にとつては新興演劇への進出は解放されたものにも似通ふ歡喜があるかも知れませんが、歌舞伎への背反といつた氣持がどこか心の隅にあるとすれば、假りに一時的にしても、大それた事に違ひない。

演じ物に「楠木正成」の外ヤニングス主演の發聲映畫を劇化した「嘆きの天使」關口次郎氏作「姉」長谷川伸氏作「町の入墨者」などであつて、ほゞ第一劇場の意圖が見えます。殊に「嘆きの天使」を出して映畫的な舞臺効果を得やうとする氣持などは今日では案外平凡なことだらうと思ひますが、演出脚色者に野淵昶、森田信義、鳥江鐵也の諸氏が控えて居らるゝことであり、餘りに媚びざる演出がもせらるゝことであらうと期待されます。そして終りに望みたいことは今日の舞臺劇の演出が、照明にテンポに映畫同様の効果をねらつて行く傾きがあるが、さうした演出はよろしく舞臺から驅逐すべきではないでせうか最初の第一劇場などでもさうしたものを可成り多く見せられたが、それに依つて映畫のファンを惹きつけやうなど、いふ凡俗はもうそこに居ない筈だ。何處までも舞臺劇であるといふ確信があつてこそ萬全の効果があるのでありますまいか。

妄言多謝



直木三十五作  
鳥江鏡也脚色

楠木正成 三幕七場

浪花座 第一劇場上演

香里照太郎

元弘元年秋の夜明け前。

河内、楠木邸の門前には國をあげての打續く戦亂に疲弊困憊の極、家を失ひ血縁を失つた、放浪の老幼男女が、折柄の淡い月光の下、僅かに露を凌いでゐる。

蟲の音が放浪者達の上に身に沁みて哀しげである。

と、嘆を告げる鐘の音に旅の老僧と商人らしい男が眼をさました。

「おめざめかな」

「和尚さん」

「おゝ寒い、早く夜が明けないものかなあ、ついでにこんな眞つ暗な世の中も早く明けてもらいたいもの

だ」

と、二番鐘の啼き聲が遙に聞えて、次第に近づく馬蹄の響きと共に、高野の僧瀧覺上人と、四條中納言隆資とが人目を忍ぶ服装で楠木邸を訪づれる。

漸く眼をさました放浪者達は、始めてそれと知つて。

「こゝが、あの楠木正成殿とやらの邸か」

「何でも安田の騒動や、大和越智の謀叛、攝津渡邊の謀叛等を一族の手で納めたといふ天晴れた大將の家ですな」

放浪者達の待ち望んでゐた朝の光が、漸くしら／＼と兆しはじめた。

「だが、今の人達は一體何者だらう」

放浪者達に影の如く付き纏ふてゐる濃い不安が、さうした不審の言葉を口々に洩らさしめる。

金剛の山容、築城中の赤坂城を望む、楠木の邸内では、早朝か



芝居 みたま



らの賓客に正季等の元氣の好い聲が響いてゐる。

「兄上、兄上！」

「何だ、だしぬけに——お前は何かといふ騒々しい男だ。もつと靜に物を言へ」

「笠置からのお使ひの方が——濶覺上人の御案内で……」

「何、師の坊の案内で、笠置の行在所からのお使ひだと」

戦亂の中にあつても夜もすがら書見を怠らない正成は、やがて二人の賓客を招いて襟を正す。

「鎌倉幕府の北條高時は既に天下の政治を行ふ能力を失つてゐる。犬追物や、田樂舞に興じて民を養ふ力を

缺いてゐる。人心は等しく王政復古を望んでゐる。でも折角の大塔の宮のその御運動は先年空しく破れて、

恐れ多くも主上には南都へ行幸、更に笠置へ移らせ給ふた、正成殿かゝる時に兵を動かしても、それは兇器

といふか、戦争を禍むといふか——中納言殿、天の時、人の和、地の

利が一致したる時は、或は北條を討つことが五佐の道にも添ひませう」

「天の時は來てゐるか、どうか」

「來てゐます」

「正成殿、すぐに笠置へ參られたい、そしてあの憎むべき北條勢をそなたの軍略で一つやつつけて貰ひたい」

「きつとやります、國のために大いにやります」

正成は堅い決意を眉宇に、直ぐに軍馬の用意を一族の者達に命じるのだつた。

晴れ々とした朝に法螺貝の音が威勢よく響き渡る。

それから二十日程後の夕べ。

河内赤坂城内に立て籠つた正成の奇略は事毎に北條勢に傷手を負はせ、天晴れ戦功を建てゐる。

楠木一族の武功は北條勢の潰滅を大いに促進せしめたのだつた。

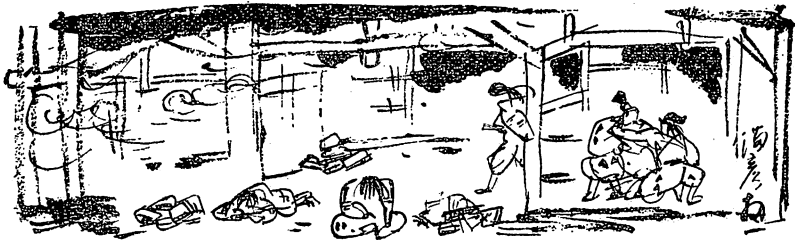
それから六年後。

國をあげて待ち望んでゐた王政は美事に復古した。だが、政治の實際に暗い公卿連中の政策は、いよいよ四民を疲弊のどん底に陥らしめて、いよいよもとの武家政治を慕はしめるやうになつた

折も折、時も時、北條家に廢返りを打つた足利高氏はその大野心完成のために大軍を率ゐて上洛するといふ噂さへ、京の町々に傳はり始めた。

戦塵を拭ふ暇さへなく、正成は再び起つて、足利勢と抗戦、そ

芝居 みたまた



れを西國九州地方に擊退した。だが西國九州の大軍を糾合して再び上洛を企てる足利の叛旗に對して、既に公卿政治に懲りてゐる四民は何等の不審、反感をも抱かなかつた。乃ち正成は櫻井の驛に正行を始め縁邊の人々に最後の訣別を告げて正季等と共に僅かながら腹心の軍を率ゐて足利の大軍を迎撃すべく、悲壯な決意を以て兵庫湊川に向ふ。

亂戦、また亂戦、楠木勢の大牛は刀折れ矢盡きて仆れた。僅かに農家を發見した重傷の正成は、正季等と共に其處に憩ふた。「正季、わしの傷は何ヶ所位いだらう」

「さあ、十二ヶ所もございいますが、随分お働きのございましたなあ」程なく、生き残つた數名の人達が正成の許に馳せ參じて来る。「大將には御無事でしたか、この百姓家に味方が集まつてゐると聞いて飛んで參りました」

「さうか、して一族の生存者は、もう大がいにこゝに集まつてゐるのか」

「ハイ、先程よりこの家の前に集まつてをります」

「みんなこゝへ呼び入れて呉れ」

正成の言葉は悲痛だつた。

やがて、十數人の生存者が正成の前に集まる。

正成を始め人々の顔には言はずして既に、一様に死の決意が流れてゐる。

「正季！ 今は覺悟の時だぞ」

「兄上」

「人間が死の瞬間には何でも願ふ事が叶ふといふが、お前は生きてゐる間に何か望みはないか」

「たゞ憎いのは足利兄弟、茲て死んだら次ぎの世に再び生れ變つて朝敵を滅ぼしたうございませう」

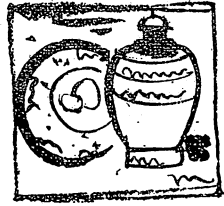
「よく言つた、しかし楠木一族は死んでその野心の徒をどこまでも呪つてやらうではないか」

「さうです。七度人間に生れ變つて——」

既に一同は道具を外して自刃の用意さへしてゐる。

「七度人間に生れ變つて——」

異口同音のその悲壯な語調と共に正成を始め一族の人達は、美事割腹をして、折柄の紅蓮の火の中に包まれてしまふのでした。



# 三十年前の曾我廻家兄弟

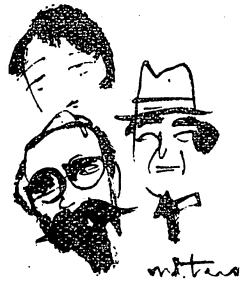
食 満 南 北

曾我廻家が三十年の記念興行をやると聞いた。早いものである、私は覚えてゐる、それが三十年以前だったか、それは識らないが、二人羽織と云つて、大きな羽織を着て前の男と後ろから手を出した男が三味線を弾いたり、仕舞ひに前後四本の手が出ると云つた風な事をやつてゐたり、進んでは、源平布引瀧で花見の趣向か何かで、角樽と毛せんをもち出すのが、二人の男がその毛せんをかぶつて角樽をあたまにして實盛のお迎ひの馬になるといふ趣向やら、カツレツ、シチュウ、とかいふ西洋料理の廣告を見て、頻りに露西亞の兵隊の名か何かをとりちがへると云つた風な趣向がよく取つたもので、十郎風のと五郎風の二つに別れてゐたやうに覚えてゐる。それからのちに一満や、虎やらが這入つて来て、昔の二輪

加風の臭味が仲々とれなかつたものだつたが、五郎氏のあたまがよかつたのか、終に一流の喜劇團を作りあけてしまつた。

はじめ神戸の路次のやうな處に看板のかゝつてゐた事さへ覚えてゐる。

五郎君は私と同郷である、つまり堺の人で、故人の越路太夫もさうで、堺の天一坊と呼ばれた何とか云つた株式屋さんと村上浪六氏等と共にちよつと變つたものを産んだ私の故郷は、與謝野晶子さんや、五郎君や、さうして一緒にゐた虎君さうした人達が皆堺を故郷にもつてゐるのも面白いと思ふ。とりとめもない話だが、三十年といふのにびつくりして、古い記憶をたどつて見たまでである。



第一劇三場月公演上演

『姉』について……關口次郎

『町の入墨者』に就き……長谷川伸

『嘆きの天使』その他……森田信義

# 『姉』について

關口次郎

『姉』は、私の數年前の作です。バーバラ・ラマールとかヴレンチノと云つた一時代前の人氣映畫俳優の名前が、作の中の臺詞にも出てゐるやうに、尤も、これは今度の上演には書き改めはしましたが自然、姉の性格なり、態度なりは、今なら、もう少し書き改めたいと思ふ氣持もありません。が、扱はれた事實、そのものは、恐らく僅か數年のことでなく、昔も今も、まだこれからも、常に、人生の街頭には、形は變つても、數多く見られることだと思つて居ります。

主題は、働きたる父を失つた一家を支へて、姉娘が代つて生活戦線に立ち、母と妹とを養つて行く。妹はそのおかげで、不自由ない快活な女學生々活を送りその若さは、かつて姉に求婚した青年をさへ知らず識らずに奪つて了ふ。姉は、この青年を決して嫌つたのではないのですが、自分がるなくては、忽ち生活に墮つて了ふ母と妹とのことを思ひ、一時結婚を思ひ切り断つて了はずにゐるなかつたのです。が、妹がいつかその青年と婚約までしてゐる實際を見ては、流石に心の動搖は抑へ難いのでした。まして、折も折、自分へもつて来た縁談は、中年者の後妻にも等しい、二人も相當大きな子供のあゝる相手への話でした。流石に、一家の犠牲となり、幾年か唯一心に働いて來た志操固い彼女も、いつか自分に過ぎ去つて了つた青春の悔めさ、寂しさがひしとばかりに考へられて、思はず泣かすにはゐられなかつたのでした。

つまり、この健氣な娘の上にもふりかゝる、人間生活の筆息するやうなある重壓の影、事なげに見える生活行進曲の裏にひそび、一つの寂しい悲しい犠牲。極めて日常生活のさ、やかな一斷片に過ぎないのですが、いはゞそれを作者は、舞臺の上まで、ひき出して來たまでなのです。

作意は、以上簡單な解説でも、充分に盡してゐる程日常茶飯的のものです。作品そのものも、それ以上、別に主張したり怒鳴つたりしては居りません。作者は、唯忠實に、舞臺の上の表現に、具象的な形式と内容とを興へるために、盡してゐるのみです。一つは、作者の以前の作風ですし、又徒らに、呼號し、演説し、主題を叫ぶ戯曲を作者が好まないからです。

唯、この作の上演に當つて、作者は、このジャズだ、ナンセンスだと騒ぎ廻つてゐる今の世間の一方に、たまに、斯ういふ方面、ぬきさしならぬ人間生活といふもの、一つの世相に目をやつて頂くのも、決して無意義ではないだらうと、自信するのみです。作そのものは、今の私としては、以前のものでもあり、かなりの不満も持つてはゐるのですが。——唯上演に當つてのほんの感想のみを。

## 『町の入墨者』に就き

長谷川伸

『町の入墨者』は小生の戯曲集『股旅草鞋』にはいつてある、始め『入墨者の死』と題したのだが、不熟の感があるので、後に今の題に改めたのである。

主人公は遠島に處されて歸つた岩吉といふ、一人の免囚を捉へきたつた。

免囚事業に格別の智識をもつてはゐないが、それが有益で、社會施設として、何とかもツと完全しないものか、その位の關心はもつてゐる作者の作である、餘り大きな口はきけない。

夜盗の頻出に對して町を守もる、といふ話は、別段、耳新しいことではない。たとへば『本朝俠客傳』かある牛の五兵衛など、その一人である。刑餘者といつても五兵衛は俠客といふ種類の人物で『町の入墨者』の岩吉とは違つてゐる。

牛の五兵衛の類の話なら、單純で、朗さすらあるが、小生の作はそれとも違つた物である。暗いと一口にいふ、その一つだ。取材した處を大體にいつてみれば、次の如き人物の實際生涯を加減乗除して、その答案の一種として、この戯曲が生れたのである。勿論、小生といふ狭い天地が生んだのだから、どの程度に答案的になり得てゐるが、頗る怪しいものである。

或る地方新聞記者をしてゐる男が、強盜傷人で捕はれた、そこで始めて彼を知る人々は、彼が既に強盜殺人で無期徒刑をくつて、恩赦に浴して出獄した男であつたことを知つて驚倒したさういへば彼は免囚事業に熱心であつたことなども、思ひ合はして首肯する節があつた。この男は後に脱獄して看守の銃殺す



るところとなつた。

それと、一人の強盗殺人犯の後身である小生の一族の故人某窃盜常習者で獄死した知人某、もう一人、處刑をうけた男、これだけの人物を一つ線に置いてみて、考へた結果が幾つかあるその一つが『町の入墨者』である。もつと違つた答へもあるのだが、それはまだ描いてゐない。

△ 捕吏の長が「俺あ桂庵ぢやねえ」といふ臺詞がある、これを冷酷な方の代辨と考へて貫つては困まる。死囚をよく扶導したい、が世間はそれと同じ歩調ではない、といつて世間と抗争してまでといふ氣力は出し得ない、さういふ多くの世間人の代辨それがあの臺詞なのである。

△ 白い倉と黒い倉の對照とか大詰の死の行列とか、幾つかの舞臺戲曲的要素はしたつもりであるが、どんな風に効果があるかは、演出家と演技者の領分に屬する。多分、格を守つて格を出て、充分なる効果を示せてくださる事と期待してゐる。

△ この戲曲は暗い。

尾上菊五郎氏は「中山七里」と較べて、暗いことは「入墨」の方がすつと暗いといつた。又所演時間については「中山七里」より餘計かゝるといつてゐた。原稿紙の數がらひへば同じ

ぐらゐなのだが、菊五郎氏のみる處はさうであつた。さういふ戲曲なのであらう。

△ も一ツ。私事だが申したい。

『町の入墨者』は菊五郎氏が上演する筈で小生の「中山七里」と搦き代つた。それは一昨秋の事だ。その後、この戲曲の上演を希望する俳優が幾人もあつたが、みんな斷つて今日に及んだ今でも東京でならば、どんなに素晴らしい俳優であらうと、菊五郎氏以外の上演には反對する。随つて、映畫化など思ひも寄らずである。

坂東壽三郎氏とは小生、特に私交がある譯でもないが、第一劇場誕生の機會を、小生の「股旅草鞋」がつくつたさうで、その再起ともいふべき今度の公演にあたつて乞はれてみると反對する氣になれないで、上演を承諾した次第である。

菊五郎氏との口頭約を今まで守つてきたが、たうとう少し破つた、その代り大阪、神戸限りの公演で、その他ではやつて貰ひたくない。一方、東京では今後永久に上演されないでも構はない、前記口頭約を小生は固守するつもりだ、だから全國的な映畫化など思ひも寄らぬといふのである。

# 『嘆きの天使』その他

森田信義

野淵と僕とは年來の友人で、そして、新興演劇戦線の上の同志である。

野淵は生粋の演出者である。彼が、創設した「エラン、ヅキター小劇場」に立て籠つて、経営上のあらゆる苦惱を嘗めながら、次から次へと、新鮮な、素晴らしい「演出」を見せて、日本の、わけて關西の、劇壇に、刺戟を與へ、輝かしい貢献を十年來つゞけて來たは、周知の事實である。

僕は、時には、演出の爲事も擔當しないでもないが——現に今度も一つ、長谷川伸氏の「町の入墨者」と云ふのを擔任してゐるが——僕の本領——と云ふか、本當の爲事は劇作にある。野淵は、僕が彼を買つてゐる程度に、僕をまた、買つて呉れてゐる。

ふたりがパートナーとして、爲事をしたいと云ふ念願を有つたのは、もう數年である。しかし、機會はなかく來なかつた。分長長い間待たねはならなかつたわれ——兩人であつた。

が、到頭來た。今！——それが、今度の即ち第二次の「第

一劇場」第一回公演の『嘆きの天使』である。

この機會に、僕は前述の、僕達の新興演劇の共同戦線に就いて、數行述べさせて置きたい。

僕達の戦線は最初は五人の同志（この度の「第一劇場」の責任者である鳥江鎮也、おなじく野淵昶。それから、豊岡佐一郎、山上貞一。第一次の「第一劇場」の責任者だつた田中總一郎として、僕。）から構成されてゐた。そして機關雜誌として「新興演劇」を有つた。そこで、僕達は「新興演劇派」と呼ばれてゐる。

それが中途で、新しく同志二人（松本憲逸、山田松太郎）を獲、七人になつて、陣營は大いに賑ひもし、活氣つきもした。しかし、その後不幸にも、一人を、田中總一郎を失はねばならなかつた。

即ち現在では六人（重複するが——山上、豊岡、松本、山出野淵、鳥江、僕のグルツベが、それである。

（因に、機關雜誌「新興演劇」はその後、いくつかの、清算し刷新しなくてはならない誤謬、過誤、不徹底を、發見したので今年の一、二月斷然廢刊した。揚棄したのである。そして、僕達は新しく「新興舞臺」と云ふのを有たうと計畫し、目下準備してゐる。多分、三月の初めに、その第一號を出す事が出來やう。乞ふ、各位の強い後援と支持とを寄せられんことを。）

横道へそれた。

さて『嘆きの天使』だが——これは、マン兄弟で知られてる、その一人の、ハイソリツヒ、マンの小説「ウンラート教授」をウーファ社が、スタンパー監督、ヤンニングス主演で映画にしたものを、更らに、劇化——舞臺化したものである。

勿論、さうするに當つて僕は、マンの原作を一應参照しはしたが、しかも敢へて、主として映画に依つた。と云ふは、映画の卓越した、新鮮な手法を、舞臺に轉用することを常に提唱してゐる僕としては、當然のやり方だつた。——（僕が去年の六月だつたかに「新興演劇」で主張した言葉、「……舞臺關係者は、あまりに偏狹だ。片意地だ。變な潔癖を有ち過ぎてゐる。それが、演劇を行き詰らせるのだ！ 演劇の發表を阻止するのだ！ 映画の手法であらうが、映画そのものであらうが、幻燈であらうが、將又スポーツ、機械……なんでも御座れ、取り入れて、消化し、舞臺効果を上げる上に役立てる……」——即ちあれだ。）

で、題名も、映画のその儘襲用して『嘆きの天使』とした。勿論、それには、この方が大衆向きだと考へたからでもある。

そこで、この『嘆きの天使』を何故、上演脚本に擇んだか。それは、かうである。——それは、まづ感覺美に裕かであり

気分をレフレツシユするに役立つ好いペース、好いユーモアに富んでをり、そして、特殊な環境、場合に置かれた特殊人（あまりにも、そんな戯曲が多過ぎることよ！）ではなくて、僕達同様、ざらにある平凡人の平凡な環境に於ける「人間苦」が、實にヴィヴィッドに、深酷に、描かれてある——これを一口に云ふならば、大衆を怡ばせ、同時にアツピールする、即ち大衆のための、脚本であるからである。又、因みに。——僕達所謂「新興演劇派」は常に「演劇を、特殊階級——長い演劇觀照訓練を経た觀客、或ひは、それとは違ふが、演劇の實驗室のやうな劇團にのみ關心を有つ所謂新劇愛好家、この二種の演劇インテリ？」から奪還して、大衆の手へ！ さうしてこそ、演劇が、生活の必需品になり得る！」と主張し、行動してゐる。）

ところで、「道頓堀」の編輯者が、僕に希望したのは、こんな事を舒し綴ることではなかつた。彼が課した題は實に『嘆きの天使』の脚色に就いて、何か誌せ、とさう云ふのである。

が、これは、同誌前號に寄せた拙文芥川さんの『お富の貞操』のなかにも書いたことと、こんな場合僕は何が云えやう。僕はこんな課題に對しては何にも云ひたくない。

云つて見れば——先月の場合は演出者として、今度は作者として——僕は被告の立場だ、審判權を各位に托した——。だが、さうは云ふもの、かうして何か書く以上、全然編輯

者の希望に觸れないのも、どうあうかとも思ふ。そこで、それらしいことを、以下僅んのすこし——

要するに、僕はいろんな技巧を驅使して映畫を立體化し、重量を附與したわけ、それだけだ。

外觀美をより熾烈にし、豊富にし、強調し、主題をよりヴィヴィッドに響せることに努めた。それから、もう一つ、僕はスベクタルを企圖した。

この場合にも、僕は前掲の態度を棄てなかつた。——自由に映畫の手法を取り入れ、これを消化して、舞臺化する。すべて何ものでも納れて舞臺の効果に役立たせると云ふ。

△

普通の場合、こんな意圖を有つて作劇した戯曲を、演出者に渡す時には、大變に不安を感じるものであるが、こんどの場合は相手が野淵だ。もとより此の種の「外國物」には獨特な、卓抜した瀟灑技倆を有つてもゐるし、それよりも何よりも、まづ僕の意圖をよく擱へて呉れるに違ひない——と、心を安じもし期待もしてゐる。

全 國 著 名 遊 覽 地 御 案 內

御料理旅館



奈良三笠山麓  
電話 七二〇〇番

大垣公園城畔高台

本店 吉岡樓  
電話一〇八・七九番

有六廣間常設舞台各種宴會好遊 市街一際ノ  
佳境ヲ占ム  
遊老公園遊覽最中中央高台

支店 千歳樓  
電話一八二〇七番

別館 流芳閣  
全 感呼亭  
最中光榮アル歴史有シ、櫻楓香月四季眺望  
網佳 遊覽圖指定、級旅館トシテ設備完全

關西線笠置驛ヨリ三丁

笠置館

御料理 笠置溫泉  
旅館

京都府笠置(木津川畔)  
電話 四五六番

理想ノ避寒好適地  
相州湯河原溫泉

伊豆屋旅館  
電話湯河原園二二番

全別館  
電話 一二三番

地震には絶對安全

東海道に尤も近き山の溫泉

別天 地  
伊豆新古奈溫泉

見晴山の 大湯

松仙閣白石館  
電話伊豆長岡二九番

三島驛、沼津驛より自動車、電車  
にても廿分 地震の絶對安全地帯

本欄ノ廣告ハ左記  
へ御申込下サイ

『道頓堀』廣告取扱所

劇場廣告社 中江三省

大阪市住吉區阪南町東三  
東京市赤坂區靈南坂町八

# 創立三十一年

## 曾我廻家



家柄と黄金の力、其上腕が  
無ければ到底頭の上りつこの  
ない芝居道へ、好きからう  
つかり飛び込んで、時の名優  
中村珣郎先生（現在の眞田  
相園畫伯）のお弟子になつて  
中村珣之助と名乗つたのが十  
六歳の四月、夫れから恰度十  
ケ年、可成り苦勞も續けまし  
たが、謎の國の様な芝居國で  
一生うだつの上る見込みがなく、同  
氣相求むる友達で中村時代と云ふ下  
廻りと相談して（後年の十郎）笑ひ  
専門の芝居が無いを幸ひ、其頃ヤツ  
ト喜劇と云ふ文字が雑誌にチラ／＼  
現れたのを、其儘借用に及んで大膽  
にも、喜劇曾我廻家五郎十郎ともつ  
たいない古英雄の名を藝名として生  
れましたのが明治卅五年の冬、銘酒  
で名高い伊丹の芝居小屋で、初湯を  
使つたので御座います。名も無けれ  
ば資金もない私共、誰一人振り向く

者も御座いませうか。私一代の悪戦苦闘時代、靜かに眼を閉  
ぢて考へますと、人様に申上ぐるさへ恥しい生活を一年有餘  
續けて居ました。夫れでも親類縁者に背いて迄、役者になつ  
た男の意地喝へて死んでも、廢したくないと死線の一步前迄  
來ましたが明ければ明治三十七年、日露の風雲急を告げて世  
は芝居處の騒ぎでなく、さしも名にしおふ道頓堀も、各劇場  
共木戸を閉めて、火の消へた様な淋しさに、今の太夫元豊島  
寅吉氏の紹介で時の仕打に話し込んで浪花座へ出演させて貰  
つて、初日の蓋を明けた日が、日露宣戰布告の當日、私一生  
を通じて忘れられぬ記念日で御座います。芝居不振の折柄な  
ればこそ、門閥の八釜しい時代に、座長となつて道頓堀の檜  
舞臺を踏む光榮、役者冥利の有難き、山の芋が鰻になつた處  
の騒ぎじやない、今思ひ出しても身が震える。思ひ出の語り  
草として、其御目見得の狂言五種を申上げて笑つて戴きた  
無論其當時は脚本もなければ、種本一トツ今手元に残つて居  
ない古い記憶を辿りまして荒筋文けを書いて見ませう。

第一、式三番叟 引ぬきだんまり二場。第二、狒々退治  
第三、滑稽勸進帳二場。第四、無争の號外二場。  
第五、壺坂二場。以上五種。

第一が大變です、式三番叟なんて大きな題目を番附にか  
いてあつても無論衣裳がある筈がありません、私が丁稚役、砂  
糖の袋を風呂敷につ、んでお使ひに行く道で俄雨に逢ふ趣向



# 思の出

## 五郎

砂糖の紙袋を頭に冠つて立烏帽子、其風呂敷が肩にかゝつて三番の素袍、故十郎が桶屋の輪替へやで傍に居合して、有り合ふ手桶を敲に見せて、夫れで三番の真似を演つたのです。(これは古い洒落本?に在つた種であつたと淡い記憶が残つて居ります)引抜きだんまりと來たら益々、御笑ひ草です。無論華麗を競ふ「だんまり」の立派な衣裳がある筈がない、故十郎と相談して「だんまり」は暗闇だ真黒で演らうと苦しい智恵を絞つて例の山神の祠も、遠見の山々も全部真黒に仕上げて貰つた、流石物馴れた大道具師も呆れながら、其大道具を組んでくれた、御約束の鳴物でからみ合ふ六部、田舎娘丑の刻参り、武者修業、伊達奴の役々の連中は、全身墨で塗り上げて目許りパチパチと光つてゐる印度の化物の様な形で、真黒の背景の前で探り合ひ、中央の祠の中から私がお約束の大百日鬘(無論張ほて)全身黒で塗り上げて柱卷の見得、考へて見ても下さい、哀れにも可笑しな趣向です、幕切は例に依つて花道六法の引込み、詮方つきて宙釣りに真黒な衣裳のみすつほりと上へ引き揚げて自分は花道附際で大見得、夫れが赤の禪一つで真裸、揚幕から十郎が走つて來て面明りを

サツと出して呉れる、私が六法を踏む代りに裸でステ、コを隔つて引込んで幕。第二の狝々退治は例の岩見重太郎の狝々退治です。御約束の山神の場で、私の岩見重太郎が狝々退治をする内に、股を狝々に噛みつかれたり顔を引掻かれたり、滑稽な立廻り本位で見せて居ます内に、警官が來て狝々も重太郎も捕縛されて道具が變ると公判廷、直ちに私が羽織を裏返しに着用して、早替りで辯護士席へ着きますと、十郎が裁判官、故人になつた箱王と云ふ男が検事役、吹き替への岩見重太郎と狝々が公判廷に立つて居ると云ふ珍場面です。餘談に涉りますが、此の箱王と云ふ人が、私が弟子と云ふ者をもつた最初の男で、後に澁谷天外と共に、喜劇樂天會を組織した中島樂翁です、其の男の檢事の論告、私の辯護士の辯論は全部義太夫、俗謡、時の流行歌の文句許りでやるのです、最後に十郎の判決があつて幕。其の判決は狝々が重太郎の股を噛んで抉りとつたのと顔を引掻いたので、十一年の懲役、重太郎は無罪とす、其理由は股喰ひ三年搔八年、都合十一年、重は無念で罪になり兼ねると云ふ愚もつかぬ洒落、今思ふてみても冷汗が出ます。第三は滑稽勸進帳、是れは又馬鹿々々しいものです。荒筋は、養子に行つた常公と云ふ男が芳原へお辨慶をつれて行きたいが、廊の鎌倉屋と云ふ女郎屋に借金があつて行けない、殊に今日は節季であつて、仲の町の大門に節季所を設けて、時貸しの左衛門が出張してゐるので通れな

い。そこで養子の常公は義経公、辨慶は無茶仕坊の辨慶さんで、問答をして節季所を通つて見様と、他の野良息子四人を四天王に見立て、勸進帳もどきになるのです。舞臺が變ると仲の町大門を背景に例の關所好みの高二重で、時貸しの左衛門が構へて居る處へ、例の通りの運びで主従六人、山伏姿で現れて、勸進帳を讀んで問答になつた末で幕と云ふ趣向、時貸即ち富樫が故十郎、辨慶が私、其一部だけを一寸書いて見ませう。

富樫「やア〜云ふなく〜錢なくして此大門通る事、罷りなからず候。辨慶「金錢の所持は無けれ共、今宵はあれが達引で、身揚りいたす書狀參れり、此狀こそ肝腎の狀なり。富樫「ナラ肝腎狀を所持とかや、辨慶「如何にも。富樫「然らば、此處にて讀み上げ候へ、節季守、これにて承らん。辨慶「ナラ肝腎狀を讀めとかや、心得て候唄へ元より肝腎狀のあればこそ、宵の内より往來で書いたる一本取り出し、肝腎狀と名づけつゝ、高々にこそ讀み上げたり一辨慶「夫れ辛いくと思ひ暮せば大事のお客も嫌になり、姉さんの袖にかくれ……云々。先づ、こんな駄洒落で堅めたものです、問答の一節を一寸序でに……

富樫「女郎買ひに行く身が物々しく山伏業者の身形は如何に辨慶「テ、おやまと寝るを山伏といふ。富樫「頭に戴く頭巾は如何に。辨慶「可愛々々の居續けに、二日酔の鉢巻の用意

なり。富樫「かけたる袈裟は。辨慶「今朝の別れのきぬぐに、涙を拂ふ意氣なすゞかけ。富樫「八ツ目の草鞋は。辨慶「浮世八方の借金を踏み倒す心なり。富樫「帶せる太刀は。辨慶「これぞ案山子の弓に等しき威にはくの料ならず、お前。正宗、あしやさび刀、お前切れてもあしや切れぬと云ふ色男の金看板なり……

とても愚にもつかぬ、馬鹿々々しいものです。

第四に移りまして無筆の號外は、時局もので、辻まちの車夫の溜り場、無筆許りの俵やが集つて日露戰爭の話しに熱狂してゐる處へ、連戦連勝の號外賣が通り、號外を落して行く俵の中で平假名文字だけ讀める車夫の松公（十郎役）が、物識り顔に、其平假名を拾ひ讀みして、口から出駱羅目で戰地の狀況を嘘でかためて説明する。無筆の車夫連中は益々熱狂してゐる中へ、通りかゝりの西洋料理店披露の廣告を手渡して這入る仕出しがある（蝶六役）車夫の松公は、其廣告紙を矢張り新聞號外と思つて、平假名のみ大聲で讀み上げる、故十郎が喜劇の甘味かつたのは、こんな處に有つたのです。文字で書いては判りますまいが、一寸記して亡き面影を思んで見ませう。「ハテ、とう〜オムレツが日本へやつて来たな、こいつが第一今度の戰爭を起した悪い奴じや、ヤツ此號外の様子は、ハムサラダも日本へ來てゐるな、ヤア〜、カツレツもライスカレーも來よつたナ、次ぎに書いてある、

アスパラカスは露探じやがな、此奴は生かして置けぬ。偉い奴が知らぬ間にやつて来てゐるな。一言一句観客席は、笑ひの彼であつた。聞いてゐる車夫仲間の久公（私の役）血の氣が多い丈けに口惜し泣きに泣くと云ふ場面。其處へ通りかゝりの書生の仕出しがあつて、其廣告紙をながめて「何んだ、角の西洋軒かい」と一言云ひ捨て、行つて仕舞ふ。久公は角の西洋軒が如何したと松公に聞くので、ウムと詰つて口から出鱈目「其西洋軒に皆かくれて居るらしい」と聞くと其儘、血氣の久公は松公の止めるをふり放して國家の爲にと、命かけて西洋軒へ乗り込むと云ふ處で舞臺が廻るのです。二場目は西洋軒の食堂の場面、二三のお客が洋食を喰べて居る處へ血眼になつた例の久公が乗り込んで来て、さ、オムレツを出せッ、隠したつて駄目だ、ライスカレーを此處に出せ。さアスパラカスを突き出して来い、と荒れ狂ふのです。呆氣に取られて食堂ボーイが其の度毎に一皿宛もつて出る。夫れを殘らずた、き割る、其度毎に見物ぞを熱笑して、大喝采終りは來客、ボーイ等を對手に大立廻り、夫れは手の合した立廻りでないために、誰も彼も毎夜手傷の絶間がない。幕が閉ると、大抵の連中は手足に突傷、摺傷がある部屋へ歸ると皆其手當をする。今も私の足に残つて居る古傷は其時の記念です。後ち新國劇で賣り出した澤田正二郎君の樂屋に必ずアルコールだの、膏藥だの繻帶が用意されてある事を聞いて自分の昔を

振り返つて無筆の號外を思ひ出しました。幕切りは松公が詫びに来て、洋食の名で落をつけて幕と云ふ寸法。第五の壺阪は私の澤市、故十郎のお里で、眼があいてからお里の美しさに、澤市が益々氣が廻つて愔氣深くなると云ふのが荒筋、矢張り普通通りの貧乏世帯で兩眼を抵當に高利貸から金を借りた其返却が出来ないので執達吏が澤市の兩眼を差押へて、強制執行の封印を兩眼に張つて仕舞ふ。其封紙の爲に元の通りに眼が見へなくなる。此方が眼明きより樂だと澤市が貧を苦にして井戸へ投身する。夫れで自然に差押への封紙が水に濡れてはぎとれる、再び眼あきになつて、例の萬歳で矢張り日露戰爭をあてこんで、大勝利の蹄を一座總出で見せて打出しと云ふ趣向です。世にまぐれ當りと云ふ事が御座いますが、此時の「無筆の號外」が時局に投じて大當り、夫れから一寸芽を吹きまして神戸、京都、名古屋、東京、大阪とウカしくして居ります其内に恰度今年で三十年。駄作ながらも七百餘程の狂言を御笑覽に供しまして、踏みなれた中劇場で記念興行夢と過ぎし昔を思ひ出されてほんの思ひ出の端丈け笑ひ草に書いて見ました。尚行く手には険しい笑ひの山路、例の汗みづくで昇つて行きます私。大阪が産んだ曾我廼家と思召し、永久に御指導をと御願ひ申して筆を擱きます。

# 他のそ袴襦長

水 浩 井 中

早いものだ、もう三十年

にもなるのか、その旗揚げ  
早々、曾我廼家兄弟が道頓  
堀の初演から殆んどずつと  
観てるが、さてといつて  
纏つた記憶は持つてゐない  
何かないかと考へてゐると  
「塚の富藏」といふ命題が  
ヒョイと頭に浮んで来る、  
次ぎに「水路技師で△りま  
す」といふセリフが耳の底  
から響いて来る、さうかと  
思ふ仲の好い垣一つの隣同  
士、貧乏同士、その一人の  
六兵衛へ降つて湧いた幸運、それに氣を悪くした五兵衛、管  
鮑の交り一朝にして仇敵の如くなる、あの淺ましい人の心  
の縮圖が幻に立つ。

◇

兄弟時代——五郎外遊——歸朝から分離——十郎歿後、喜劇  
の名から五郎劇へ、久しい三十年の夢、脱退して東へ赴つた  
もの、生きてゐても消息を明らかにしないもの、幽冥相隔つ  
たもの、曾我廼家の變遷は道頓堀の明治、大正、昭和の演劇

史でもあらう。

◇

初期の五郎——といふのも變な言葉だが勿論洋行前のこと  
五郎もまだ若かつた頃、よく色町へ出かけた、當時色町に於  
ける五郎の人氣湧くが如し、その人氣の中から「五郎はんの  
長袴袴」といふ一種の流行言葉があつた、そのわけは着道樂  
であつた和田君、いつも變つた洒落れた長袴袴を着て出かけ  
たものである、和田君が胡座をかいたりする立居にひらく  
と遊い着物の裾や袖口から長袴袴が仄めく、それが来る度に  
違つてゐた。

◇

當年着道樂、凝つた揃へを好んだ和田君も外遊から戻り  
だん／＼年齢を喰ふにつれて色町への進出、次第に氣まゝに  
なる、長袴袴などに關心を持たなくなる、さうして一と昔二  
昔以前の和田君よりも今の和田君の方がぐつと人間に味か  
出て來た、長袴袴などは消えてなくなつてゐる。

◇

五郎に新しい喜劇脚本を授けたがる人があるが、それは  
五郎をよく知らぬからで、この人は人の作つたものを忠實に  
演出の鞭によつて動く人ではなく、どうしても自作自演でな  
いと本氣にない、だから五郎を愛する人は五郎に面白いネタ  
の供給を計つてやつてほしい、それが好いと立つても好くな

いと云つても既に五十何歳となつた男、さうして過ぎ越し方の峻しい山河を自力で乗切つた強い自信が人一倍強い男、左向いてゐるを力づくで右向けようたつてそれは無理だ。

◇ これからの五郎劇はどうすれば好いか、五郎自身はどういふ道を踏むべきか、今の調子、今のイキで宜しい、安心して堂々と進みなさい、——といふよりは外はない、前述の如く無理な方向轉換を強いたら五郎はマゴ／＼してゐるうちに腰が曲つてしまふだらう——だから理屈ぬきで成る相談がこれだ、唯、五郎の脚色帖の内容を豊富にすべし、面白く面白く五郎の爲めに願ひます。

◇ 五郎は幾多の人を作り上げ完成した、その中でも蝶六といふ一つの人形をあれだけ光らせるようにした、五郎の甚五郎振りに大きな禮讚の辭を與へても好いと思ふ、蝶六の特質を見極め、蝶六を活かせる道を知り、蝶六にピタリとはまる役を振當て、蝶六の舞臺の生命の糸をしつかり握んだ手際は立派な一演出として五郎の存在をみとめる、土に埋れてゐた寶玉を五郎といふ名璞人が掘起し、切磋してその光輝を思ふさま光らせたのである。

◇ 五郎といふよりも私事に渡ると和田君と話しかけ度い、親

しみのあるこの人に關する話筆は中々多いがそのうちの一二をならべて見よう、洋行から戻つた時、堂島の兩側、路次構への宅へ訪問すると玄關にセッター種の大きな犬が毛皮の上へベタリと寝てゐる、僕が履脱石に立つて聲をかけるとう今にも飛びつきさうだ、驚いてよく見ると石膏が何かで作つたのである、オヤと思つた途端に襖をがらり。  
「アハ、、、ビツクリしやはりましたか」  
と和田君の四角な顔が現はれた。

◇ 今の本宅にあるかどうか知らぬが鈴木松年講伯の遺筆にかゝる二枚折で片双には又平が驚いてゐる圖、片双には紙からぬけ出た大津繪の人物が若干、松年得意の豪宕な霸氣満々たる筆で愉快に描かれてゐた、その頃逢阪山の又平舊居とやらいふ土地に和田君の別荘があつた、それに因んで先生はこの二枚折を非常に愛藏してゐたことがあつた、故人十郎も趣味家であつた、さうしては趣向が好きだつた、繪葉書にせよ何か一と捻りひねらぬが氣がすまぬといふ概があつた、十郎に比べると又違つた意味で五郎も亦かうした好きには拍案の珍趣向が少くない、十郎ほどトボケタ處はない代りに何處かにシイクな好みがある、句あり

紺染の襦袢も昔春の人





角座成美團上演

北村小松作

# 上陸第一歩

X Y Z

I 港街の波止場附近

II 同じ港町の酒場

III バラツクの安宿の二階

IV 波止場附近

V バラツクのやす宿の二階

倉庫裏の汚い船着場だ。海が暗い人待顔にパイプを燃らして居た貨物船カーヂフ丸の司厨長野澤はブルヂョア政の子分のヨタ者が迎へに來たので政の「菓」へ出掛けます。政と野澤とは、密輸入なんかで互に利用し合つて居るので、船から

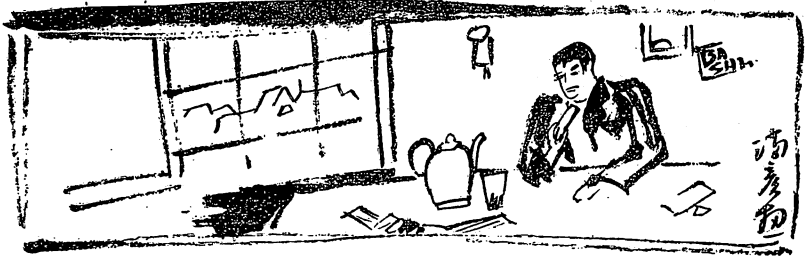
上つて來たカーヂフ丸の火夫坂田に若い火夫の戸村が二分貸して呉と頼みます。野澤のインチキに掛かつて金を捲上げられたので

一圓貰つて、蹴飛ばされて、戸村はすつ飛んで行きました。其跡で坂田は身投した女を助けたが女は助けられたのを口惜しがります。何故オセツカイに助けた、と云ふのです。妙な女だ。

坂田も流石に面喰らつたが、強情を張る女を抱える様にして町の酒場まで連れて來ました。女が相手になら無いので、坂田は一人で麥酒を飲み乍ら鼻唄を唄つたが、フトまた女に對つて、家や、死なうとした氣持を尋ねるが返事は突慥食だ。

野澤と一緒に來たヨタ者が、坂田と女を見て引返して行くと、野澤は二人の傍へ寄つて札束なんかを見せ女を手に入れ様とするが利き目が無い。坂田に渡りを付けるが顔で駄目です。

芝居みまた



浦島太郎

ブルヂョアの政がヨタ者と一緒に来て女を引立て候とします。女の名はおさと、此女は政が上海へ賣込まうとして居る玉なのです。

其れを遮つた坂田は、政が取出したピストルを尻目に咳をきり、野澤が麥酒瓶で撲らうとする刹那、女が投げた麥酒瓶に電燈が消えた闇の中、政と野澤を打ちのめして引揚げます。

翌る朝、船員向きの安宿で坂田が眼を覺ましたのは九時頃でした。女は、朝飯代りに海苔巻等を買つて来て、坂田の起きるのを待つて居ました。

坂田に對する女の氣持、態度は全く變りました。男と云ふ者は穢い者親切ごかしにしては弄み者にしやうとするのが男の手だと思つて居た是迄の考へが坂田に依つて破られたからです。強い坂田に纏り度くなりました。

女は、昨夜から迷惑をかけたのを坂田に詫び、身を守る爲に死なうと

した事や、生れは北海道の網走で、實母の死後、養父の爲に賣られ候とした爲、幼い妹を残して網走から逃出し、諸所を渡り歩く中に男から絶えず迫害されたが、今這身を守り通して來た事を話し、海の生活を捨て、一緒に陸で暮して呉、とき坂田に頼みます。

さう斯うする中に、司廚長の使ひに戸村が來ます。倉庫裏の波止場へ來て呉れと云ふのです。乗船は今夜の八時だが、歸つて來られるか何うか分らないので、財布ぐるみ女に金を遣つた坂田が波止場へ來ると拳銃の首、坂田は地上に倒れたが、死んだものと信じて近寄つた、政の拳銃を奪つて素早く跳起き、政をはげしい一撃で突倒すと野澤を冷い海へ叩き込んで宿へ引返してしまつた。政の咄付て女の張番に來て居たヨタ者は、裸に引割かれて、炭を塗られて黒人の様な姿で突出されました。

坂田が戻つたので女は全り嬉しがつて甘えます。最う船に乗つちやア嫁だ、一緒に陸で暮ませう。

家を持つて、庭へ花を植て……あなたが勤めから歸つて來たら首つ玉へかぢり付けて上げるわ……と希望を先の先へ持つて行く然し、女の樂い計畫も、戸村を連れて來た刑事に依つて破られます。坂田が突飛ばした機にブルヂョア政が頭を石で打割つて死んだからです。

女は政の「悪」なを刑事に訴え、戸村も證人に立ちますが、兎も角も下手人として引かれねばならぬ坂田です。坂田は男らしく刑事に連れられて行く事になります。お前さへ待つてゐる氣な……一寸した航海へ出たと思つて待つてねえよ！ おいら、お前の所へ歸つて來る！」と女に言い残して……。



演上團美成・座角

『月魄』新釋脚色演出考

山上貞一

『上陸 第一步』

豊岡佐一郎

『月魄』新釋脚色演出考

山上貞一

『月魄』の女主人公が倭文字だとは記憶してゐる。日光陽明門の華麗なる大道具にあつと驚いたこと、故高田實の川上將軍が「馬鹿」と大喝した語言も耳に浮ぶ。然し、その筋なり登場人物の性格や演技を思ひ起すにはあまりに遠い薄い記憶である。

それが現代的に新釋するには最も好條件だといふので、角座三月興行の上演脚本としての『月魄』の新釋脚色を私に命ぜられやうとは、物事を辨へない事の方がよいといふ好適例だ。

さて『月魄』は書くまでもなく菊池幽芳先生の傑作で、新派

の獨參湯である。一日の通し狂言、これ一つで客が呼べたといふ結構なものだ。それを短時日に「三時間もの」として書く。机に對つて原作を讀んでみた。この作は菊池先生が明治三十九年東京滞在中の作で大正十三年に「幽芳全集」の第三卷として出版せられる時に、著者は明治三十九年の著作當時を回顧し更に大正十三年に到る約二十年間を轉觀して時勢の進展と共に變化した日本の理想的女性の目まぐるしい活躍に驚異の眼をみはつてゐられる。そして自作の上にも『月魄』の女主人公倭文字が「百合子」となり「女の生命」の倭文字となり「白蓮紅蓮」の露路となり、更に「彼女の運命」の絹子となつたことの進化を語つてゐられる。そして、その點に於て『月魄』は多少の意味を持つ作品だと自負されてゐる。

それだけに『月魄』の女主人公倭文字は時代的な女性である

日本が持つ最も古典的な婦人かも知れない。と共に小説『月魄』が上巻を藤乃の巻、下巻を倭文字の巻とされたる如く、藤乃といふ宿命觀の強い——特に戀愛上の運命論者は、明治三十九年當時、自然主義文學興隆期に在つては、最も時代的な女性であつたことと思はれる。

そこでこの小説が脚色されて上演されたのは（甚だ勝手乍ら大阪を調べる参考書が手許にないので東京の事を申上げる確か

大阪毎日新聞連載の小説だから、東京日々にも連載されてゐたことと思ふし、東京の記録には俳優の代表的な人々を見るので東京で演じて大阪へ来たか、大阪で演じて東京へ行つたかの何れだと思ふ。まして三十九年の作を四十一年に東京で上演されてゐる點を見ると大阪から東京への順であらう。即ち明治四一年五月三崎町の東京座で上演されてゐる。高田の川上將軍、河合の田鶴子、秋月の正木、木下の倭文字、藤澤の松平、深澤の梅小路といった新派としては記録物である。通し狂言で全十場といふ大物だ。脚作者の名は解らぬが仄聞する處では佐藤紅線、小島孤舟の兩氏であつたらしい。

私は原作と數種の既演脚本とを讀んだ。當時の新派が定つたやうに園遊會で序幕を開けてゐる如く『月魄』も梅小路邸の園遊會で、久松が倭文字を見初める。倭文字を争ふ者が多いのと久松の家に嫉妬深い血が流れてゐるので破鏡の嘆を見る。六年經つて田鶴子の懺悔で久松が後悔して謝罪する。川上將軍が所謂「久松、貴様は憎いが孫は可愛い」と許してやる段取りには變化はないし、又當時の觀客を驚かした日光陽明門の大道具はきつちり使用されて、初演以來『月魄』は今日まで幾度、幾十度、上演されて好評を博して來たのだ。

流石に新派全盛期の作だけに役が實によく行届いて渡つてゐる。男では川上將軍、久松、正木、梅小路、松平、鍋島、野澤女では倭文字、田鶴子、藤乃、石子、おいそ、夫々違つた性格

で活躍する。新派の脚本としては好箇のものだ。

これを一九三一年の現代に新釋するとした時、最も困難な點は、日露戦役直後の如く今日軍人の存在が社會的關心を惹起しないといふ事であり、更に貞操觀念の確固たる倭文字の如き女性も今日の尖端婦人でないといふことである。だが陸軍少將男爵川上益荒の出ない『月魄』や倭文字の出ない『月魄』があるべき筈がない。いくら現代的に新釋するとしてもそれ以上の自由は脚色者に與えられてゐない筈である。

處で、原作を讀み既演脚本と對照して活路を見出した點は、原作の方がより現代的な可能性の多い事である。即ち新派劇『月魄』として今まで取扱はれてゐない所に、小説『月魄』の面白い點が十分残されてゐる事である。私が倭文字と同じ點もしくはそれ以上に活躍すべく書いた田鶴子は、現代が有つフラツパアとしても決して不自然でない解釋をし得る女性に菊池先生は書いてゐられる。それを頂いたのである。

従來田鶴子は大詰で乞食の如く零落して兄に懺悔するのであつて、雪の積つた向島堤で軍服の久松に蹴られてゐる繪看板を見た事を覚えてゐるが、私はこれをダンサーとして取扱つてゐる。「ダンスの出で來る月魄！」菊池先生は定めて眉をひそめてゐられる事と思ふが、序幕を女塾音樂室の控室に持つて來た點から、原作にはあまり力點の置かれてゐない、陽明門や華嚴の瀧を避けて、久松の家と芝山内で原作にかなり忠實に、わざ

とらしい四季袋を中にしたトリツクを避けて、現實的に進行させた點はお認め願へることと思ふ。

そして、最近流行のレヴュー式な劇作法を外して、白に重點をおいた新派劇としてみた。強いて主張すれば新新派劇の手法を幾分でも試みたいといふ愚考である。ために脚本は少し理論めいた事にもなつてゐるが、俳優諸氏の新工夫になる演技は充分演劇としてのふくらみを與えて、脚本の缺點を補つて下さることと思ふ。

歌舞伎劇が岡本綺堂先生に依つて新歌舞伎劇として甦生したやうに、新派がその全盛當時の名脚本を新釋上演することは決して悪いことではないと思ふ。と共に新釋の際は潔く舊套を脱して新生の上に充分の研究を要することは言ふまでもないが、昔を懐しむ意味で先代相傳の型を片鱗の如く窺ふことも、芝居として面白い事ではなからうか。

どうも私はこうした場合、新釋脚色としても、演出者としても、適當な人間でなかつたことを、遅々ながら謝罪する詫び狀長々と依而如件。

## 『上陸第一歩』

豊岡佐一郎

北村小松氏作『上陸第一歩』——これはパンクロフト主演の「経育の波止場」の劇化だと云ふ事である。この映畫は見てゐないので、原作との對照は出来ないが『上陸第一歩』は立派に日本の芝居である。或意味に於ては、その構成に於て、その性格に於て、從來の約束を守りすぎると云つてもいい、戯曲である。芝居に出來てゐる芝居である。演出家の左程苦心を要しない戯曲だとも云へる登場する人物が、演技者諸氏に容易に理解して貰へる性格であるだけでも、演出者は非常に助かる。

たゞ映畫の劇化であり、恐らくは上演を目前にして製作されたらしく思はれるので、北村小松氏の作にしてはラフな處がある。小松氏のいつもの細い神經が行届いてゐない處がある。その點演出者として、自由な修正と補足を加えただけで、大體リアリズムの手法によつて、原作に極めて忠實なプランを立てた併し總體に私はこの戯曲を明るく朗らかな調子で一貫したいと思つてゐる。最後のおさとなど、特にセンチメンタリズムを排して、未來への明るい希望に燃えてゐる氣持を主にした。坂田と熊澤、坂田とヨタ者の立廻りを非寫實的なるコミカルな映畫式に行つて、明るさを強調してゐる。この點観客の軽い微笑を狙つたところだ。

さて、配役の件であるが、一貫してよく演技者の持ち味に可つてゐる様に思はれる。これが何より演出者として心強く思はれるところだ。どこの芝居でもそうであるが晝夜二回興行の積

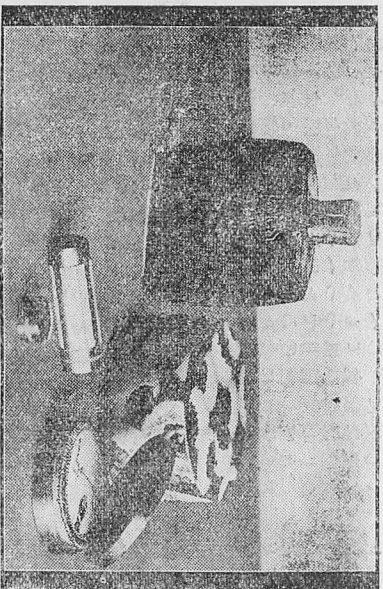
古位困難な事はない。まして今度は巡業地の京都であつたものだから色々不備な點が多かつたので多少懸念を感じないでもなかつたが舞臺稽古の今日になつてみれば大體によくまとまつてある。それと云ふのも、先に言つた、芝居に出來てゐる戯曲であるからかも知れないが、演技者と戯曲の性格が實によく一致してゐる點を主張したい。

観客諸君にとつては既に馴染み深い藤村、都築、伊志井、梅田、石河の諸君は、斷然各自の妙技を發揮して大向ふを唸らすことであらう。尚、一座の幹部俳優諸君が極めて輕い仕出しの役を欣然として買つて出てゐるなどは演出者として實に喜びに耐えない。

さて、舞臺稽古も滞りなくすんだ。稽古時間の不足から來る懸念は一掃されて、すがすがしい只守である。この分だけたら明日の初日には、舞臺の袖から不安な氣持を抱いてちつと見てゐる様な、あの演出者の氣分をさらりと忘れて、觀客諸君と共に手を打つて觀劇出來ると云ふものだ。

——一九三二・三・八——

——舞臺稽古のすんだ後——



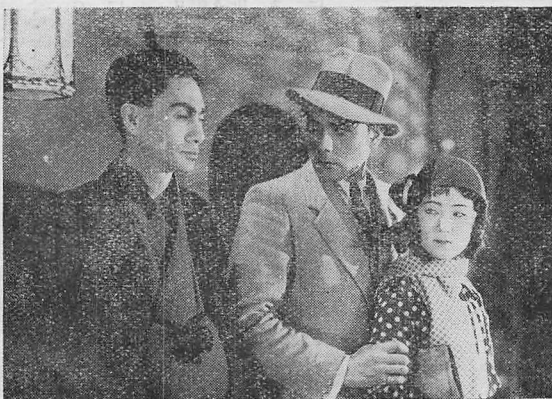
LES PARFUMS DE COTY

水品粧  
化粧粉  
コタパケル  
¥1.15  
¥1.35

PARIS FRANCE

コティ





【解説】

上山草人歸朝記念の作品、蒲田總動員で作成される超特作北越羽越の某地を口ケーション地と内定、米國篇、日本篇の二部より成る大作。米國篇には特に米國映畫界の名優マックス・スーレン、フリス・スマーチンの二氏が出演してゐる。又草人の愛犬チエロが一役を得て活躍してゐる。主演する草人の扮装には彼一流の苦心が歴然として表はれてゐる

【略筋】 宏莊なる邸宅を構へ、幾多の會社を支配し、外面的には一大成功者と見える山口銅吉にも、人間として惱みはあつた。物語

はまづ彼の家庭より語らねばならぬ——彼の長女操子は父の使用人である社員陽一を夫としてゐた。

長男修は妻不二子と共に海外へ留學中だつた。又次男の雄は或る事情のもとに家出してゐた。彼は情婦眞弓をもつてゐた。末女は櫻子といふ、近々陽一の朋輩たる謙太郎と結婚する事に決つてゐた。好人物の謙太郎は奸智な陽一の傀儡のやうなものだつた。

今日は修夫妻の歸朝する日だ、操櫻の姉妹陽一謙太郎達が賑かに出迎へに行つたのにも關らず、銅吉は會社創立の披露會へ出席するとして、その姿を埠頭へは見せなかつた。

銅吉は耽溺した、又姿をさへもつてゐた。愛兒が歸朝する日も妾と同道して風月の食堂などで遊墮な時を過してゐた。處か偶然に此處で雄と眞弓に會つた。流石に愛兒懐しさで雄の歸宅をすゝめた、けれど父に對して極度の反感をもつてゐる彼は嚴として應じなかつた。陽一は時には雄の云ふまゝに資金などし

ヤ キ

山口 銅吉	上山草人
長男 修	岡田時彦
その妻 不二子	光 喜三子
次男 雄	鈴木 博明
その情婦 眞弓	田中絹代
長女 操	八雲惠美子
その夫 松山陽一	河村黎吉
次女 櫻子	龍田 靜枝
その夫 關谷謙太郎	奈良 眞養
秘書 吉田	渡邊 篤

た雄を樂籠中のものとして置くことは、銅吉に取り入る賢明な一策だと考へてゐた。謙太郎は陽一の奸策に「深慮遠謀だね」と感心した銅吉がとりわけ雄を愛慕してゐることを陽一は夙に知つてゐた。歸朝した修夫妻はその夜も父に會はず、不二子や櫻子はそれを不満に思ひ又寂しくも感じられた。しかし修のみは父の性行を理解し、寧ろ若氣の昂奮から家出した雄を心よからず思つてゐた。その後の或る日、雄は酒場で客に怪我させた爲め拘引された、銅吉は金で釋放して貰はんとした、雄は父の情愛を拒絶した、この父子は斯くして何處まで反目して行く。冷たい留置場にある雄は亡き母の幻想に戀慕の涙を流してゐる間もなく彼は眞弓の心盡して釋放された。彼女が指輪などを金に換へての心情に雄は感謝した。金、地位、名譽、權力何れもつまらぬ今日までの雄の生活こそ眞實に偉いのです——眞弓はしんみりと語つた。ビルディングの社長室、銅吉の前で山林寫眞の説明してゐるのは旅裝の山林課長である。

銅吉の事業が斯く擴張せんとしてゐる時、櫻子の結婚の日は一日／＼と近づいて來た。操は愛兒泰夫を連れて妹の爲にと寶石店へ出掛けた。途上で雄に會つたが、雄の言葉には云ひ知れぬ哀愁と深刻さがあつた。操子は父の秘書吉田とよくダンスホールなどへ行つたボーイ姿の雄はこれを見て姉の爲に忠告した「子供には母が一番大切なんだから——」操子は不快な顔を見せた。東京會館の幸ある夜關谷家と山口家との結婚披露宴が催されたこ

# 愛よ人類と共にあれ

映畫物語 蒲田映畫

原 監 キ 同  
 作 脚 ヤ メ  
 色 督 ラ  
 村 島 桑 長  
 上 津 原 井  
 德 保 原 信  
 三 次 郎  
 郎 昂 一

れを知つた雄は眞弓を連れて會場へ急いだ。妹の榮ある結婚へ兄として參列を望んだ雄も服が非禮だとの理由で拒まれた。亡き母の不幸を考へる時、富豪の息として贅澤し得ぬ雄は眞弓を連れて力なく歸つて行く。  
 樺太大森林の事業は測量の違算などが發表されて此處の一大支障は出来せんとした。陽一は謙太郎の新婚旅行先きを訪ねて彼に樺太行をすゝめた。暗雲に捲はれつゝある樺太からは工場罷業の色濃厚の手紙が後を繼いだ。鋼吉は遂に樺太行を決意した。そして彼が北海道まで行つた時、樺太森林の大山火事の號

外を見た。彼は驚愕した、鋼吉は失望のドン底におとされた。  
 それに引きかへて陽一は樺太から歸京した謙太郎に「萬事は旨くいつた、山鋼の金はそつくり此方へ流れ込んだぞツ」と云つた。樺太の大罷業及び大山火事には彼等が何等か秘めた醜事があつたのだ。鋼吉は極度に煩悶した、子供達は一切父に構はなかつた。鋼吉は斯うして歸のみ徒らに老いて行く——急轉直下の奈落に喘ぐ鋼吉が最後に求めるものは死のみだつた。しかし彼の死を引き止めたのは意外にも不肖の子雄だつた。  
 米國西部の農場に夕陽は靜かに沈んでゆく新生に入つた

ス ト  
 工場長 宮川  
 技師 春日  
 同 山本  
 工場社員 兼田  
 番頭 株式係  
 鋼吉の妾  
 藝者 君 勇  
 片山(庶務係)  
 齒科醫 濫 川  
 操の子 泰 夫  
 藤野 秀夫  
 水島 亮太郎  
 宮島 健一  
 小林 十九二  
 新井 淳  
 筑波 雪子  
 花岡 菊子  
 野寺 達一  
 齋藤 達雄  
 高峰 秀子



雄、眞弓の和かな面よ！ 初孫を抱く鋼吉の面を見よ長かりし苦惱のあとを幾條かの皺線に残して、心からの喜悅があふれてゐるではないか——(朝日座三月封切)

寫眞 (上)草人の鋼吉・傳明の雄。  
 (下)傳明の雄

帝キネ現代劇部超特作映畫

# 堀江六人斬 妻吉物語

監督 曾根純三・脚色 山内英三・撮影 三木稔

## 梗概

大阪堀江の廓に起つた凄惨な六人斬りの話、それはまだ私達の記憶に生々しく残つてゐる、その物語の發端は日露戦争の少し前である、道頓堀の小料理店二葉の娘お米は、その美貌と天才的な舞を堀江の山梅樓の主人長二郎に認められ養女として山梅から舞妓の被露をしたのであつた、美しい獲物として廓の赤い灯の下に起伏して三年——その頃山梅には長二郎の妾お勢が入込んで家事を切り廻して居たが生來浮氣な彼女は帳場を勤めて居る長二郎の明新二郎を誘惑し、初光と呼ぶ子供さへあるのに、大阪を駆落した愛妾に裏切られた長二郎の心は



日毎に荒んで行つた、そして、ある夜——即ち明治三十八年六月廿八日の夜——その夜は珍らしく機嫌よく堀江座に芝居を觀に行つた彼——だが觀た芝居が悪かつた——伊勢音頭戀雙双

白熱化する

## 『妻吉物語』の撮影

傑作「女給」に引續く曾根監督の力作として全國に期待されてゐる堀江六人斬り「妻吉物語」は森靜子、杉狂児、鈴木澄子、牧英勝、中山介二郎らオールスターメンバーで大混雑を惹起した堀江遊廓のロケに引續いて晝夜兼行セツト進行中であるが昨二十五日劇の發端である六人斬慘劇の場面を撮影、遂に森靜子（妻吉）は兩腕を斬り落された、物語りはこれからクライマックスに達する譯で、近々撮影は終る見込みである、森靜子は兩腕を縛つたまま、不意に手を出さない稽古をしたり、口で字や繪を書く練習のため毎夜撮影が終つてから懸命になつてゐる。

## ツゴシ

「妻吉物語」で腕なし女妻吉には色々苦心しいつそ帯の下へ兩腕を突込んでしまつてはといふのでその通りにやつて見たが胸が太くなつて格好がつかず落第結局伏の中へアラリと手を下げてゐるのが無難といふ事になつたので、カメラが廻り始めてからトタンにひよいと手を出すので相手役の（男衆）杉狂児びつくりして「驚かされるとこつちちは手も足も出ないぢやないか」

同じ「妻吉物語」で妻吉の森靜子と彼女に



「油屋十人斬で  
ある——降り續  
く梅雨に萬二郎  
の心は、いやが  
上にも焦燥へ引  
ずられてゐた、  
その上に目のあ  
たり見たのが凄  
惨な十人斬りの  
芝居、歸つて來  
た彼は、自ら焦  
立つ心を鎮める  
生残つたのはお米の妻吉一人、然も、彼女の兩腕は無惨にも斬り落されてゐた——外は嵐——  
兩腕を失つた女の生涯、その悲惨さは肯げやう、辛ふじて生命を取り止めた妻吉がその後求め  
た生きる道は寄席藝人、亦或る時は寂しい旅藝人で明けても暮れても涙の哀れな女は、暗い人  
生の行路をたどたどしい歩みを運んで行く、——何時果てるとも白雲の流れのまゝに住み行く  
浮世の旅路、彼女の幸福は何處で待つやら……彼女の半生こそ人生の苦惱を語る一篇の哀史で  
ある。(辨天座三月封切)



ために酒を呑ん  
だ、その酒が彼  
を牢獄から斷頭  
臺への導きにな  
ると誰が知らう  
？——眞夜中酒  
に狂つた萬二郎  
の刃は家中を狂  
亂せしめた、殺  
されたもの五人  
その中に細い王  
の緒消へもせで

配 ● 妻 吉 ● 森 靜子 ● 明治 郎 ● 中山 介 ● 二郎 ●  
由 どん ● 杉 狂兒 ● 藤 村 ● 淺野 節 ●  
お せ い ● 鈴木 澄子 ● 忠 藏 ● 橘 光 造 ●  
● 萬 二 郎 ● 高 島 登 安 次 ● 岩 ● 舟波 邦之介 ●  
● 平 ● 牧 英 勝 ● 三 樹 光 造 ●

初めて人生の愛を教へた夫の貧乏諾家(牧英勝)とが宿望漸く報いられて文展に入選、夫妻相擁して喜ぶ場面、收が靜子をひしと抱きしめると靜子の妻吉が感極まつて「入りましたわね」收が「早かつたねえ」この芝居に氣が入つて見てゐる者ほろりとさせられてゐると、杉狂兒が突然ぶつと吹き出し曾根監督に叱られながら「だつて男と女が抱き合つて入りましたわね、ワシヤもう仕事をやめるよ」で皆初めて氣がつき森靜子まつ亦になる

「女給」で忽ち賣り出した帝キネの水原玲子去る夜大阪清交社で紳士連の前に試寫の後一場のエンゼツを試みたが、何がさて居並ぶのは京阪神の紳商名士ばかりさすがにたぢんととなると思ひのほか悠然とおちついて酒々虹の如き氣焰、歸つてから「最初身體がふるへて仕様がなから、眼をつぶつて「女給」の時アルデオア詩人の吉水から妾の小夜子が金をとつてやるシーンを思ひ出して、その氣持で場内をヘイゲイしてやつたのよ」

二月「妻吉物語」座談會を催した時、本物の妻吉が杉狂兒を一日見るなり「まあ！ あんたは由どんの息子はんやおまへんか」と如何にも懐しさう、所が杉の役といふのがその男衆の由どんなので、彼それ以來の祇園通ひをぶつゝりとやめ、この頃では遙々神戸のダンスホール通ひと宗旨を變へてゐる、とは嘘のやうな本當の話。

# 河童又介

下加茂特作

廣瀬五郎監督



江戸で船頭稼業の河童又介は女房おたつの故郷金澤へ、女房にせがまれてやつて来た。折しも金澤の町は秋の大祭でにぎわつてゐた。かどわかしの名人濹兼と平兵衛はこの祭りを幸ひにきれいな女子をかどわかさうと、侍姿で町の雑踏にまぎれ込んでゐたが、フト美しい女連れの又介に目をつけいんねんを附け始めたが、對手が江戸ッ子のチャキチャキ、その上相馬大作の子分として町人乍らも剣道にも相當の腕の立つ又介だつた。濹兼平兵衛は二人もかゝつて一人の又介の爲めに散々ひどい目に逢はされ、衆人にあざげられた。遺魂に思つた二人は一度は這々の體



で逃げ出したが敵討ち、又介同導の女房をかどわかしてやらうと相談した。

この道にかけては名人の二人はまんまとおたつをかどわかしたてであつた籠におたつをのせてドン／＼逃げ出した。と、この打合せをしてゐるのをフト聞き込んだ浪人者があつた。一方女房を見失つてしまつた又介は驚きあわて、血眼でさがしまわつたが一向に見當らぬ。斯くて町を大分出外れて野中の一軒家の前迄で籠が來かゝつた時後から呼びとめた者がある。籠に近寄つた浪人者はいきなり刀を抜くと平兵衛に一刀を浴せた。續いて逃げやうとする濹兼にも一刀、そして前の流れに突落した目にも止まらぬ早業——この浪人者こそこの近在を荒し廻る殺人鬼藤堂平四郎だつた。籠から出たまゝ、ベツタリ地面に座つてゐるおたつに振りかへつた平四郎は「怖いか」と云つたおたつの「怖はゾーツと冷たい水を背筋に流された以上だ。平四郎は尙も「亭主持ちか」と尋ねた、そして「面白い、亭主が大名であらうと乞食であらうと俺にとつては何んでもない、どれ行かう、一緒に來い」と云ふのだつた。おたつが逃げやうすると平四郎の眼ははや殺氣を帯び出した。斯うした情景をおびえつゝ、戸のすき間から見てもたつはこの家の主漁師渡世の捨松だつた。捨松はおたつの危険を知ると素早くおたつを家の中へ引連れ、兩戸をビシヤリとしまつてしまつた。しかし平

四郎の力は強かつた戸は忽ちこお開けられ捨松は外へ突出された。美しいおたつは未知だつたが、あんな美しい女を悪魔の様な男に手ごめにされるかと思ふと恐ろしさも忘れておたつを救はふとした。斯うした時どらしてもおたつを見出す事の出来なかつた又介がシヨンボリとして通りかつた。捨松に助力を頼まれた又介はおたつの危急を知ると、捨松と協力して戸をこお開けて家の中へ——おたつはすでに殺人鬼の爲めに犯される所だつ

た。平四郎は又介が不意に現はれた事を驚きはしなかつた。彼はニヤリとして刀を抜いて又介をおどした。又介もひるまなかつた。二人は殺氣を帯びて立ちかつた。しかし又介は今うっかりしてこゝで生命を落すやうな事があつては相馬先生に濟まぬと思つた。しかしこのまゝにしてはゐられない。丁度そうした時、殺人鬼平四郎の出現を知つた捕手役人が馳つけたので、平四郎はおたつに充分の未練を残し乍らも又介達をそのまゝに逃げ出さねばならなかつた。江戸、又介が女房おたつと妹とおむらちと三人船宿を營む家だつた。おむらは寄席へ行つて留守、店のものはゐない又介とおたつの二人きり。

そこへ尋ねて来たのは相馬大作の腹臣關良助だつた。何故か良助は殺氣立つてゐた。即ち大作の家に又介の弟大吉は兼ねてより下男として住み込んでゐたが、遂ひ不了見にも大作の秘密を幕府に賣り主家の金と大作の短銃を持ち出して昨夜逃亡してしまつたのであつた。良助はこれを大吉一人の業と思へず又介も共謀者と思つて場合に依つては又介を斬る覺悟でやつて来たのだつた。しかし又介には全然覺えのないことだと

原 作 長谷川 伸  
脚 色 惡 麗 之 助  
撮 影 片 岡 清  
河 童 又 介 月 形 龍 之 介  
藤 堂 平 四 郎 環 歌 子  
又 介 女 房 お た つ 天 野 双 一  
關 良 助 正 宗 新 九 郎  
又 介 弟 大 吉 廣 田 昂  
濫 兵 兼 永 井 柳 太 郎  
平 兵 衛 風 間 宗 六  
捨 松 北 原 露 子  
お た つ 妹 お む ら ち  
女 中 和 歌 浦 糸 子



いふ事がわかつた。良助は大作の危急を又介に打明けた。そして實は大作の命を受けてやつて来たのだつた、それは大作は又介夫婦にこの災ひをかけたくなかつたので、二人のことはどこ迄も秘密にしておくから彼らにはやつて捕へられる

様な事なく何事も知らぬ存ぜぬで押とほせといふのだつた。何時に變らず大作の心づかひに感激する又介夫婦に別れて良助が去つてから間もなく、この家の入口にのめり込んだ者がある大吉だ。とすぐ\*



つた。そこへ一度歸つた筈の良助が役人に追はれて歸つて来た。役人と知ると平四郎は何も彼も捨て、逃げ出した。すでに大作は役人にとり圍まれ武士として切腹して果てゝゐたのだ。先生の死を知つた又介夫婦は自分達丈助からうとはしなかつた。二人は大吉が盗み出して来た大作愛用の短銃でお互の胸を貫いて美事に最後を遂ぐる……

\*その後からノツソリ道入つて来たのはいつぞやの殺人鬼平四郎だつた。大吉は四平郎が斬つたのだ大吉の懐中の金をねらつてゐたのだつた





蒲田

▽野村組 原作菊池寛、脚色柳井隆雄、潤色野田高梧、婦女界誌連載「壊けゆく珠」を製作と決定した。この映画は三月の映画界を風靡すべく製作される蒲田超特作である劇中にはカフエーの女給生活があるためこれを研究すべく監督、技師を始め川崎弘子光喜三子、伊達里子等十餘名は銀座のカフエー十数軒を見學視察した。又最近頼に人氣を蒐めて来た月田一郎、江坂静子が大役で活躍してゐる事も特筆したい。

▽池田組 「日本女性の歌」撮影中。

▽島津組 「愛よ人類と共にあれ」製作中、近く東京市内の某名家の邸宅を借りて雨中の撮影をする筈。猶ほ配役中及川道子は病氣のため田中絹代と變更した。

▽清水組 舊臘着手したが「銀河」製作のため一時中止してゐた「そりや實感よ」ニエロ「番槍」改題を完成した。目下撮影中の「混線ニタ夫婦」の技師は松本正次郎と變更した。

▽重宗組 「尖端に立つ女」撮影中、鎌倉、東京のロケーションを終へた。

▽五所組 「夜ひらく」を完成したので近く「大森林」に着手豫定。

▽齋藤組 病臥中。

▽佐々木組 次回作品準備中。

▽小津組 同上。

▽野村員組 「夫よなせ泣くか」撮影中、猶ほ配役中、原純子は江坂静子と變更した。

▽西尾組 次回作品準備中。

▽成瀬組 同上。

▽石川組 原作脚色伏見晃、喜劇「出戻り歓迎」製作中。殊に泥棒に出演の各優は扮装

に異常な珍奇の苦心をこらしてゐる。

▽松竹ニユース完成

▽第四十四輯 松竹ニユース班樺太へ出發。本門寺の節分會。アラビア丸の衝突。一高記念祭。清和健兒園發會式。女子スキー選手權大會。初午。

▽第四十五輯 建國祭。御下賜の鶴七年目に降つた帝都の大雪。大磯驛の貨車衝突。東京市聯合少年團の兎狩(特輯)全日本スキー選手權大會(樺太豊原)。

▽第四十六輯(國際篇) 伊太利ニユース。獨乙ニユース石鹼の出来るまで。桃の節句。雛まつり。

下加茂

▽井上組 目下月形龍之介主演にて「南國太平記」の中篇を製作中であるが同映画は近

日完成後、高田浩吉主演にて秋篠珊次郎作の「坊や殿」(假題)の製作を開始する豫定である。

▽星組 福岡日々新聞連載中の「美丈夫左京」を完成。次回作品準備中。

▽冬島組 「吹雪に叫ぶ狼」完成後休養中。

▽犬塚組 昨年末より製作中であつた高田浩吉主演の「忠次郎草鞋」は都合にて一時中止、近く長二郎主演にて「十六夜清心」の製作にかゝるべく目下自身脚色中である。

▽渡邊組 「小猿七之助」以來休養中であつたが「美丈夫左京」に次ぐ長二郎映畫「紋三郎の秀」を監督することに決定。目下その撮影中。

▽衣笠組 歸朝第一回作品の「黎明以前」を引續き製作中であるが、完成は三月末が或は四月上旬になるであらう。

▽悪組 病氣のため長らく休養中だつた月形龍之助主演にて、長谷川伸氏の傑作「紅蝙蝠」前後篇の製作に着手した。自身脚色、撮影は岡谷英一。

### ◎新入社紹介

▽大林梅子 マキノで賣出し、日本映畫界有数のエロ女優として知られた、大林梅子はマキノを退き二月から新らしく下加茂へ入社した。エロ女優不足の下加茂に於ける彼女の今後は大いに期待すべきものがあらう第一回出演は「紅蝙蝠」と決定した。

▽小泉嘉助 かつて日活にあつて喜劇俳優として知られたカボちゃん事小泉嘉助も大林



と前後して入社、今後は良き助演者として出演、下加茂映畫に新たなるユーモアをもたらすことであらう。

▽藤島和子 昔は高柳和子と云つた彼女はその後東亞に轉じ藤島和子として賣り出しつゝあつたが、二年振りて下加茂へ復歸した。

▽山田あげみ 東京生れのお嬢さん、三一年度の新スターたるべく下加茂へ入社。近代的风貌の持主多分第一回出演は「坊や殿」となるであらう。

## 帝キネ

▽並木組 兼て撮影中の「霧の中の復讐兒」は「復讐こぼれ刃」と改題。

▽印南組 兼て撮影中の「京都行進曲」は「京都行進曲鳴川夜話」と改題。

▽木村組 木村富士夫原作、水原玲子主演の「都會病患者」を撮影中。

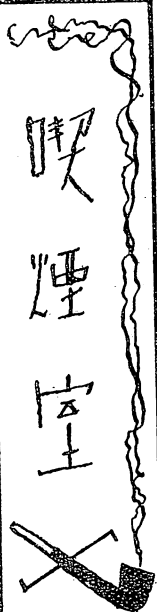
▽壽々喜多組 市川百々之助主演の影法師姉妹篇「巷の木鼠」を撮影中。

▽押本組 同氏原作脚色の「森の石松」次郎長喧嘩日記第三話を明石縁郎の主演にて目下鋭意撮影中。

▽山下組 上島量原作脚色の「江戸金看板」を岡徳磨、結城重三郎主演にて目下撮影中キヤメラは池田傳太郎。

上のスナップは「黎明以前」撮影中の衣笠監督と林長二郎

読者から読者へ



規定  
皆様のための解放欄です。振  
つて御投稿下さい。用紙はハガ  
キ字體は明瞭に二十字詰のこと

◇双葉様へ——山口さんのプロマイ  
ドなれば第一劇場當時のが少し手も  
とに御座います。もし御入用でした  
ら次號の本欄で御返事を。(浪速區  
KS)

◇二月號を見て新聲劇フアンの多か  
つた事をうれしく思ひます。山口俊  
雄、辻野良一兩君のため後援會を組  
織しては如何でせう？ 共鳴して下  
さる方は來月の本欄にて。(港區  
不二男生、浪速區KS生)

◇難波の菊吉様、僕も大の志賀廼家  
黨で御座います。淡海一座は三月上  
旬巡業にて下旬より四月中旬まで浪  
花座出演かと存じます？ 菊吉様を  
始め、志賀廼家フアンの皆様何卒本  
欄での御交際を。(京都 壽郎)

◇僕、好劇家の一人として種々の劇  
團に親しんでをりますが、中でも新  
國劇が一等好きです。好劇家諸兄姉  
よ！ 前途遼遠なる新國劇のため、  
大いに後援をせやうではありませ  
んか。(京都 池岡純洲)

◇私、我童様が大好き、あの美しい

チャイミングなみ聲にすっかり参つてしまひ  
ましたの何卒我童黨の皆様お仲間にお入れ下  
さいました末筆ながら記者様、私達の頁を造つ  
て下さつた事を厚くお禮申上げます。(新町  
玲子より)

◇私は大の松島家黨です。すし屋のお里、石  
切梶原の梢などほんとに何とも云へませんね  
この優渾特の娘形は他優の追従を許しません  
我童黨の皆様何卒本欄で御交際下さい。(大  
阪 あづま)

◇松島家黨の皆様どうぞよろしく……私達の  
好きな東様のためにおふるひ下さいませ、我  
童様どうぞ……いつもお若くしてお美しく……  
おからだをおいとひ下さいませ。(島ノ内  
むらさき)

◇諸君、舞踊の好きな連中はお互ひの集團的  
交際に依つて研究したいと思ふが如何？ そ  
の一例として本誌に舞踊欄の設立を切望する  
諸君大いに編輯者に口説かうではありませ  
んか。(京都 悪太郎)

◇阪東壽三郎氏等の更新第一劇場を浪花座で  
拜見してすつかり感激してしまひました。如  
何しても駄つてをられないので投書します。  
皆様！ 大阪に於ける唯一の新劇團第一劇場

下加茂特別通信

◇……衣笠氏が歸朝第一回作品、「黎明以前」  
はその後鋭意撮影中だが、約三分の一程の撮  
影を終へた。この映畫撮影の爲め撮影所では  
最大限の日費とあらゆる設備の改造新設を行  
つてゐるが、此の程更に衣笠氏の考案に依る  
新式のクレインが出来上つた。前後左右上下  
と自由に移動出来るもので、クレインの先  
にはキヤメラ一臺、キヤメラマン一名、ライト  
二臺が乗るといふ大がぶりなもので、このク  
レインを使用して近く素晴らしいモブ・シ  
ンが撮影されることになつてゐる。モブ・シ  
ン撮影には獨歩の手法を持つ衣笠氏が、こ  
の新らしい機械を得たことは鬼に金棒、どん  
な素晴らしいものが出来るか期待ものである  
◇……目下朝日新聞連載中の長谷川伸氏の  
「紅蝙蝠」を映畫化中の松竹京都撮影所のオー  
プンステージ一杯に牛町のセットが作られ、  
主人公の長八郎が十數人の牛方を相手に牛車  
を振りまわして大暴れを演ずるシーンの撮影  
が行はれた。

長八郎に扮する月形がこのシーンで振り廻  
す牛車はこしらへもの張ボテだが、それで  
も相當重いそれを振りまわしてそこから中の家  
をアチこわすので力も要るが面白い。散々つ  
ばら暴れ廻つておいて、こんな愉快な撮影は  
なかつた。  
いくらこわすのが芝居だからと云つてよく  
もまあこんなにかわしたものだ。悪監督、無  
惨な撮影終了後のセットを眺め乍らポカんと

を、吾々大阪人は大いに支持しなくてはなら  
ないと思ひます。(日本橋 香取)  
◇道頓堀のくれないさまへ——右太衛門さま  
が結婚をなすつたので、それであなたは失戀

◇神戸のSS様、妾の好きな成美園が道頓堀  
へ歸つて参りました。伊志井様も石河様も  
そして都築様も元氣で舞臺をつとめてをられ  
ます。何卒永久に本欄でおつきあひ下さいま

僅々三圓三十錢で面白い『道頓堀』が一ケ年讀める

皆様の御聲援と御支持とに依つて益々隆昌に赴きつゝある本誌は、昭和六  
年を期して茲に新なる飛躍をせんとしてをります。

就きましては、此際皆様の御愛顧を賜つて一層の發展を遂げたく本誌は大  
々に豫約年極の愛讀者を募集することになりました。本誌を御支持下さる  
皆様は是非振つて御如入下さることを伏して御願ひ致します。

特に左記のやうな年極の讀者特典を設けてありますからなるべく小爲替の  
書留にて御拂込み下さいまし。

## 道頓堀 讀者募集

豫約者 一ケ年分 —— 金三圓三十錢也

同 半ケ年分 —— 金一圓六十五錢也

(郵券代用一割也)

特典 豫約にはすべて送料が免除してあります。豫約讀者は本誌主催の  
凡ゆる會合催し物に無料若しくは割引を以つて出席することが出  
來ます。特別號も特に普通値段の割になつてをります。その他皆  
様の御満足せられる幾多の企てが澤山あります。

本誌愛讀者は一人残らず豫約者になつて下さい

したんですつて、あーらいやだ、氣の小さい  
方ね。そんなことなんかすつかり忘れて、私  
達の長二郎ファンになられてはいかい？ お  
すゝめするわ。(神戸 春子)

せ。(道頓堀 芳子)  
◇芦屋の八重子様、僕、大の長二郎黨なんで  
す。プロマイドも澤山持つてをります、何卒  
本欄で御交際の程を。(和歌山 幸天)

してしまつた。  
◇……林長二郎の「美丈夫左京」に次ぐ作品は  
久し振りで股旅もの、子母澤寛氏の傑作「紋  
三郎の秀」と決定、兼ねてより準備中のところ  
此の程愈々製作に着手した。監督渡邊哲二  
脚色佐々木李郎、撮影伊藤武夫。

博奕打ち仲間の繩張り争ひ、竹槍繩だすき  
で血の雨を降らす、これが今迄の定石だが、  
こゝに描かれる秀五郎は、その繩張り争ひを  
サイコロに依つて決した男「博奕打ちは博奕  
打ちらしく」生きるべきだといふ彼自身の人  
生觀を以つて世の中を叩切つてゆくところ、  
將に在來の股旅物語の一種として近來の興味  
ものであらう。その變り者の紋三郎の秀には  
林長二郎が扮し、こゝに又新たな一風を示  
してゐる。

◇……「南國太平記」中篇を製作中の井上金太  
郎、前篇以上の傑作にしようとする大車輪で撮影  
を進めつゝあるが、井上金太郎ハタとつまつ  
てしまつた。と、いふのは東榮子の綱手が保  
瀬英二郎の月丸に口説かれて後、床を並べて  
寝る迄の惱ましい濡れ場に来たのだ。  
原作に依るとその場面が思ひ切り細かく巧  
みに描かれてゐるので井上監督すつかり慾を  
出してしまつてどうぞして原作通り素晴ら  
しい濡れ場を見にせいといふ悪るい了見  
斯くと聞いた事務所の偉い方「もつての他」  
とそのシーン削除を申し渡したが、「たまには  
道樂もさせて下さい」と井上監督、押し切つ  
てたう／＼撮影にかゝつたが、サデどんな素  
晴らしい濡れ場が見られる事やら。

喜劇の発展と改良

# 二ツの喜劇團

家庭劇と淡海劇

桂田 曉香

喜劇と云へば、何故か正統の演劇から、かけ離れたもの、如く、輕蔑の眼で見られる傾きのあつたのは、どうした譯だらう。

喜劇俳優と云へば、何か一段低い存在として考へられ、一流の劇作家は、喜劇を書く事を、ろよしとせなかつた時代すらあつた。

さう云ふ事が、吾國に於ける喜劇の發達を遅らして居る。今でもまだ喜劇を純正なる演劇と考へて居ない人達が、劇場にも、観客にも相當多いやうである。

では何故かう云ふ考へを、人々が抱くやうになつたかを、先づ考察して見る必要があらう。

日本古來の演劇と云はれる歌舞伎劇に、どう云ふものか、喜劇の脚本と云ふものが頗る少い。喜劇的要素を盛つた脚本すら、さう多くはないのである。

## 更第一劇場に寄せる

阪東壽三郎等更新第一劇場の浪花座に於ける三月公演を前にして、大阪唯一の新劇團として萬丈の氣を吐く同劇團に對しての御意見なり御指示なりを諸家に求めましたところ、御繁忙の折にも不拘早速懇切なる御回答を賜りましたる段、茲に厚く御禮申し上げます。

——到着順——

### 壽三郎君の方向轉換

東光改メ 今 戒 光

ジャーナリストテックな東京の新聞は、壽三郎氏の更新再興を、猿之助君一黨の「運動」に對立させて、可成りセンセーショナルに問題を取り扱つた。何所からさういふ根據を見出したものか私は知らない。しかしながら少くとも壽三郎氏の再興は、關東方面ではさういふ見方をし、その見方の根本には壽三郎氏の立場を反動化と見做して居るかもしれぬ。

私は猿之助君の旗擧げを決して左翼的運動の一

多くないと云ふ事は、多く書かなかつた事であり、多く書かなかつたと云ふ事は、受けなかつたと云ふ事にも考へられない事はない。

一つには、幕府の掟が、嚴格だつたために、其伸びる可能性を失つたのかも分らない、此頃のプロレタリアイデオロギー物が、其筋の彈壓に、いびつなもののにさせられて居るやうに——

尤もモリエールの如き喜劇の天才作家が出なかつた事にも、よるであらうが——兎に角吾國の喜劇の發達と云ふものが、實ににぶい。

笑ひには、哄笑、爆笑、微笑、憫笑、嘲笑と、幾種類もの笑ひがある。

そして哄笑は朗らかさを、爆笑は怒りを、微笑は皮肉を、憫笑は同情を、嘲笑は奮起を伴つたりし、時に笑ひは、カモフラージュにも使用される。

凡そ人間は、幸福のクライマックスにある時、悲境のどん底にある時、ひとりでに、笑ひが泛んで來るものである。

で笑は、悦の象徴でもあれば、時には悲みの象徴である事もあるのである。それから、或人にとつては悲しみであつても、それを他の人が見た時、滑稽

であり、笑はされてしまふ事もよくあり得る。

それと反對に、他人が笑つて居るのを見て無性に憤慨し、裏面白くもないし——と叫ぶ人があるかと思ふと、それが又可笑しいと言ふので腹を抱へて笑ふ

人がある。

こんな譯で、笑ひと云ふものを解剖し、縦から見、横から見、表から見、裏

部とは見て居らない。猿之助、八百藏、小大夫の私生活の何所に一片の左翼の良心を見出すことが出來るだらうか。それは依然たるブルジョア俳優の驕つた生活に基礎付けられたものでもものであつて、單に若干のイデオロギー劇を上演——興行政策の上に於て——する劇團に過ぎない。のみならず私は猿之助君一黨の劇運動は、左翼の良心に驅られたものでは斷じてないと思はるばかりでなく、それは單に一つ虚榮心から成されたものに過ぎないと思ふ。

成程、猿之助君は人氣があつた。しかしながらその人氣は主として花柳界に、乃至、一艘アチ・ブル層に支持された人氣であつて、彼の演劇的良心に關してではない。それを猿之助君は誤算したのだ。即ち彼は、自らの人氣に眩惑を感じて獨立したのである。市村座の第一回旗擧げは、好奇心に依つて人は雲集した。けれど「アジアの嵐」とか「テル」などの骨抜きになつた左翼演劇は、彼を盛り立ててゐる人氣の嗜好とは凡そ違つたものである。果然、今日では客足がぐつと減つて來たのだ。

聊かの左翼的虚榮心は絶対に排撃されなければならぬ。

私は關西に行く度に、而して壽三郎君の芝居が開演してゐる都度、私はそれを色々な意味で注意深く見てゐる観客の一人である。

壽三郎君の行動が、而してそのレパートリーを一瞥する毎に、何時も感ずることは、彼等の一黨



から見ると、いろいろな笑ひがある。

然し私は、笑ひの解剖學者でもなければ、笑ひの哲學者でもない。

第一さう云ふ事を書くのが、本論の主旨でもないから、さう云ふ事は、専門家のフロイドにでもまかして置くとして、私の云ひたいのは、各多種多様の笑ひがあるに拘らず、喜劇脚本などに現はれて居る笑ひが、如何にも千變一律で深く急所を衝いた笑ひが無い事である。

私はそれを齒搔ゆく思ふ者の一人である。

とは云ふもの、善劇も以前から見ると、グツと向上して來た事を認めるに吝かではない私である。



今關西松竹に、二ツの大眾を目安に置いた喜劇團がある。

一ツは松竹家庭劇であり、もう一ツは志賀廼淡海劇である。

私は此二ツの劇團のファンでもあり、將來を見護つて居る一人でもあるが、

二ツとも、どう云ふものか、一生懸命であるに拘はらず大眾をアツピールするものが稀薄である。

俳優個人々々の演技もうまく、劇團としても纏まつて居るんだが、大眾をアツピールするものが無いと云ふのは、矢張り脚本難だと私は断定して、と思ふ。

尤もかうは云つても、あまり高踏的なものでは、観客は來ないだらうし、藝術至上主義を振擧して居る事も、興行と名のつく以上出來ない相談である。

然し私の云はふところは、さう云ふことではなくて、もつと大眾の心

が常に關東の演劇の刺激の許に、東京の芝居のレパートリーの影響の下に、それが成されてゐるやうな氣がしてならない。必竟、それは此度の更新再興に際しても、猿之助君等に對立するが如き觀念を與へるやうになつた根本的原因ではあるまいか。

それは壽三郎君の罪ではないかもしれない。彼の演出者がたま／＼さうした影響と刺激とから免れることが出來ないためであるかもしれない。若しさうだとするならば、私は斯る演出家を壽三郎君のために排斥しなければならぬと思ふ。

壽三郎君は飽くまでその地方色——大阪風の芝居を選び、演出する方が好い。第二の「澤正」にならうとしたり、關西の「猿之助」にならうとしたりしない方がよろしい。

今日まで見て來た壽三郎君は、私には正直のところ感服出來ない。愚劣な活動役者の芝居が道頓堀で大入滿員を取つてゐる時世に壽三郎君が今日までのレパートリーでは遂に骨折り損をしなければならぬのではないかと思つてゐた。彼は、さういふ點で、大阪の役者でありながら關東の看客が好む演劇を上演してゐたのだ。どうして成功する筈があらう。

左翼劇場や、築地小劇場の「芝居」は、東京でこそ若干の支持を受けるのだ。木偶人形のやうに鈍感で、享樂的な大阪人に絶對に受け容れられないところのものである。

それは壽三郎を生かす道は何であるか——と

を撫んだもの、大衆の心に迫るものを盛り込んだものを見せて貰ひたいと云ふのである。



倍て私の希望は、之位にしておいて、二ツの劇關の性質その他に就いて、少しばかり云つて見たい。

先づ家庭劇から云ふが、此劇團は重にインテリ階級、を目安に置き、脚本の選定其他いろくなプランがたてられて居るやうである。

だから變な操りなんかちつとも無く、演技なんかも極めて寫實的である。俳優も皆達者で、統一も取れて居る。

藤村秀夫、石川薫、米津左喜子、東愛子を失つた事は、同劇團として少し淋しいが、石井薫、春野音羽、都勝世、如月武子、守住菊子等、相等腕のある女優が揃つて居る事は、他の劇團に比較して心強い。

小織、十吾、十次郎のダツと芝居を引締める俳優に、天照の如き、芝居もうまければ、脚本も書くこと云ふ前途ある若者が、グループの一員として活躍してゐる等、力強い劇團である。

此劇團の事を書くに及んで、たつた一ツ淋しく思ふのは、番付に名前があり乍ら、最近ちつとも顔を見せない春日恵美子の事である。私は何時か、彼女の武者小路氏の「其妹」の妹を見た事があるが、實にうまかつた。

それ以來、すつと彼女を見護つて來て居るが、實に嫌味のない、藝風をもつた人である。

之は餘談だがそんな譯で實に纏まつた手頃の劇團である。

質問されるだらう。私は、關西の作家の作品を上演することだと思ふ。

關西の作家も亦徒らに關東の劇壇などに認められやうなどといふ小さい觀念に囚はれることなく關西の土地と人間とを驅使して、關西の言葉をもつて關西の役者を生かすことを考へなければならぬ。さうすることが壽三郎を本當に生かす唯一つの道だと考へる。

それは情痴の世界だけであらうか。私は、さうは思はない。近世日本に於て最高度の工業都市大阪は、政治的、經濟的、社會的、幾多の問題を孕んでゐると信ずる。何故、その地方色を生かしながら是等の問題を如實に取り扱はないか！

壽三郎はしかし、今度の更新再舉に於て、もう一度、蟬脱しなければならぬ。何人もの踏襲をしない演技を見せなければならぬ。

その再舉が、よしんば反動的であるにしろ、それは問題ではない。観點の相違、立場の問題に過ぎない。問題は、そんなところにあるのでなくして、壽三郎の正しい方向轉換が要求されてゐることだと私は言ひたい。

倉田啓明

第一劇場の失敗は自分の立場からいふと、脚本の撰定その當を得なかつたのと、餘り續けさまに

此劇團の特長として、必らず一幕か二幕考へさせられるお芝居が入つて居る云ひ換へるならば、餘韻を持つた劇が上演されて居る事である。願はくば、此餘韻を持つた本格的喜劇に、試みにアジプロものでもやつて見たら……と之は私の考へである。



もう一方の淡海劇——此方は、同じ喜劇でも、全然家庭劇とは行方を異にして居る。

以前は、此劇團もプロレタリアイデオロギーを香はしたものを手掛けた事もあるやうに記憶するが、最近は、たゞ大衆本位と云ふ事がモットーらしい。

歌を賣物にして居た時代もあつたが、小唄流行時代が來ると、もに、パツタリと、それもよして、今は地味に、演劇の眞髓を極める可く努力して居る劇團のやうに見受けられる。

女優を採用してから、此劇團も大分變つた。

然し、龜鶴だの、辨慶だの、依然として實に、味を持つた俳優である。

此劇團にとつて、最も有意義な存在は、樂太君の居る事である。

彼は實にうまい、枯れた藝風の所有者である。

淡海君は仲々頭のいい、人らしく、機を見るに敏なと云ふ點で、死んだ澤田君に匹敵するものがある。

此劇團への希望條件として、少しヒロイズムなものを手かけてはどうか……と云ふ事を提唱したい。

公演したことに因すると思ふ。今度の更生新興劇團の「補正成」や「嘆きの天使」などは、まづ結構なもので宣傳價值も多分に包蔵されてゐようが今後はどうしても脚本第一主義の勵行を期待したい。これは如何なる劇團に於ても絶對不變の眞理である。ではどんな脚本を演出すべきかといふ問題になるが、やはり大衆の一線に立つて、それにアツピールするものでなければなるまい。それは内容が清新で現代の人間に深い感動を興へ且面白いものを條件とする。と言つてもわれわれはお座りのプロレタリア劇とか稱するものは眞平だ。出來星のプロ作家のへらへらした脚本なんか、流行の尻馬に乗つてゆめ上演する勿れ。所詮はほんたうの意味に於ける、藝術至上主義でなければならぬ。社會や集團あるを知つて人生と人間とを忘れた藝術は滅亡する。

劇團にもイデオロギーが必要だといはれるが、そのイデオロギーは須く藝術至上主義に立つものでなければならぬ。壽三郎の更生劇團に寄する言葉は、これに盡きる。

だが、實際日本の創作脚本にはいふものがない。劇界は何よりも脚本難時代である。この點からいふと、小説や映畫の脚色は、決して賞めたことではないのだが仕方がないのだらう。世の劇作家よしつかりしると、自他ともに激勵奪起を促す所以である。

## 目標を定めよ

堀 正 旗

編劇者の方から、浪花座三月興行出演の阪東壽三郎等第一劇場の更新再興(新時代の劇團としての)に對し、此際忌憚なき意見を書けといふ書面を受け取つた。

新時代の劇團として、更新再興するといふのなら、先づ初期の第一劇場は何故に解散したか、といふことを考察する必要がある。

初期の第一劇場は何故に解散したか。これには幾多の理由があるであらうが、要するに新時代の劇團として新鮮なるべきその特質を失つたからである。そしてそれには二つの原因がある。一つはマンネリズムに墮した自慰的件品の上演、他は種々なる俳優の寄り合ひ世帯なるが爲めに、舞臺に統一がなく、従つて観客を感激せしむるだけの團體としての魅力の排除、この二つである。

だから更新再興の第一劇場は、よろしくこの二つの缺陷を補ふべき筈であつた。然るに上演脚本の問題はまだ観劇しないから論ずべき時期に到達してゐないが、新聞に傳へらるゝ眞觸れは、やはり依然として混成俳優である。この混成組織が止むを得ないものであるとすれば、統率者は一座の統一と融合とに

極力努めなければならぬ。そしてそれは可能のことである。即ち全員が一つの目的意識に目醒め、團結することである。

新時代の劇團として存在しやうとするならば、時代との内面的連絡——即ち劇場の最初の前程と最後の目的——を忘れてはならない。劇場の物質的及び觀念内容の轉變の絶えざる過程はそこから開始される。新時代の劇場は常にその時代の表現であり、切迫した状態の下にあつて、時代の發動機ともなり、形式ともならなければならぬ。しかも時代そのものは、決して或る形而上的な、宿命的な、量り得ざる存在ではなくて、それは實に各社會の内部に於ける階級闘争の所産物であるのだ。全く意識的に時代及び時代を形成しつゝある諸力の鏡たらんと努めること、これが新時代の劇團の歩むべき道である。觀衆が一つの劇團の社會的構成を決定するのは、その劇團の特色が、その精神的指導によつて保持されてゐる場合であつて、それを失へばその存在價值をも失ふことになる。しかも今日一つの民衆演劇、又は民衆劇場なるものは存在し得ない。それは有産階級から労働者農民等までを一からげにした「民衆」なるものゝ共同體があり得ないのと同じである。

更新再興の第一劇場は、如何なる民衆中の觀客相を獲得せんとするのであるか。先づその明確なる目標を定め、而してその目的意識

の下に全員が團結し、統一することが急務ではないかと僕は思ふ。

## 壽三郎のために

北 村 兼 子

私はこの頃少しく商賈を變更した、そして今、立川飛行場に居るいままでの私の生活は風には大して縁故がなかつたけれど、一月十四日から今日までの私には、餘りに風に縁があり過ぎる。四十萬坪の荒い風、そして白い雪、風雪は完全に私の額を變革してしまつた美しい朝曉の空、五彩の雲、芙蓉峰が千年の白を頂に持つて格納庫の上に君臨して居る。

——私は毎日の生活をどんなに楽しんで居ることか——その時、壽三郎が再生して第一劇場を興隆にまで導くといふ報は更に、更に私を喜ばせて限りがない。

起つものに幸ひあれ！新しきものに光あれ！當代隨一と思ふ壽三郎の面貌を遙かに立川の上空から想像する。暫くは懐しい浪花座の舞臺を望むことも出来まいが、併し、私は三月興行のプログラムを見ることによつて充分自分自身の心を樂しませることが出来る。

起て壽三郎！そして關西劇團に新興の生氣を注入せよ！御身の存在は甚だ私たちを

樂しませる！  
遠く手をあげる！

### 伊藤松雄

壽三郎氏の御一劇場、更新再興される事は欣喜に堪へない。過去の運動に於ける錯誤を清算して新に改めて踏出さうとする氏に與へたい言葉は「拙速よりも巧遅であれ」だ。

外殻のみの新形式に迷はされることなく確りと踏しめた足で歩んで貰ひたい。徒らな傾向劇を採つて空虚な大向の喝采に惑されるな。飽迄、スタアシステムを進め。無力な演出者と稱する輩の概念的な思考に導かれるな。確固たる文藝部を設けて、上演戯曲の制定に時を吝むな。壽三郎で客を呼ぶか、それとも戯曲でか？ この戯曲こそ壽三郎でなくては……さう云ふ自信の持てるレパートリーを見せて貰ひたい。近年の拙作恩讐退分節（キング）天狗黨異記（戯曲改造）白粉の花（演藝畫報）信州と長州（舞臺）など一度は壽三郎氏の演出にまぢたいと思つてゐる。

明治文化モノなどにも壽三郎氏を生ずに足りる題材は尠くないと思ふ。病臥亂筆——（上落合の新居にて）

### 長谷川伸

壽三郎君。

今度の組織がどんな風か、一年何回の公演豫定か、それは知りませんが、九州巡業に出ることとはもとより差支へないが、それ以前に東京公演をしなくては成りません。そこまで今度は踏み進まれることを望みます。

### 生方敏郎

新時代の解釋による歌舞伎劇の更正、新しい演出法による新しい演劇の確立、わたしはこれだけを壽三郎に希望します。

### 新「大衆劇」へ

### 津村京村

一時解散になつたと聞いて、非常に残念に思つてゐた「第一劇場」が、今度、捲土重来の意氣を以つて更生する事は、ひと事ならず慶ばしく思ひます。その「更生第一劇場」への希望——それは今更冗くもいふ必要は無いでせう。古言に「前者のくつがへるを見て後者のいましめ——」とやら——前期第一劇場

ばかりではありません。今まで無数に起つては解消して行つた多くの新劇團！ 彼等のいけなかつた點をとくと思ひ合して、今後の前進に資すべきでせう。

特に考へて欲しい事は、第一劇場をして、徒らにインテリ好みの「研究室」たらしめないう様、今後は、大いに「新大衆劇」へ進出に目標を置いて貰ひたいと思ふ事です。勿論、こゝに言ふ「大衆劇」とは「低級」を意味するものではありません。言ふならば「新時代の大衆が見て、充分面白い芝居！」それなのです。

### 先づ意識ある社會人たれ

### 小野金次郎

第一劇場第一次の運動は、遂にいち度も見る事が出来なかつた。

此間大阪へ行つた時は、もう第一劇場の爲事はお仕舞になつてゐて、道頓堀の真ん中で會つた或人から今そこで石河燕に會つたが云々の言葉を何やら淋しく聞いた。石河君には前から知つてゐた丈に會ひたかつた。そして爲事をうんと話して貰ひたかつた。

でも、其第一劇場も愈よ更新再興されると云ふ。而も其第二次の旗あげが及び此三月だと云ふ。實以て結構な事だ。

おめでたうございませう、とたつた一度の面識ながら先づ壽三郎氏にお祝を云はせて戴く所で今度の再興だが、其プランに就いてはさつぱり聞く所がないので、今は只さうなる迄に事の運んだ事がおめでたいと云ふ以外になんとも云へない。が、よしやそれがどんなプランの下になされるとしても、妙くとも今度の再興を最も意義あらしめんが爲には、其中心たるべき壽三郎氏からして先づ意識ある社會人となつて呉れなくては困ると注文は出せる。

これは一例だが、米の値を知らなかつた投資者の存在も必要だつた。これからも必要だらう。併し求めやまぬ壽三郎氏はさうではあり切れまい。第一劇場の運動企画で見ても分かるが、それでゐて尙且つ、恐れるのは、時々壽三郎氏自身の心に、米の値を知らぬ方がいゝ、役者の心の還つて来るであらう事だ。併し今度こそそこを離れて、所謂歌舞伎を残すよりは、それは餘の人に安心して委せて置いて、自分は云ふ通新時代の劇團としての第一劇場の中心となるやうに努めて貰ひたい。それには、俳優は先づ俳優たる前に社會人となつて貰はないと困ると云ふのだ。からして始めて其舞臺から観客は今日を感じる事が出来るだらう。それが現代劇であらうと時代劇であらうと。と同時に大衆に受けたからと云つて、全然其構成様式の異つ

た映画から其ストオリイを借り來つてこれを舞臺に移さずともだ。

それから又、映畫界の人氣俳優を拉し來つて同じ舞臺で爲事すると云ふやうな、愚は今度こそ斷然避けて貰ひたいものだ。第一次の時を見た譯ではないが、その許されるかどうかは見なくても判斷される。

壽三郎は壽三郎の第一劇場を作らなくてはいけない。でなくてどこにその存在價值があるものか。

——樂んで三月の旗あげのプランを聞かうそして其結果を俟たう。

今度は其第二次の試みだ。其プランにエラがあつて、萬一それが第一次で既に行はれたものであつたとしたら、人達は今度は用捨しないだらう。

そこに今度の試みの面白さがあり、そこに人達は期待をかけてゐるのだ。

阪東壽三郎氏も、既にきのふからけふと多少ともに育つてゐなくてはならない筈だから

(六・二・二二)

## 『第一劇場』にのぞむ

ことのお答へ

關口次郎

態度としては一口に云へば積極主義の時代

と共に行ふ。——これなくしては、新運動としては、無意義でせう。然し、その裏に、いつも一本筋の通つたものを、持つてゐて欲しいと思ひます。新作可なり、古典可なり、又、極めて尖端的なるもの、大衆的なるもの、その出物の、種類を別に問ひません。が、唯、時の嗜好にのみ諂ふ、漫然たるあれもよしこれもよしでなく、その底に、座としての一貫した批評的精神、やらなければ居れぬのだとの熱意的な方向を、しつかりと持つてゐて欲しいのです。これ即ち演劇の公共的精神です。方向なく、熱意なくしては、何の爲の演劇ぞやといふことになりませう。飽くまで、堂々と、活氣をもつて、信ずる處に邁進されんことを希望します。

又一面、壽三郎君には、自ら特種の素質、藝の方向があります。これは又出来るだけ、生かせる方法をも考へなければ、座としても不利益に極つてゐます。これは當然内部的な問題として、顧慮されるべきことでせう

◇

森 ほ の ほ

先づその復活を喜ぶ。

第一劇場の壽三郎たらんことは、壽三郎其人の爲に切望するが、壽三郎の第一劇場であることは望みたくない。



壽三郎の藝風は謂はゞ直情で、生一本だがそれだけ變化に乏しい。従つて狂言の取合はせ、役柄の對比に少からぬ考慮を必要とする。壽三郎はシテ役以外、ワキ若くはツレの位置に在つて反つて光る場合が尠くないかも知れぬ。その意味から、シテ役たり得る助演者をも必要とする。

助演者（男優にしる、女優にしる）を主とする狂言一種又は二種を合せて三種若くは四種の脚本を選定することにした。

藝術價値の高い（興行價値ではない）新舞踊の一番ぐらゐ、成るべく毎回挿入して貰ひたいものである。

## 脚本のこと

中山 楠雄

問題は徹頭徹尾脚本に可有之候。脚本の選定に主力を注ぐことに有之、演出、演技はこの脚本によつて自ら生れるべく候。

しからば、如何なる脚本を選むべきか。容易のやうで、これ程難しきこと有之間敷、よく御勘考被下度候。

たとへば、所謂時代のトツプをきるものが左翼の芝居なりとて、採用いたし候ても駄目に有之、新歌舞伎劇の樹立と云ふ言葉も、あまりに漠然としたし候。壽三郎の芝居でなけ

れば見られぬ芝居、味、どう云ふものを盛ること何より必要に有之、獨創的な見地なり、見解なりを望ましく存じ候。しかも、観客なしには成立せぬものである以上、大衆に理解される範圍で行く必要あり、先驅して、大衆を引きつけるまでに或る時間を必要とするやうでは御損すべく候。斯く考へ来れば一寸よき案も浮ばず、具體的なこと申し上げ兼ね候へども、御歴々の名案を御参照の上、よろしく御慮置下さるべく候。

或は一步を譲つて演出に新解釋を持つや一方——たとへば、メイエルホルドとかピスカートルとかのやつたやうに新機運を造るのも一方法かと存じ候。猿之助は脚本選定を主眼としてしかもその點失敗仕り候、よく御勘考被下度候。



## 畑 耕 一

第一劇場の再興は結構である。要は演し物の勇敢なる選定である。俳優の仕勝手はいふものといふのが、まづこれまでの選擇法がそれよりも見物の見勝手のいふものを選定すべきだ。大衆に迎合せよといふのじやない。挑戦していふ。或は反抗までもしていふ。だが、見勝手を考へて頂きたい、意識的なものはいけな。そこには俳優も見物もなく、作

者と舞臺監督のひとりよがりのみが残る。作者舞臺監督はもとより尊重すべきである。だが、なによりも尊重すべきは見物である。

見物は單に舞臺で喜ばして貰ふものゝみを求めてはゐない。胸をどつかれて鼻血を出すやうなやつも、時には有難いのである。近來翻譯劇の流行が、劇作家間の問題になつてゐるが、この二三年、戯曲界の衰微沈滞は誰しも認めてゐる。劇作家が自分の不勉強を棚にあげて、ゴタ／＼いふのに耳を借す必要はない。いふものがなければ翻譯劇脚本劇多々益々辨ずべしである。

## 好配を求めて奮闘せよ

高安 吸江

第一劇場三月の更新再興は誠に慶ぶべきではありませんが、過去の失敗を汚しないうやう注意が必要です。例へば中山七里の如き成功といふべきものもあつたには違ひないが、壽三郎中心といふ點に不徹底な感が多かつたし、又石河蕪のやうな良い女優を見附けたにも拘らず、どうも好配偶といふより率利剋でないかと見られる事が多かつたのは必しも上演脚本のせいばかりではなかつたと思ひます。殊に映齋俳優などが交互にはいつて来ては和祭騒(?)をして又出て行てしまふなど、道者宿

の相住ひを思はしめたのです。

それで先第一に相性の良い女房を探し出して圓滿な家庭を造らせ、成敗に關せずいつも阪壽中心にして、彼をして捨て身になつて奮闘し、その心の奥深く藏する潜熱を思ひ存分にさらけ出し眞剣になつて大衆に呼びかけるやうに努めさすより外に良い方法はありませんまい。

## 北村喜八

急速に「急進化」しろとは申さぬ。しつかりと劇團の本質をつかんで、一步步々時代の進展に沿うて進んでほしい。現在のところ、同劇團は本質的に小ブル性以上を出ることは不可能だ。世間も當事者もそのことをはつきり知つてかゝつてほしい。そして、その限度に於て、最大限に進歩的であれ。

先づ第一に、脚本と演出者を選択せよ。これが同劇團の運命を決するであらう。これをあやまれば、同劇團の固定化と自滅は明白である。やつつけ仕事の脚色物なんぞで、お茶をにごすやうなことなく、大阪劇場のため改新的な氣運をつくれ。

## 坪内士行

何よりもまづ結構千萬な事と喜びます、殊に野淵氏が演出の中心となられる事は、多くの期待をかけさせます。

久しぶりで上京し、左衛次郎の「シラノ」を見、又勘彌の「子鷲」を見て感じた事ですが——もつともこれは猿之助一座への苦言としても云つた事ですが——私は將來の劇に女形を使ふ事は、或特殊の場合を除いては、絶対に反對で、松蔭がいかに上手でも、あのロクサーヌでは事こわし、その點「子鷲」の方がずつとよく、第一劇場が舊派出の壽三郎君中心であるに拘らず、女優を採用した事は、この前とでもさうでしたが、將來の劇團として大賛成、なほ此上の望みは、是非々々洋樂の方面によつて新機軸を出して頂きたいと思ひます。

出し物については、たゞ一つ申したいのはどうか新聞の續き物の脚色上演はやめて頂きたい、第一面白くない、第二に意氣地がない、第三にやり榮えがない。

もう一つ、そしてこれは大事な事だけに、大變な憎まれ口になります、壽三郎君を大將とする以上、同君の白科が含み聲でなくなる工夫をして欲しい、あの白廻しのために、同君は勿論、第一劇場そのものが意氣の澁刺さを缺いてくる、惜しめても餘りあり、と思ひます。

岡目八目の雜言、平に御免。

## 更新の第一劇場へ

大隈俊雄

壽三郎の第一劇場が更新再生することは、兎に角非常にいいことだと思ひます。動機を検討は他の機會にゆづるとして、猿之助の春秋座が大きな刺戟となり、歌舞伎劇の新しい人々が動いてくることは、或は行き詰つてゐる現在の歌舞伎劇に活路とまではゆかなくとも、新しい空氣を注入することは確かです。しかし「新興戯曲」三月號の最近の感想でもちよつとふれてをきましたが、猿之助の投じた波瀾にアアを喰つただけに終つて貰ひたくありません。それが動機になつたことは結構なことです。が、たゞ政策的な春秋座への對抗であつたならば、それは愚の骨頂です。第一劇場の再興が「新時代の劇團として」といふのだけでは漠然としてゐて、果してどういふ方向に進まうとするのか、ハッキリしてゐない。従つてその點については何も言へませんが、私としては猿之助に對抗するための一時的の昂奮であつてほしくないと思ふのです。第一劇場を、新時代の劇團として更新再興せしめるならば、ハッキリした信念を以て、目的を以て行動してほしい。壽三郎は關西劇界の新人を以て自他共に許してゐる人です。この點をよく考へられんことを希望します。

【三】月の劇壇

◆ 劇壇往來 ◆

會我廼家五郎一座

創立三十年記念興行

中座

三月一日初日  
午後四時開幕

【狂言】第一「三つ巴」二場・第二「オモチヤ」二場・第三「山の兄弟」二場・第四「宿り木」二場・第五「天下の俠客」二場

【後劇】丸八組大工木下榮吉、母親お順、櫻組小頭中田勝造、俠客吞込久太(五郎)、

狂言方勝爲三、丸八組役割渡邊治助、兄源太郎、大工村井伊兵衛、木綿商人四郎兵衛

(蝶)、木下妻お貞、未亡人眞ふじ、女房

おさん(大磯)、某會社重役原幸太郎、丸八

組主神林八兵衛、弟徳次、佐官喜平(小次郎)、理髮師五松、大工倉藏、茶亭磯兵衛、

盗人大蛇の権三(一朝)、紳士吉井某、食堂

主田原、銀行員高尾、町小使太兵衛、五樂

給仕花子、法界屋此助、神山妻おろく、捕

手頭立花左近(林蝶)、給仕笹子、お順の姪

お花(秀蝶)、外人ゼツシム、銀行家藤堂

富太郎、おけらの政公(時雄)、大工光雄、

獵師音五郎、運轉手神田、げんこの源助(時

右衛門)、吉井妻おりん、村井妻お花(時和)

給仕勝子、髪結おたね、桃蝶、紳士奥村某、

大工金藏、獵師清吉、てつかの丑(五郎丸)

遊客中田文吉、若者太吉、職工乙(笑將)、

車夫龜吉、大工松兵衛、獵師芳松、捕手幸

吉(勢蝶)、法界屋幸助、學生杉本某、捕手

彌吉(蝶太郎)、

第一劇場 三月公演

浪花座

三月一日初日  
午後四時開演

【狂言】第一直木三十五作鳥江鐵也脚色文

藝春秋連載「楠木正成」三幕七場野淵梨演出

吉川親方衣裳考案松田種次舞臺裝置・第二

關口次郎作「姉」一幕野淵梨演出大塚克三舞

臺裝置・第三長谷川仲作「町の入墨者」三場

森田信義演出松田種次舞臺裝置・第四、ハ

インリツヒ・マン原作森田信義脚色「嘆き

の天使」三幕十二景野淵梨演出大森正男舞

臺裝置

【配役】楠木正成、入墨者岩吉、イヌマエ

ルツンラート教授(壽三郎)、中納言隆資、

岩吉女房おきち、酒場の亭主(霞仙)、正成

妻久子、學生アングスト(成太郎)、和田正

隆伊勢屋喜之助、人足(駒之助)伊勢屋手代

學生E(芹麗)、橋本正貞、強盜武士、人足

(八百藏)、菊地武吉、眼玉の松五郎、ピエ

ロ菊藏)、伊勢屋番頭、警官(奥山)、旅の

商人、八藏(美鷹)、宇津見正安、職人、校

長(升藏)、瀧覺上人、穴太與平次、酒場の

男(麗正)、杉山佐兵衛、山岡、堅田喜十郎

手品師キーパー(橋三郎)、弟正季、第三

次郎、學生ライオンハート(扇雀)、旅の僧、

大村、家主六兵衛、アルバート(古川)、船

長トーマス(佐竹)、學生ウィルケンス(松

井)、仕丁(野鳥)、學生エルツーム(深見)、

母親、グスタ(とし子)、佐兵衛娘きく、妹

春子、娘おたね、コロンバン(竹子)、姉一

枝、伊勢屋女房お雪、ローラ(菊江)

新興成美團

角座

三月一日初日  
晝正午二回開演  
夜五時半

【狂言】第一菊池幽芳原作、山上貞一脚色

並演出「新釋月魄」七場裝置大塚克三・第二

北村小松作、豊岡佐一郎演出「上陸第一歩」

五景裝置南建真・第三瀬戸英一作、山上貞

一演出「奥様御覽御無用」一幕裝置森喜次郎

【配役】川上益荒、司尉長熊澤(都築)、梅小路勝文、刑事(元安)、野澤剛助、老船員(進藤)、馬丁乙松、船員(山中)、少年定雄(丸井)、松平亮二郎、火夫(村中)、高田、少年明(伏見)、女塾長、船員(鈴木)、川上人民子、船員(茂儀能)、ブルジョア政、父(梅田)、久松の母(石子)、宿のおかみ(木下)川上倭文字、妹(東)、川上富美子、酒場の女お照(浪花)、喜多みさ子、酒場の女嫁(夏目)、益荒の孫絹子(尾崎)、遠山藤乃、酒場の女(秋元)、小間使おいそ、母(米津)、身投げの女お豊、姉(三好)、春野芳子(春日)鳥田春子、酒場の女(雄島)、亮二郎の母ちか子、酒場の女(吉野)立花錦子、酒場の女將(六條)、久松田鶴子、女さと(石河)、正木貞雄、ヨタ者(伊志井)、久松喬、刑事(山田)鶴島直樹、火夫坂田(藤村)

文楽人形浄瑠璃

三月 興行

一日 初日  
午後三時開幕

【狂言】前「伊賀越道中双六」政右衛門邸の段大廣間の段・中「義経千本櫻」道行初音の旅路の段川連法眼館の段・切「明烏六花曙」山名屋の段

【大夫三味線劇】前「伊賀越道中双六」政右衛門屋敷の段(綾、糸友若、吉左浪花糸寛市、清二郎、相生糸芳之助、友造、大隅糸道八)大廣間の段(大内記つばめ、政右衛門和泉林左衛門、長尾鏡)五右衛門富、近習千駒、播路糸叶、尾六)中「義経千本櫻」彌作鎌腹の段(文字、糸勝平、津系友次郎)次「義経千本櫻」道行初音の旅路(靜御前土佐、忠信鑊、ツレ町、源路、辰、陸路、長子、駒尾、隅榮、小松、さの、叶美、津磨文字榮、佐久、糸廣助、新左衛門、仙糸、友之助、廣太郎、友平、猿二郎、綱右衛門猿太郎、友作、友二、福太郎、廣二、新一郎、仙作、猿若吉兵衛、川連法眼館の段(駒糸重造、古靱糸清六、友衛門)切「明烏六花曙」山名屋の段(浦里南部、彦六島、お辰源路、おかや貴鳳、勘兵衛長尾、鏡、時次郎文、みどり龜久糸吉彌胡弓小庄、友駒)

【人形劇】妻お谷、女房おかや、靜御前(文五郎)、手代彦六(玉次郎)、譽田大内記、代官七太夫(玉松)、狸の角兵衛(玉徳)、亭主勘兵衛(玉市)、駿河川郎(市松)、時次郎(文作)、娘おのち(紋司)、石留武助(玉七)、母柴垣、髪結お辰(小兵吉)、龜井六郎(光之助)、乳母お倉(紋太郎)、禿みどり(榮三郎)やり手おかや(扇太郎)、宇佐見五右衛門(門造)、櫻田林左衛門(玉幸)、萱野和助、佐藤四郎忠信(政進)、唐木政右衛門、兄彌作、狐忠信(榮三)、源義經、傾城浦里(紋十郎)

關西大歌舞伎

當ル彌生興行

巡業陣

【狂言】一番目篠山吟葉作「鳥羽の戀塚」二幕・中「近江源氏先陣館」盛綱首賞檢の場新作中井泰孝作「春日局」一幕・二番目大森彌雪作玩辭樓十二曲の内「小稻半兵衛戀の湖」二幕・大喜利雪の巻「門傾城」長叫連中月の巻「伯藏主」竹本連中長叫連中・花の巻「勢獅子」常磐津連中

【役劇】佐々木盛綱、稻野谷半兵衛(鷹治郎)、源左衛門尉渡禰の方後に春日局錦屋小稻(幅助)、伊吹藤太白藏主、狩人駒作、鶯頭蝶吉(長三郎)、郎黨新吾、妻早瀬婆者おりん八木重兵衛、藝者彌榮吉(吉三郎)、郎黨新六、角倉與一(政治郎)、侍女早月長男千熊、仲居おたま藝者秀松(延太郎)、袈裟御前妻篝火稻葉佐渡守許婚おみき傾城梅太夫、鶯頭榮五郎(魁車)、母衣川板倉伊賀守宅原源左衛門(大吉)、源太夫遠光古野新左衛門郎黨原田重作、栗津傳八(九國次)、竹小平(箱登羅)、後室微妙母親お縫(延女)、北條時政望月雄之進(市藏)、遠藤武者盛遠下孫八男衆和田兵衛秀盛仲間助七(延若)

主なる配役

(登場順)

一 ビエロ	尾上菊藏
一 コロンバン	村田竹子
一 學生ツイルケンス	松井茂男
一 同 ラインハート	中村扇雀
一 同 エルツーム	深見泰三
一 同 アンダグスト	中村成太郎
一 ウンラート教授	坂東壽三郎
一 酒場の男	實川鴈正
一 一品師キーパート	嵐橋三郎
一 ローラ	河村菊江
一 船長トーマス	佐竹批
一 警官	淺尾奥山
一 校長	市川升藏
一 酒場の亭主	中村霞仙
一 人足(A)	中村駒之助
一 同 足(B)	實川八百藏
一 アルバート	古川利隆
一 グュスタ	石川とし子
一 使丁	野島明

ハインリツヒ・マン原作  
森田信義劇化

# 嘆きの天使 全三幕十二景

(三月浪花座第一劇場上演)

## 第一幕 (1)

インナーカーテンの上部の大時計  
報時する——

ピエロとコロンバンのパントマイ  
ム——ピエロが卑屈な物腰で、愛  
と憐憫を求める。コロンバンは惨  
酷に戯弄する

—— Iris out in ——

高等中學校(ゲームナジウム)の教室  
よく暗れた午前の光線——(一ツ  
の机を中心に、殆んど全部の學生  
が折重なつて、覗き込んで、睨い  
てゐる)

上げえぞ。上げえぞ

ひゆう(口笛)

よせつたつら!

公開、公開

上げえぞ

廻せよ

公開しろよ

押すなつたら、ひつばたくぞ

なんでえ!

ひゆう(口笛)

駄目だよ、いけないつたら

これらは口々に喚かれ難され、喧

騒そのものを呈す

X (一葉の寫眞を振りかざして飛び立つ)

出めた! そらよッ!

Y おつと来た(受取つて、素早く駆け出す)  
Z 廢せよ。いけねえよ。いけねえたら(追  
ひ廻らうとする)

X どつこい、どつこい(抱き制める)

集團が解け崩れて、あるもの達は  
Yに追蹙し、ある連中は、Xと協  
力して、追はんとするZを座席に  
押し据える。またある連中は、机  
の上その他に座を占めて、拍手口  
笛などで、教壇の上に乗けた上つた  
Yを迎える

Y (寫眞を背に廻して隠し、演劇的な身振  
り口調で) 諸君！われくの中に憎むべき  
キユダが現はれたぞ。彼氏は實に昨晚の抜  
け駆けによつて……

(遮る) 見せる、見せる

早くしないと、おやちが来るぞ！公開  
しろ、公開しろ

Y OK、OK。まづ待たれよ——廢せよ。  
押すな、いけねえよ引張つちあ、そちら、  
どうだ。

よう、よう  
すげえぞ

おム、ローラよ、ローラ。そしておん  
みの脚よ……

Y (手を舉げて制して) さて、諸君……  
Z (Xに制されながら) おい、冗談ぢやな  
い、来るぜ、来るぜ

Y さて、諸君。みてるよ。(一同に寫眞を見  
せびらかす)

哄笑。歡聲。足踏み口笛……

ワンス、モア！  
今度は俺  
代つて一人が吹かうとする時、戸  
口の一人が叫ぶ

来た！来た、来た！  
學生らは怒ち、左右縦横に馳せ交  
うて、各自の座席につく

Yは大急ぎで、寫眞を取りはずさ  
うとするが巧く行かない

Z おい、早いとこと。早いとこ  
おいておけ。おいておけ  
おやちにも拜ませてやれ

Yはやうやくにして引きちぎる  
が、取り落してしまふ。拾ふ間もな

く、慌て、座席に着くウンラート  
教授入つて来る。學生ら一齊に立  
つて迎へる

教壇に上つたウンラート、一睨を  
呉れた後、サインを興へる、學生  
ら着席する。

ウンラートは徐ろにズボンの衣袋  
から大きなハンカチを取り出して  
チンと鼻汁をかみ、容儀を整して  
もう一度學生らを眺め廻した後教  
程に入る)

ウンラート さあみんな  
學生ら教科書を開く

ウンラート どこまでやつたかな——ムム。「ハ  
ムレット」第三幕、エラワーム。

學生Y、——すねに傷もつ彼は、  
ひどくどぎまぎした様子で、彼よ  
こりと立つ——その態が可笑しい  
と、他の學生らの間に小さな動搖  
が起る。

ウンラート一睨する、皆ひつそり  
となる。

ウンラート (Yに) 讀む



Y (どきまぎしながら)は?

ウシラート そこを讀む

Y は( )つまでも教科書を上げつづけてる  
(る)

ウシラート 下讀みをして來なかつたんだ(闇  
聲帳に記す)

Y はあやふやに坐りかける。教授  
視る。Yは慌てゝ立つ、しやちこ  
ばる

ウシラート (一咳——ちっ) To bel .....

Y (なぞ) To bel .....

ウシラート Or not to bel .....

Y Or not to bel .....

ウシラート (一咳——) that is the question!

Y that is the ques

ウシラート (舌打をして止める) チョツ、チヨ  
ツ、その發音はなんだ 'The', 'The', 'ド  
して云はないんだね

Y ぜ

ウシラート ナイン、違ふ 'The', 'The', 'The',  
'The', 'The',

Y ぜ

ウシラート ナイン、ナイン 'The',

Y ぜ、

ウシラート (教壇を下りてYの机の前に行く)

Y ぜ、

ウシラート 齒を離して、齒を 'The',

Y ぜ、

ウシラート (鉛筆をYの口に突つ込む) 'The',

Y ぜ、

ウシラート 石頭だナ君は家へ歸つてから二百

回やつてみるんだ(教壇へ歸る)

Y は坐らうとして、傍のAが微  
笑をしてゐるのを見つけて、顔を  
擡めて脊かす、Aは慌てゝ眼を外  
らす

ウシラート エルツームだけぢやない、みんな…  
:( )云ひかけて、脚元の寫眞を發見する。  
認る、拾ひ上げる)

ウシラート (一睨する。嵐の前と云つた不氣味  
な靜肅) これなんだ。誰が持つて來たんだ。  
云ひ給へ。誰が持つて來たんだ。諸君  
はこの神聖な教室をなんと心得てゐるんだ

許さん。斷じて許さん。さあ、誰が持つて  
來たか。——(突然Bを指差して)君だらう。

B いゝえ。ほ、ほくちやありません

ウシラート ちや、誰だ君は知つてゐるだらう

B 知、知りません

ウシラート (Yに)君か?君だらう

Y (首を振る) いゝえ

ウシラート 君ぢやないんだネ、——よろしい皆  
外へ出たまへ、外へ、直ぐ(Aに)君は残  
る。アングスト

ウシラートとAとを残して、全部  
の學生はぞろぞろと教室から出て  
行く

と、扉の彼方で喧嘩起る。嘲笑す  
るやうな哄笑さへ混る。  
ウシラートは憤然と扉を開ける。

ウシラート (Aの傍へ近づいて)云ひたまへ誰  
が持つて來たか。エ、君は知らなくはない  
だらう

A .....

ウシラート どう?誰が持つて來た?返事をし  
たまへ

A アノ……

聲 (扉の彼方で怒鳴る) 云つて見やがれ!

ウシラート (大急ぎで扉を開けて見る。既に人影なし) 今のは誰だ、あれは。ウイルケン

スカ、ラインハートか、エルツームか。エ?

A 知、知りません

ウシラート 知らない? 知らない筈はない。云

ひなさい

A 僕よく判りませんでした、本當に

ウシラート ちや宛に角、この寫眞を持つて来た

のは誰だか云ひたまへ。それは知つてゐる

筈だ

A 僕、僕知らないんです

ウシラート 知らない?

A 知らないんですから、本當に (途端に手にしてゐた教科書を取り落す、頁の間から

二三葉の繪ハガキが飛出して、板鋪に散る)

ウシラート

A 慌て、拾ひ集めて、衣篋へねじ

込まうとする

ウシラート (手を出す) 見せなさい——それを

見せなさい、見せると云ふに、

A 禦がうとするが及ばず、繪ハガ

キはウシラートの手に渡る、Aはうなだれる

ウシラート お前だつたのだね、纏て一番の

A (一生懸命に) いゝえ、違ひます、違ひ

ます

ウシラート 違ひはしない、現に……

A 先、先生

ウシラート 黙つて、わたしの顔を見る! お前は

これをどこで手に入れたのだね?

A 僕まつたく……アノ、屹度誰か僕の本

の中に入れてたに違ひありませんです

ウシラート さう!? 誰かとは?

A アノ、アノ、みんなは僕が皆と一緒に夜

遊びをしないからつて、僕を憎んでゐるん

です。アノ、みんなは毎晩『青い天使』に

出かけるんです

ウシラート 何、何處だつて『青い……』

A (うじうじと) 『青い天使』つてキヤバア

レーなんです

ウシラート 『青い天使』『青い天使』と云ふキ

ヤバアレー? そこへ皆行くんだネ

A アノ、先生——僕まつたく知らないん

ウシラート (頷く) (A、扉から去る)

ウシラート (記憶しようとするやうに) 『青い天

使』『青い天使』…… (背後に手を組んで歩

く) けしからん(寫眞を取り上げる、凝つと

見る、四邊を見廻す)

Iris out

第一幕 (2)

『青い天使』の慶間

——舞臺の一部と客席

(小太鼓の摺打とトロンボーンの喚聲。つゞいて津波のやうなバンド。踊子達の齊唱——で、開幕、

クレオン・カラライイト)

(歌)

コツブの酒が強過ぎる。

キツスで甘くしなさんせ。

粹なヴェールが氣を利かせ

ちよいと開いた君がため

可愛い女の唇吸へば、

可愛い女の唇吸へば

可愛い女の唇吸へば

甘き、樂しき、心地よき、ホウ

(客席)

老若各階級の男が、そちこちのテーブルに凭つて飲食しながら、見物してゐる。合はせて歌ふ、半疊を飛ばす、喋る、身體をゆすぶる

卓を打つて調子をとる、笑ふ、にや／＼笑ふ。等々。その中に、學生

XYZは正帽を冠つて混つてゐる

給仕人

(酒場に向つて怒鳴る) ザヴァクラフト附のアイスパイン!

酒場男

(吼える) おう歌、踊りつゞく

給仕人

焼き腹話一ちやう!

酒場男

ヤア、ガンツ、ツイイト! 舞臺にキーパート現はれる。一禮、バンド歌む

キーパート

さても尊敬すべき紳士方様。やつがれば、茲に、當座の花形ローラ嬢を御紹介いたすの光榮を擔はせて戴きます(一禮一步退る)

バンド起る。道化役ひよろくと出る。女の姿態で一禮、キーパ

ト合圖、バンド歌む)

キーパート エ、これぞこれ……(ひよいと視

て、大仰に驚き怒る) やあ／＼とんちきめ誰が貴様のやうな薄汚い老ぼれを紹介するためにまかり出るものか

道化役 またしくじつたか、しかし……キーパート (パン／＼と右左に煽打をくれ) つべこべ云はずに、とつと、消えてなくなれ

(道化役の尻を蹴るポーンと音する)

道化役 キウツ(平伏する) キーパート 來い、來い、(道化役の耳をつまんで吊り下げるやうにして引立てる、耳は二尺餘も伸びる)

バンド始まる

見物の一人 よろ／＼巧いぞ、道化給仕人 ビーズナビール、一杯!おなじく一杯!

ローラ歌ひながら、踊りながら舞臺に現はれる。客席に拍手。懸聲、足踏み、口笛等々の喧騒

プラプラ待つてゐました、ローラ嬢お待ちかねとごさい

あなたばつかり

(歌)

春が來ました、鳥が啼く、この世が陽氣になつて來た胸がもや／＼して來ます、胸がもや／＼して來ます、

ラ、ラ……

踊子が和して歌ひながら、踊りながら出る。

さてもサ殿方、わたしは今夜殿御を一人探しましよ、

たのもしい胸に顔よせて、今宵一夜を過ごしましよ、

ラ、ラ、

戀に身を燃やすうぶな方、目を輝かすうぶな方、

それが、わたしの探す殿御、それがわたしの殿御!

たのもしい殿御——ラ、ラ、

(喧騒。バンドガレビートする) よろ／＼、たまらないぞ

(歌ふ) それがわたしの殿御、たのもしい殿御……

X (上手を見て、Y、Z) アツ、いけねえおやちが來たぞ

Y おやぢけ  
Z おやぢけ いけねえ

(三人素早く正帽を脱し、うろうろし乍ら、他人の背後に隠れようとする。その間もなく、ウンラートは上手から出て来る)

ウンラート 見つけたぞ、見つけたぞ、こりや動くな(卓の間を縫つてその方へ近づかうとする)

第一幕 (3)

おなじく樂屋

この部屋はいろ／＼な目的のために使用されてゐる。二階。下手の部屋から舞臺への通路にもなり、ある藝人達の脱衣場ともなり、稽古その他の際は藝人達の集合所に

もなる。上下の壁に扉。二階への狭い梯子段。カーテンで仕切られた更衣所。地階への揚蓋。卓椅子、壁にはけば／＼しい色のビラが敷枚貼つてある。

舞臺で使ふ道具が、がらくた道具と一緒に積んである。舞臺からバンドが聞へてゐる。その間々に怒聲、口笛、拍手等々も聞える。

前場の道化役が二人の女藝人に挟まれて、笛を吹きながら部屋のかを行きつ戻りつ行進して居る。

道化役 (立止つて) 待つた！ 違ふ。このところで、お前が右へ、お前が左へ輪を描く。そら！ (笛を吹く、演りなほす) 好いなみんな(椅子や卓上や、がらくた道具の上)に休んで、貰を喫したり何かしながら、見成つてゐる踊子達を顧みる)

待て、待たんか！  
學生XYZ、矢庭に駆け込んで逃げ場を探してうろ／＼する。  
踊子おどろいたり、おもしろがったりする。三人は、更衣所に當て

られてゐるカーテンの影に飛び込んで隠れる。  
舞臺で太鼓の摺打ち。

道化役 さら！ 好いか  
踊子達、彼を中心に行列を作り道化役の打ち振る笛のタクトに合せて、行進曲の足踏みをする

道化役笛を吹き乍ら先頭立つ。上手に向つて行進。と、ウンラート叫びながら飛び込んで来る、鉢合せをしかける  
止まれ。待て！  
うろ／＼しながら、學生達の姿を探し索める——踊子達は行進しながら、おもしろがって、故意に手を遮つたり、小突いたりするウンラートは彼女達の行列を縫つて行きながら、きよろ／＼と探し索める

ムム、こつちだナ(下手の部屋に入る)  
XYZカーテンの影から見送り出て来る

Y ツレ!この間だ!

三人上手の扉へ駆け出す、入つて来た手品師のキーバートと衝突つかる

キーバート 氣をつけるい、間抜けめ——なんだ

ね、お前さん達は

Z 後生だ、行かせてくれ!

Y 大事件だ!

X 頼む、頼む!

キーバート (腕組みして、立ちはだかりながら) 一體全體、お前さん達は……

Y それどころぢやないんだ!

Z おやぢだ!學校の先生だ

X 掴まつたら百年目なんだ!

キーバート (身を開きながら) おや、そいつは。そんな譯ない、サアサ早いとこ、早いとこ

ウンラートの聲 ウイルケンス、ラインハート、

エルツーム、出て来るんだ!

Z そら、來やがつた(一團となつて出て行くからとする)

キーバート 待つた、そつちは危い、サア、こゝだ、こゝなら大丈夫(地階への揚蓋

を持ち上げる)ツレ、飛び込んだ。

學生ら轉がるやうにして地階の階段を降りる、キーバート揚蓋を押し下す。ウンラート下手から出て来る)

ウンラート 出てこないと、ひどいぞ。處分だぞ

(更衣所のカーテンを曳明ける。衣裳だの下着だがぶら吊つてゐる。たじろぐ)ハテナ

キーバート もし、もし、亂暴をなすつては困ります

ウンラート おゝ、知りませんか、小倅共を、け

しからん奴らです

ウンラート (肩を聳やかす)

キーバート 何處へ行きました。わたしの學生達高等中學の學生

キーバート (首を振る。行きかける)

ウンラート 君、君、正直に云つてくれたまへ、

確かに此の部屋へ逃込んだのだから

キーバート 知りませぬネ。まあ、お探しになるんですナ(去る)

ウンラート けしからん!許せん奴らだ!ム、

二階へ逃上つたのだナ(梯子段を駆け上る)

上手の扉から、踊子達が引込んで

来る。脱ぎ棄てた衣裳を手に持つ

ものだの、同僚と云ひ争ひながら

来るものだの、いろく、その中にローラも混つてゐる

ローラ なあに、さつきの騒ぎ?

踊子 中學の小僧達よ

他の踊子 お前さんのフアンさ

ローラ (笑ひながら)人を

ローラだけを殘して踊子達は下手の部屋に入る。ローラは鼻唄を唄ひながら衣裳を解きはじめる

(歌) すらりとやせた奥様が

いつの間にやら肉がつき

今ぢや身體中肉だらけ……

揚蓋を押し上げて學生XYZ重なり合つて顔を出す

X こんばんは、ローラさん

ローラ あり

Y I love you(投げキッス)

ローラ お馬鹿さん、どうしたの、そんなところ、出ていらつしやい

Z キッスさせてくれるかい?

ローラ させて上げてよ、靴の尖になら

Z よせやい

X おやぢ出て行つたかい？

ローラ おやぢ？

ウンラートの聲 隠れたつて駄目ぢやぞ  
Y アツ、いけねえ（手真似で隠れて居ることをウンラートに告げないで呉れと頼む）

學生ら揚蓋を閉じて隠れる。  
ウンラート二階から降りて来る。

ローラ あら、あんた誰あれ？無暗に他人の寢室なんぞ覗きに行かないで頂きたいものね

ウンラート イヤ、ソノ……おゝ、あんたは——

女優さんのローラ……さんですね

ローラ よく御存じてゐらつしやいますのネ  
さうですの、ローラです

ウンラート わたしはソノ、なんだ、あんたに何訊ねたいことがある

ローラ お訊ね？わたしに？おや〜。あのあんた警察の方のお方なの？

ウンラート（威儀をつくるつて）わたしは——  
なんだアロフエサー・ドクトル・イマヌエル・ラー

ローラ ぢや、婦人の前で帽子をお取りにな

る位の禮儀は、御存じだと思ひますけど  
ウンラート（すこしどぎまぎしながら帽を脱して一禮する）

ローラ（舞臺の身振りて禮を返す——勿論媚笑を漂よはせて）  
ウンラート て、ソノ、わたしがお訊ねしたいのは……

ローラ まあサ、おかけなさいまし  
ウンラート イヤ、實は……

ローラ どうぞ、どうぞ  
ウンラート（ローラの傍の椅守にかける。何となく落付きを失つて、始終そわ〜してゐる）アノ、ソノ……

ローラ（ビールを二つのグラスに注いで）  
召上つてください、わたしの健康を祝して

ウンラート（手で拒む）實は……  
ローラ（首を振る）召し上つてくださらなきあ、わたし厭よ。御返事なくつてよ。

どんな事だか知りませんけれど——サ。（グラスを把つて誘ふ）  
ウンラート（愈一度を失ひながら）いや、これは、どうも……では（グラスを把る）

（兩人乾杯する）

ローラ ありがと、お禮を云つてよ——さあ伺ひませう、お訊ねになりたいのは、どんなこと

ウンラート（麗の泡を拭ひながら）イヤ、實は、ソノ、あんたがわたしの學生を……

ローラ あら、お麗にまだ泡が残つてゝよ（手を伸ばして麗を拭ふ）  
ウンラート（面喰つて、思はず立上る）  
ローラ 序に外套もお取りになると好いわ（脱がせにかゝる）  
ウンラート（消極的に禦ぎながら）いや、わたしは……  
ロール でも、あなたは今、わたしをお助けくださつたお客様ぢやなくつて  
ウンラート いや、わたしは  
ローラ 駄目（脱がせて了ふ）  
下手の扉から踊子らと道化役出て来る。上手からはキーバートが出て来る。ウンラート踊子の一人に衝突する。  
踊子 痛いつ（突き返す）  
ウンラート他の一人に衝突かる。  
ウンラート やあ、これは



キーバート おい、お前さんまだこゝでうろ

くして居るんかね

ローラ 紹介するわ、こちらはネ、高等中學

の先生のイマヌエル・ウンラート博士よ

キーバート おゝ、さうですか。これは、これ  
は。

ローラ こちらは座長の

キーバート へ、へ、キーバートと申します。名

譽あるお方に直々御挨拶申し上げますことを  
光榮に存じます

ウンラート (威儀をつくるつて) わたしは、プ

ロフェサア・ドクトル・イマヌエル・ウン  
ラート (手を出す)

キーバート その手を忝しく把つ  
て握手。

キーバート さうですか(意味ありげにローラを  
目で差して) しかし、流石はお目が高いで  
すね、先生

ウンラート

何ですか? 何を云ふんだ、あんたは

わたしは、生徒達を探しに來たんですぞ

キーバート 生徒さん方をね、へ、へ、(變に笑  
ふ)

ウンラート 大體あんた方はけしからんのうちの

學生を……

爆發するやうなバンド、踊子達曲  
に合はせて踊りながら上手の扉か  
ら出て行く。

キーバート まだ後ほど(一禮を残して、踊子ら  
の後から出て行く)

ウンラート (照れて) けしからん

ローラ (媚笑) よくつてよ、先生、あんな  
男下等な連中ですもの、サ、おかけなき  
い(ウンラート眺ける)でも、先生、あ  
んな随分憤り屋さんね

ウンラート どうもすこし昂奮しすぎたやうで  
すね

ローラ 好いわ、そんな方が、わたし尊敬す  
るわ、どうも、こゝの連中と來た日には……

……アノ、先生、わたしお化粧しながらお  
話してもよくつて

ウンラート どうぞ、どうぞ

ローラ ぢやもうすこしおよきなさいな、ア  
ノ、ちよつと、これ(眉墨の器をウンラ  
ートに渡す)

ウンラート (うつかかり受取つて了ふ、迷惑さう  
にさよげてゐる)

ローラ (その眉墨を指先につけて化粧をな  
ほしながら) お化粧つて、御覽になつてゐ  
ると、おもしろいもんでしょ。

ウンラート で、ソノ、わたしはお願ひするんで  
すが、わたしの學生の機嫌をとることは、  
止めて貰ひたいんです

ローラ (機嫌に化粧をしながら) エ、エ、  
判りました、學生さん達の機嫌をとつちや  
いけない——つておつしやるのね

ウンラート わたしは今日はじめて……

ローラ あの、恐れ入ります。その白粉の  
入れもの取つてくたさらない?

學生ら揚蓋から顔を出す、よろし  
く表情、二人の方を視てゐる。

ウンラート (取つて渡す)

ローラ ありがたう、本當にあなたは御親切  
だわ、本當の紳士だわ(ふとした思ひつき  
で、恰も誤つて、咳が出たやうな風にして  
白粉を吹く)

ウンラートの顔から胸へかけて、  
白粉で眞白になる。咳入る。

ローラ (大仰に愕いて) あら、あら……  
まあ、どうしませう、わたし、御免なさい

ね、ごめんなさいね——いゝえ、動かないで、じつとしてゐて(ハンカチで拭ふ)

揚蓋の學生よろしく表情。

ローラ (手を打つ) おゝ、好い男におなりになりましわ、先生——でも、ご免なさいね。わたしそゝつかしいたら——さあ、お化粧すみました。お話し何つてよ

ウシラート つまり……

ローラ ア、あの煙草一本いかゞ、どうぞ(紙巻煙草を差出す、煙草に点火して差出す) どうぞ、

ウシラート (受取つて、きまり悪さうに喫む)

俄に上手の扉の彼方に騒々しい人聲がして、キーバートを先頭に、酩酊した老船長、シャンパンの瓶を持つた酒場男、道化役らがどやどやと入つて来る。

船長 (騒々しく) いや、フロウライン・ローラ、どうだね、御機嫌は(握手を求めろ) ローラ こんばんは。どなたでしたつけ船長 どなたにござ挨拶だナ、こいつは。俺だよ「ジョン・トーマス號」のトーマス船長だ、カルカッタから只今入港、早速ローラ

坊の御機嫌伺ひに参上したと云ふ譯き(他を顧みて) おい、シャンパン、シャンパン

酒場の男 ヤア、ガンツ・ツイイト

船長 さあ、大盤振舞だー景氣よくボンと抜いて呉れ

酒場の男 シャンパンを抜いて、グラスに注がうとする。

船長 (遮つて) おつと、待つたー酌はローラ嬢に限るんだー

ローラ 冷然と煙草を煙ぶらしてゐる、酒場男が瓶を渡さうとするが指尖で拒む

キーバート おい、どうしたんだ、さあサ、酌だ、酌だ、——おい、酌だとお仰しやつてゐるのが聞こえねえのかー(手を掴んで瓶を持たさうとする)

ローラ 離してくれ(振り離す)わたしは女優よ。シャンパン注ぎぢやないんだよ

キーバート それで

ローラ 厭だと云ふの、厭なこつた、そんな……

キーバート なんだ——ヘン、よく御身分柄を御存じだね

ローラ えゝ、よく御存じよ(ウシラートに) ねえ、先生

船長 おかしな女だなあ

ローラ えゝ、さう、わたしは船長 冗談ぢやねえ、俺は別にお前をどうかうしやうなんて、思つてゐるんぢやない、唯お前の健康を祝すべく……

キーバート さうですとも、さあサ

ローラ 眞平、わたしあんたなんか健康を祝して欲しくないの。わたしは無作法な人だ嫌ひ……

船長 何つー(ローラの兩肩を掴んで揺ぶる) ウシラート (飛び出す) こらつー何を、婦人を捉へてー(船長を突きつける)

船長 (睨み合ふ) なんだ、お前はフリーン

お前は何か、この女の旦那つかね? ウシラート (眞赤になつて) 馬鹿!

船長 (下卑びた笑) ぢやあ情夫かね

ウシラート (愈激して) 馬鹿、馬鹿! そんな者ぢやない! 無禮な事を云ふと承知しないぞ!

船長 ぢや、なんだつて横合から出しやばるんだ

ウンラート 婦人に對して、無作法な眞似をするのを、黙つて見て居られるか

キーパート よした、よした、廢めなさい、先生 揚蓋から學生ら顔を出して見てゐる。

ウンラート いかん、許さん（船長に）この下素

めー 船長 何一下素だと吐したな！（踊りかゝる）

ウンラート 袖を巻り上げ、三つ四つ喰はず、酩酊してゐる船長は分が悪い、突き倒されて了ふ。

ウンラート 出て行け！出て行け！

キーパート まあ？先生、御仁體に觸りますぞ

ウンラート 大きにお世話だ、君も出て行け（人々を突き捲つて、扉の方へ押しやる）

酒場男 しかし、ソノ抜いたシャンパンの代はどう云ふ事になるんです？

ウンラート わしが拂ふ、わしがみんな拂つてやる。サア出て行け

船長（起き上る）畜生！よくも他人を！警官だ、警官を呼んで來てやる。このおいはれ奴！

ウンラート（激して）おいはれだ？（飛びかゝらうとする）

ローラ（制める）先生、もう……あの男は自分のことを云つてゐるんですよ

船長（扉の方へ後退りしながら）逃るな！警官を伴れて來てやるぞ！

口々にがや／＼云ひながら、人々はローラとウンラートを殘して扉から去る。

ウンラート（昂奮から醒めないで罵る）何と云ふ奴らだ、いやしくも婦人に對して……

ローラ（その脇に觸れて）先生、わたし、本當……

ウンラート ナイン、ナイン、わたしは唯、義務をつつしただけなんです

ローラ え、でも……でも、先生、あなたは随分、うぶな方ね、

ウンラート うぶ、わたしが？

ローラ え、そして、頼もしい方ね

ウンラート 頼もしい？

ローラ わたし、本當に……さあ先生、わたしの感謝を受けて、乾杯してくださいらな

い（二つのグラスにシャンパンを注ぐ）さあ

プロジツト

兩人乾杯、覗いてゐる學生達表情

ローラ わたしねえ、先生……（媚笑）

ウンラート あん？

ウンラートふと學生らを發見する

學生らは慌て、地階にもぐる

見つけたぞ！もう逃さん！（走りよつて揚蓋を掲げ地階に走り下りる）

警官と先刻の男達と出て來る。

キーパート（警官に）いや、大した事ぢやないんですよ、全く、ソノ、ちよつと、ほんの……

船長 違ふ、違ふ、大事件だ、警官、この男です。こいつです、こいつが、このあつしを、さうです、殺さうとしたんです、首をから締めて殺しかけたんです。あつしは告發する、

道化役（人々の背後から顔を出して）おう

い、ローラちゃん、出場だぜ

警官 一體その男と云ふのは、何處に居るんだ。

船長 こゝにゐるこの……（見廻して）おやどこ（行きやがつた）（ローラに）おい、何處

（逃がしやがつた、警官、逃たのが何よりの證據でさあ、あつしは告發する）

キーバート（警官に採手をしながら）旦那んですよ、この人は酔つぱらつて、こんな事を云つてゐるんですよ

船長 何がこんな事だ、いゝや本當で、現在あつしは殺されかけたんです

警官 だが、その男はゐないぢやないか、加害者は

ウンラート地階からXYZの三人を引摺つて上つて来る。

ウンラート けしからん奴らぢや

船長 あいつで、あの男で、あの男が、あつしを殺しかけたんだ、あの男を告發します

ウンラート 黙れ、わしの方こそ告發してやる、警官、この男は、實に不届千萬な行爲をしました、この男は婦人に對して……

警官（手で制す）あんたわ？

ウンラート わたし？高等中學校教授博士ウンラート

キーバート 立派な方でさあ（船長をさして）大體この男が……

船長 俺がどうしたと云ふんだ（キーバートを突つきとばす）

警官（一喝する）何をする！とにかくお前來い

船長 あつしが何あいつを拘引して下さい、あいつを拘引して下さい

船長、警官に引立てられて出て行く。キーバートもつゞく。

ウンラート（學生三人を整理させて）ウインケンス

X ハイ、先生  
ウンラート ラインハート

Y ハイ、先生  
ウンラート エルツーム

Z ……  
ウンラート 何故、返事をしない

Z ハイ、先生  
ウンラート お前達はなんと云ふ不都合な學生だ、第一、わしが止れと云ふに、何故止らない、よくない……

Z（煙草を出してくわえる）  
ウンラート（憤つてその煙草を拂ひのける）

これ……よろしい、あしたどんな處分を

受けるか見てゐるが好い直ぐ寄宿舎に歸りなさい

學生らどや〜と扉へ行き、一歩出たところで振返つて一齊に「やあーい」と離し立て、駆け去る。

ウンラート 何んと云ふ奴らだ！けしからん（ローラに）どうも耻かしく思ひますよ、あんな生徒を有つて……

道化役 いや、流石は鮮やかなものですナ  
キーバート戸口に姿を現はす

キーバート（ローラに）おい冗談ぢやないぜ、早く〜、客はお冠りだぜ（ウンラートに）いや、どうもいかゞです、特別席に御案内したいと存じます、一つローラ嬢の唄を聞いてやつて頂きたいもので

ローラ あら、好い思ひつき、先生、聴いて下さいね、さうだわ、わたし、先生のために歌ひますわ、ね、ですから聴いて下さるわね、聴いて下さるわね

道化役 よう、よう  
ローラ（目で叱る）ね、先生

ウンラート（合點々々する）  
キーバート、すかさず道を開いて

身振りて案内する  
舞臺で新しい曲が始まる。

第一幕 (4)

もとの廣間

バンドは後で、ローラが歌ふ『わ  
たしや、どうしてこの様に……』  
を奏してゐる。

遅いぞ、遅いぞ

ローラを出せ

給仕人

クラフト附焼腸話一ちよう

ローラを出さないと踊るぞ

ローラを出せ

ローラ……ローラ

舞臺にローラ、特別席にウンラー

トとキーバート現はれる

満場騒然——拍手、喝采、足踏み

口笛、ローラ客席のそこゝに愛

嬌を振り撒く。

キーバート

(樂手席に向つて) フリードリツヒ

喇叭を

喇叭が『タンホイゼル』のオーバ

チユアの一小節を奏す。

キーバート (客席に向つて) さて——尊敬すべ

き紳士方、淑女方、今晚の御來賓、御當地

高等中學教授イマヌエル・ウンラート博士

を御紹介させて頂きます

ウンラート、はにかみながら會釋

する

よう、先生

乾杯、乾杯

拍手。ローラ唄

(歌)

わたしやどうしてこの様に

男に好かれる女子やら、

いくたび戀に身を燃やし

またその戀に冷めるやら

男にやんやと離される

満更いやでもないわいな

ちよつびりなびきや

そのあとは

知れたことではないかない

いや／＼ながら又惚れて

それが女子よ女子よそれが

—— Int. out ——

第一幕 (5)

教室 (1) に向

ボードの一枚に、ウンラートと  
ローラを題材にしたカリカチュア  
が描かれてある

他の一枚のボードにはZ(エル

ツール)が同工異曲のそれを描き

つゝある。學生らは或は机に腰を

かけ、或は小唄を吟み、ある者は

踊りを踊つてゐる。教壇の上にX

が立つて喋つてゐる。

X ……好いかい、判つたかい、みんな。

俺が右の手をかう上げると、笑ふ、その手

を仰すと歇める、左の手を、かう振ると、

それ！歌うんだ、好いな！

どうだい、こんなものかい

Y よからう

Z 廊下から學生Bが駆け込んで来る

B 来たー来たー今理化學教室の前だ

學生中に机を叩くもの、歡聲を擧

げるものがある。





校長 (しばらくして) どうしたんだネこれ

は？ ウンラー ト君

ウンラー ト (言ひ解く術を知らず途方にくれて

ゐる)

校長 何かね、このローラと云ふ婦人、君近

づきなのかね？——どう？

ウンラー ト ……………

校長 (ボールドを讀む) 青い天使！ (了解

するところがある) ア、青い天使——する

と、そのローラとか云ふ婦人は…………… (癡

つとウンラー トを視る) そして、その婦人

と君が近づき——なんかね…………… ウンラー

ト君！

ウンラー ト ……………

校長 困つた問題を惹き起してくれたねえ、

君。——君、なんだ、兎も角わたしの部屋

へ来てくれたまへ(去る)

ウンラー ト 惘然と立ち盡してゐる

やがて覺えない手付で机の教科書

その他を整へ、取り上げる。

——幕——

## 第二幕 (1)

### 港町の波止場近くの酒場

インナー、カーテンの上部の大部分

計、報時！ Iris out

港町の波止場近くの酒場！ 天井の

低い、くすんだ汚い部屋。

奥へ通ずる扉と、往來への扉と、

窓から港の一部が見へる、

午さがり、

幕が上るとそこにはすつかり變り

果てた、ウンラー トが獨り……………

椅子に坐つて、視き込むやうな眼

つきをして、目を凝視してゐる

貧困と苦惱の深い陰影が刻まれた

寝た顔、濁つた眼、カラーはな

くて、袋のやうなだぶ／＼の衣服

……………ものを考へてゐるでもなく

又考へてゐるでもない疲れきつた

表情、

傍の卓に、半分ほど飲んだビー

ルのタンブラが置いてある、

……………のろ／＼と體を動かし、タン

ブラを把つてちび／＼飲む……………

早く失くなることを氣づかふ様に

何處かで、流行おくれの手風琴

波止場人足が二人聲高に話しながら

往來から入つて来る。

人足一 (巻舌で) ……………え、おい、兄弟！

そんなものぢやねえか、

人足二 さうともよ(酒臺の前に來て) 父つお

ん、大將、親爺……………居ねえのか、

亭主の聲 (奥から) ヤア、ヘル、

人足一 (部屋の中を見廻して) 恐ろしく汚

ねえ家だナ

人足二 ところが、これでちよいと飲ませる

から妙だ、おうい、父つあん

亭主の聲 ヤア、ヘル(手を前掛けて拭ひなが

ら出る、跛)

亭主 (大仰に陽氣に) いやう

人足二、いつもの奴だ(吼へる狼) つて

奴をよ(錢を酒臺の上へ投出す)

人足一 おなじく

亭主 ヤア、ガンツツエイト(酒を注いで二

人の前に置く)

人足一 よう、乾盃！

二人飲む、ウンラート横目で眺め  
てゐる。

人足一 どうだね

同二 うん、悪くねえ

同 一 おう、もう一杯だ

亭主 兄さんもだね

人足二 (頷く)

ウンラートのろく／＼と立ち上り衣  
襷から数枚の繪葉書を取り出して  
盆の上に丹念に並べそれを持つて  
人足らに近づく。

ウンラート 旦那、旦那、如何です、六枚一組で

人足二 なんだ？不要らねえよ

ウンラート (人足一に) 如何です、六枚が一組  
なんで……銀貨一つなんで……

人足一 (それに取り合はないで人足二に)  
行かうか！(亭主に)あばよ、また来るぜ

亭主 ダンケ、ヘル

人足が出て行く

亭主 (ウンラートに) あぶれだね  
ウンラート (力なく首を振る)

亭主 だが、なんだぜ、あんな相手ぢや……  
一つ、河岸を代へて涉つて見るんだなア

ウンラート (頷く、繪葉書を衣襷に納めながら)  
大将、蓑を一本頂きたいんだが

亭主 そらよ(蓑を興ふ)

ウンラート (点火して喫ふ) ありがたう、感謝  
しますぞ

亭主 (笑ひながら) 感謝しますぞと、お出  
でなすつたね、ハツハツ(自分も一本抜い  
て喫ふ)

ウンラート (扉の方へ行きかけて、後戻りをし  
ちよつと躊躇した後) アノ大将、もしも彼  
女がローラが來たら、ソノ、ちよつと待  
て、呉れるやうに、どうぞ

亭主 ガンツ、ツイイト

ウンラート どうぞ(ペコリと頭を下げ行きかけ  
また戻つて) それからソノ、わたしがビー  
ルを飲つたことは、内密にね、どうぞ

亭主 ガンツ、ツイイト

ウンラート 出て行く。

亭主 爺さん、よつぼどお目出度く出來てや  
がらあ……どれ(脚へ煙管で鼻唄を歌ひな  
がら、その邊を片づけはじめ)

ローラが入つて来る。

ローラ こんにちは

亭主 やあ、こんにちは……今出て行つたと  
ころだよ、逢はなかつたかね

ローラ (首を振る)

亭主 だが、またすぐ歸つて来るよ、お前さ  
んが來たら、待たして置いてくれるやうに  
つて、云つて行つたらからね

ローラ 煙草を一本もらへないかしら

亭主 おつと來た(匣を渡す) どうだね、ま  
だ、打ち場所はきまらないかね

ローラ (首を振る、煙草を喫しながら) い  
やになつちまふよ、キーバートは随分奔走  
してゐるんだけれどね、なにしろ、一座と  
云つた處が今日びぢや、こんなわたし一人  
が賣物と云ふ始末だから、どうしたつて

亭主 なあに、お前さんが一人居れば、それ  
だけで賣物になるわさ、別嬪で、唄が歌へ  
て踊が踊れてさ、なんだよ、やつぱり時節  
が悪いんだな、俺んとこにしてが、この通  
りこの節はまるで客らしい客が、あつた驗  
しがねえんだから

アルバートが入つて来る、ちよつ

アルバートが入つて来る、ちよつ

アルバートが入つて来る、ちよつ

アルバートが入つて来る、ちよつ

アルバートが入つて来る、ちよつ

アルバートが入つて来る、ちよつ

アルバートが入つて来る、ちよつ

アルバートが入つて来る、ちよつ

アルバートが入つて来る、ちよつ

アルバートが入つて来る、ちよつ

アルバートが入つて来る、ちよつ

アルバートが入つて来る、ちよつ

アルバートが入つて来る、ちよつ

アルバートが入つて来る、ちよつ

アルバートが入つて来る、ちよつ

アルバートが入つて来る、ちよつ

と氣障形だが、好男子、服装にも  
氣がくばつてある。

亭主 いらつしやい

アルバート (ローラに) やあ、こんにちは……  
よく逢ひますね

ローラ (知らぬ顔をしてゐる)

アルバート (平氣で圖々しく) 一度お近づきにな  
りたいと思つてゐましたよ、ローラさん、  
いえね、以前からよくあなたの舞臺は拜見  
してよく知つてゐるんですよ

亭主 ヘツ、御註文は

アルバート さうさ、ビール、黒を混ぜてね……

二つ……私もこれで藝人の端でしてね、  
ハンス・アルバート……と云ふ名を何處  
かでお聞きになつたことはありませんか、  
(亭主が注いで出したビールの一つを偸め  
る) 如何です、一つ、ローラさん……それ  
ですから、まあ唄の善悪ぐらひは聞きわ  
ける事が出来るのですが、イヤあなたの舞  
臺にはすつかり感心させられて了ひまし  
すつかり惚れて了ひましたよ

ローラ それで、先刻から他人の後を駆け廻  
しておいでなんでしょう?

アルバート 飛んでもない、後を駆け廻すなんて  
そんな風の悪いことを、なんてわたしは、  
全く偶然に二三度出會したのですよ、そし  
て咽喉が乾いたので、一杯飲らうと思つて  
此處へ入ると、こゝで又、お逢ひしたと云  
ふわけですよ……まあ、兎に角一杯如何  
です、わたしはあなたの健康が祝したいの  
です

亭主、奥へ這入る。

アルバート さあ

ローラ わたし澤山だわ

アルバート まあサ(にや)笑ひながら) あん  
たどつて『男にやんやと騒がれる、まんざ  
ら厭でもないわいな』と歌つてゐたローラ  
さんぢやないか

ローラ それ、どういふ意味?

アルバート どういふ意味つて……(寄り添ひ  
變に真剣な様子を見せて) ねえローラさん  
わたしはあんたが、今は他人のものだと云  
ふ事も知つてゐる、知つてゐるが……憤  
られても好い、正直に云つて了はう、あん  
たのやうな、若い美しい女があんな薄のろ  
の老衰に身を任せて、あたら若い日を臺無

しにして了ふなんて、こんな勿體ない事は  
ない、かう思ふんだ、早い話が、わたし  
なんぞこれで、萬更あなたに似合はない男  
でもないと思ふんだが……(猶寄り添は  
んとする)

ローラ (突つき離して) いけないよ、他人が  
見るぢやないか(うつかりとビールを飲む)

アルバート (變に自信ありげな態度で) ありが  
と、とう／＼飲んでくれたね、なに、好い  
さ、好いさ、何時かあなたは、屹度わたし  
のものになる、また、それが當然なんだも  
の、あんたも若い、わたしも若い……

ウンラートが入つて来る、ロオラ  
目ざとく認めて、アルバートに目  
で合圖する

ウンラートは變な目でじろく二  
人を見る。アルバートは、ウンラ  
ートに氣づかれないやうに、意味  
深い會釋をローラに残してさり氣  
なく出て行く

ウンラート (暫くして) 誰だね、今の男?  
ローラ 誰だか……さう／＼あの人も藝人  
で、アルバート……とか、そんな名を云

つてたわ

ウシラト ビールはあの男のおごりかね

ローラ ビール、さう、自分が飲む序に一杯取つてくれたのよ、でもそれだけよ

ウシラト (ぎよつとしたやうに) それだけ?

ローラ さう、それだけだから、それだけどうしたの、随分變ぢやない

ウシラト (暫くして) なあ、ローラ……わたしはあの男を好かん

ローラ さう?

ウシラト だからお前があの男と交際ふのを禁じる、判つたかね

ローラ え、わかつてよ、よくつてよ、わたしもあの人好きぢやないんだから、だけどねえ、もうそんな、ものゝ云ひ方は廢して貰ひたいものね(口眞似をして)……交際を禁じる……こゝは學校の教壇ぢやないんですからね(暫くして)どうなの、今日は? すこしは賣れて?

ウシラト (洗んで) 駄目だよ、唯つた一組賣れた切りだ(嚙んで吐き出すやうに) どうもこいつも安つばい客種だ

ローラ 安つばい客種だつて、ちよいと、ど

うしてあなたは、そんなに氣位はつきり高いの、もうあなたは高等中學の先生ぢやないのよ……安つばいも高いもないわたしは、今日びは、そんなお客のおかけて生活してゐるんぢやないの?

ウシラト 生活! 生活か、結構な生活だ

ローラ また愚痴! そしてまた、出て行つてまた歸つて来るの! どう、ビール半分飲まない? (ビールを持つて近づく)

ウシラト (押し退ける) 不要ない、厭だ、そんなビールなんぞ

ローラ (小兒に云ふやうに) いゝえ飲むの(無理に飲ませる) さうら黒が入つてゐるから美味いいでしょ……あなた後生だから靴下止めなほして下さらない? (椅子の上に足をのせる)

ウシラト 四邊を見廻して跪いて靴下止めをなす、亭主、奥から出かゝつてこの體を見てぐるりと廻れ右をして奥へ入る

ウシラト 具合は好いかね  
ローラ 好いわ、恰度、あなたすつきり上手になつたわね……ハイ御褒美(とビール

を取つて渡す、ウシラト飲む)

キーパートが頗るつきの上機嫌で飛び込んで来る

キーパート やあ、居た、居た(いきなりウシラトの手を掴んで握手をする)

ウシラトとローラは呆氣にとられてゐる

キーパート 吉報、吉報、大吉報……なんて顔をしておるんだ

ローラ 吉報つて……? アノ興行するところが出來たの

キーパート さうなんだ、しかも、お前さんの旦那さんが、一躍立役者になつたんだ

ローラ えつ  
キーパート この人が

キーパート さうなんだ、ほうら契約書だ……(紙片を出して振り廻す) 電報でもつて契約したんだ、どうだ素晴らしいだろう

ウシラト (おづく) しかし、ソノ、わたしは……

キーパート 好いつてことよ、ママ、興行のことは、わたしに委せて置きなさい、懼りながらキーパートだ、大丈夫大成功疑ひなし

ローラ だつて、この人は……

キーパート ハルト、大丈夫だつてことを

ウシラート しかし

キーパート (冠せて) 場所は『青い天使』(手を

ポンと打ち鳴らす) どうだ

ウシラート (弾かれたやうに) 『青い天使』

キーパート ヤア、ヘル

ローラ 始めて了解する

ローラ そいつは素敵だわ、素晴らしい思ひ

つきだわ

キーパート (得意になる) 素敵だらう、素晴ら

しいだらう『當地出身教授イマヌエル・ウ

シラート博士出演』と、大々的に宣傳をし

な、来るぜ、来るぜ、大當り疑ひなし(奥

に向つて呼ぶ) 大將

亭主 (顔を出す) 何だね

キーパート (叫ぶ) シャンパンだ

亭主 シャンパン? そいつは象儀だ、今すぐ

今すぐ(引込む)

ウシラート (勃然と) わしは厭だ、わしは歸ら

ん、歸らん、歸らん、歸らん

キーパート (呆れて) おい、おい

ウシラート (激しく首を振る) いやや歸らん、

歸らん、わしは歸らん

キーパート おい、冗談ぢやないぜ今更らに

なつて歸るも歸らんもない、かうして契約

書まで来てゐるんぢやないか

ウシラート そんなこと、わしは知らん(激

して途切れ、途切れに) わしは……役者な

んぞに……それも……故郷の町に……断じ

て……

キーパート おい、呆れたね、まるでだつ

兒だねえ、おい、まあ好く考へて見るが好

いぜ、お前さんは何ぢやないか、この五年

間といふものこの女の細腕一つで喰べさせ

て貰つて来たんぢやないか、養つて貰つて

来たんぢやないか、そして今こんな甘い話

が持ち上つて生活が立てられやうと云ふ段

になると……そいつはよくねえよ、それ

あ考へ遣いだ、早い話が

ローラ(遮つて) よくつてよ、大丈夫よこの

人行くわよ

ウシラート いや、わしは行かん

キーパート ロオラさんのために、それでもか

い?

ローラ 行くわね、行くわね

ウシラート (呻く) 後、後生だ、それだけは、

それだけは許してくれ、わしはあの町だけ

は……あゝ、勘辨してくれ

キーパート なにに、行つて見ればお前さんなん

でもありやしないうぜ、ぢや承知したね、明

日の朝の九時出發一好いね(奥に向つて) お

い大將、シャンパンはどうなつたんだ

ウシラート 厭だ、厭だ(激しく身を揺ぶ

る)

ローラ 行くの、行くのよ、サ、行くと云ふ

の、行くと云ふの、行くと云ふの行くわね

行くわね

ウシラート 小兒のやうに泣面を作

る。亭主、シャンパンを提げて出

て来る

亭主 お待ちどう、その代りにはうちの穴藏

で一番の奴だ

—— Tris out ——

第二幕 (2)

『青い天使』の樂屋

われらのお馴染の『青い天使』の

樂屋

バンドと客席の喧騒とが壁越しに聞える

小道具方が物を舞臺の方へ運んだり道具方が忙がしきうに通り抜けたりする

踊子二人が開かれたトランクの中を手せわしく引掻き廻して、衣裳を抱えて下手の扉に入る

ローラが軽い足どりで二階から降りて来て、下手に行きかける。下手からひどくお洒落をした、アルバートが出て来る、ローラは氣づかず行き過ぎやうとする、アルバートその行手を遮るやうにする、

ローラ始めて顔を見る

アルバート (舞臺でするやうな氣取つたお辭儀をする)

ローラ あらつ、あんた

アルバート (ニヤ／＼微笑ひながら) さうですよ、わたしですよ、アルバートですよ、云つたてせう、わたしは何處までもあんたの後を跟いて行くつて……とこころで挨拶を

して置きませう、わたしは今日からこの一座に加入したんです

ローラ オヤ／＼

アルバート どうです、これだけの熱心さ、眞鍮さが判つてくれたら、あんたも…… (云ひながら近づく)

ローラ (笑ひ出す) おやもう……? 恐ろしい氣が早いおね

アルバート (微笑ひながら) そこが、早業専門の藝人ですよ (素早く抱かんとする)

ローラ あら、いけない、いけないわ、今はアルバート 今はどうして? (猶奇ろうとして)

下手を見て低く口疾に) ぢや後で……約束してくれましたね、ありがたう

キーバートの聲 さあ、さあ  
下手からキーバート、道化の衣裳を着けたウンラートを押して出る  
ウンラートは目立つて憔悴してゐる。大きく眼を開き、落ち着かない舉止  
兩人の後から派手な、衣裳をつけたグヌスタが、道化役のかづらだの、途方もなく大きなカラーだの

つけ鼻だのを持つてつゞく  
グヌスタ お前さんみたいに、さう騒ぎ立てたら、こつちまでのぼせ上つて了はあ

キーバート 何年にもない大入りだ……これが騒がずにゐられるかい (通りかゝつた踊子の一人に) おいお前、樂隊にさう云つてくれ、もつと陽氣にぢやんぢやか、ぢやんぢやかと演奏のやうにつてな (愕然と立ち盡してゐるウンラートに) さあ、お化粧だ、坐つた、坐つた (兩腕を捲くる) おい坐るんだと云ふに (兩肩を押へて椅子にのめり込ませるグヌスタに) おい、刷毛だ

グヌスタ あいよ (取つて渡す)

キーバート 白粉、白粉 (ウンラートの顔を塗りながら) それから、紅はあるなそこに (ウンラートに) さあ、今がお前さんの出世の瀬戸際なんだぜ、さうして一座の運命の境目だ、頼むぜ

グヌスタ (領いて) おい、お前さん

キーバート 好いつてことよ (ウンラートに) 何しろ、なんだ、お前さんが立役者なんだからな、一つ頼むぜ、本當に (グヌスタに) さら、紅だ





あれ」とサイン

ローラ さ、そのかづら冠の……冠の客席からの聲 おうい、早く出せ

ローラ (かづらを奪つて冠せ、吊るやうにしてウンラートを立たせる) さあ、これで好い、さあ

キーバート (ウンラートの腕に自分の腕を組んで) さあ、出よう

ローラ (背後からウンラートを押しながら) さあ、さあ

小屋主 やれ、やれ (とその後からつゞく)

ウンラート (アルバートの姿を始めて認める、忽ちキーバートとの腕を振り解いて一歩二歩戻る、アルバートを指差して叫ぶ) あいつ

……あいつが……(くるりとローラの方に向き直つて) ローラ、わしは……こんなに

……お前のために……真心も……名譽も……恥も……お前のために……それに……それに……

ローラ さうら、また焼餅さあさあ……(舞臺の方へ押しに行く)

ウンラート わしは……

キーバート (再び腕を組んで引摺りながら) 後で

後で……

ウンラートはキーバートに引摺られて、ローラに押されて上手の扉から出て行く

だ、大丈夫かなア (急いで後を追ふ) バンドが新しい曲に移つて難し立てる、と見物人の喧騒口笛など

第二幕 (3)

舞臺と客席

……(但し、前幕のそれを、異つた角度に見せたる)

客席は極度の喧騒。給仕人の素晴らしくよく徹る聲が『焼餅詰』ビール一ちよう』など、喚く。

ある一際、ウンラートの昔の同僚である教授連が陣取つてゐる

……そのある者は顔つきが、又ある者は服装が、又あるものは舉止が……といふ風に、いづれもが

かつての日のウンラートに酷似し

た點を備へてゐる

教授 A 恥だ、恥だ

同 B さうとも、さうとも、われわれ全體の恥辱でなくてなんだ

教授 C わたしは斷言する、敢て斷言する! (卓を激しく叩く) 彼ウンラートその人間は……

そらつ出たツ  
忽ち喚聲、叫聲、喝采、足踏み、口笛等が嵐のやう!

舞臺にキーバートが現はる、手を舉げてサイン、大喇叭

客席少し靜まる

キーバート (身振りよろしく) え、こゝもと御目通り致しますは、且ては御當地の高等中學校に於きまして、青年諸君を教へ導き、天晴れ名プロフェツサアの譽高かりし

エマヌエル・ウンラート博士にごさいます一日博士つららおもん見まするに、固く

俗なる輕口まつた道化などに依つて

前口上は澤山だ

先生を早く出せ

先生を出せ

出せ、出せ

客席また騒々しくなりかける

太鼓が一つどん……

キーパート 尊敬すべき皆様方、お言葉に従ひ、

もう此上くどく申上げること止めます

ま、されば、愈々ウンラート先生、今ぢや手

前の一の弟子オーグストを御紹介申上げま

する(手を舉げてサイン)

バンドが滑稽味を帯びた陽気な曲

を初める観客拍手、口笛

ウンラート、背後から誰かに突き

出されたらしく、ひよろく〜と現

はれる

と、客席に大怒濤のやうな喧騒

いよう先生

天下の色男

お久しぶり

先生、先生

恥知らず

黙れ

ローラさん

(口笛) ひゆう〜

キーパート、サイン、音楽起る

キーパート、サイン音楽ゆるくな

る

キーパート お目通りも済みましたれば……

さて御覽のとほり、手前は、この手には右

に五本、左に五本、合せて十本の指の他に

は何もございません、よくお検めを願ひま

する、さて、これなるシルクハット、秘密

の仕掛けもなければ、二重底にもなつて居

りません、すなはちからつば、からつば、

からつば、全くのからつばでございます、

これを是なる先生の頭から冠せる(帽子を

ウンラートの頭に冠せる、ウンラートは始

終キョト〜しながら、その一方、楽屋の

方へ氣を取られてゐる様子) 取り出したる

一挺のピストル、これ又、種も仕掛けもあ

りません、それつ(發射、手を伸べて帽子

を取る、中から鳩が飛び出す)

客席から少しばかりの拍手

酒場男が最前列にあつて、獨りだ

け、無暗に手を叩く

キーパート はいつ、まづはこの通り

ウンラートはものにつかれたやうに、ふら〜と其ま、楽屋の方に

行きかける

キーパート (思はず) おい〜、何處へ行くんだ

見物大喜び、笑聲、急激のやうな

拍手、口笛

よう〜先生

しつかり、しつかり

キーパート、ウンラートを引戻し

て並んでお辭儀をしやうとするが

拍手が偶然としてゐるので、いき

なり頭を押へてお辭儀をさせる

客席にとつと笑聲、拍手

ハイ、今晚は

笑聲

教授C (憤然として立ち上つて叫ぶ) ひどい

侮辱だ、あんまりひどい

黙れ

叱つ

厭なら出て失せろい

さうだ、さうだ

叱つ、叱つ

バンドが氣を利かせて始める  
教授Cは同僚になだめられて坐る  
キーパート、サイン  
——音楽ゆるくなる

酒場男 (客席から) 親方、今度は一つ卵を願ひます、生みたての、ほや／＼つて奴をね  
キーパート 生み立てのほや／＼卵？おつと承知、さて皆様、こんどは酒場からの注文に依り、卵をばこれなる先生の鼻の先から産まして御覽に入れます、ハイ、先生の鼻の先きにお目止められませう (手でウンラートの鼻を撫でる、太鼓) ハイ (卵を示す低声にウンラートに) おい、コケコツコウをどうした？ (又同じ科をして卵を取出す) ハイ、まだ一つ (ウンラートの横腹を小突きながら低聲で) おい、コケコツコウ、コケコツコウ (また同じ科をして卵を取出す) ハイ、更に一個 (ウンラートを小突く業を賣やしてうつかり大聲で) どうしたんだ、コケコツコウは？ (慌て、低聲になつて) さあ啼いた、啼いた……やい、今度啼かなかつたらどうするか見ろ  
ウンラート 救いを求めるやうに、

おろ／＼と其處此處を見廻す。瀧面を造る様子がだん／＼變になる  
キーパート (また同じ科) ハイ、また (小突く低聲で鋭く) それ！  
ウンラート (小突かれて喚めき乍ら) コケ、コケ、コツコウ  
客席笑聲、大拍手  
キーパート (低聲で) その調子、その調子 (又同じ科さにかゝる)  
ウンラート (まだ卵を取出されない先に) コケコツコウ  
キーパート おい、どうしたんだ  
ウンラート コケコツコウ  
キーパート (作り笑びをして客席に) この牝鶏すこし戸惑ひをして居ります  
ウンラート (兩手を舉げて、舞臺を跟るつき廻りながら) コケコツコウ、コケコツコウ、コケコツコウ、コケコツコウ  
キーパート (平静を失つて追つて歩く) おい、おい、どうしたんだ  
客席は大喧嘩、バンドは急場を救ふために猛烈に演奏する。教授C躍り上る

教授C (いきま／＼) もう我慢が出来ん、斷じて許せん、許せん、こんなこの騒ぎの中にウンラートは『コケコツコウ』を繰返し道具に突き當りながら樂屋によろめき入る  
客席！滅茶苦茶にしてしまやがつた…… (頭髮を掻きむしる)  
第二幕 (4)  
もとの樂屋  
小屋の主人をはじめグヌスタ、踊子等澤山。道具方等が、上手の屏の前に重なり合つて、鬱々云ひながら、舞臺の方を覗いてゐる。  
すこし離れたところにローラとアルパートは立つてゐる。  
アルパートは葉巻をくゆらしながらにや／＼笑つてゐる。  
小屋主 (地團太を踏み乍ら) どうなるんだ  
どうなるんだ  
どうしたんだらう？  
氣が狂つたんだ  
舞臺の方で激しい物音がする

あつ、倒れたわ

あら、客席の方へ行くわ

あの顔、あの眼

小屋主、堪へられなくなつて其處を離れて室内をぐるぐる歩き廻る

小屋主 畜生め、畜生め……どうなるんだこのおさまりはどうつくんだ(アルバートを認め、ぐつと癪に觸つたやうに)やいこの若僧、手前何が嬉しくつて、先刻からニヤ／＼してやがるんだ

アルバート (平然と) おや／＼とんだ八ツ當りですね

小屋主 何ッ(氣色ばむ、舞臺からウンラートが『コケコツコウ、コケコツコウ』と暗くのが聞える)あゝまだやつてゐやがる

—— あら来るわ、来るわ、こつちへ来るわ  
ウンラートの聲 コケコツコウ

踊子達、わいと下手へ逃げる

ウンラート 跟めき乍ら現はれる、歪んで別人の顔の様になつてゐる

ウンラート コケコツコウ

小屋主 (ウンラートの襟を両手で掴まへて揺ぶる) おい、おい、おい……

ウンラートは抗する力なく、されるがまゝになつてゐる

キーバートが困惑した顔で愕然と出て来る

小屋主 (ウンラートを離してキーバートの方へ行きながら) おい、お前が相手だ、さあ、この始末をどうつけてくれるんだ

キーバート どうもこうも

小屋主 なにッ  
キーバート 待つた大將(踊子達に)おうい、お前達出るんだ、出るんだ(グユスタに)それ

お前 踊子達氣味悪げに、ウンラートの傍を指り抜けて上手に集まる

キーバート (扉から頭を出して怒鳴る) 音楽……

……

ウンラート (はじめかれたやうにきよろ／＼しながら) コケコツコウ、コケコツコウ……

ローラ (踊子達の先頭に立つて拍子を取る) タラツカ、タツタ、タラツカ、タツタ

新しく始まつた音楽に乗つて、踊子達は、舞臺の方へ行進する

キーバート (ローラに) おいッ、お前も出るんだ

小屋主 さうだ、出なきやいかん、ローラ

ウンラート (眩く) ローラ(考へる) ローラ……

ローラ……(きよろ／＼と四邊を見渡す、ローラを認めてちつと見詰る、突然叫ぶ様に) ローラ、わしのローラ(跟めきながら近づく)

ローラ後退りする

アルバート支へる

ウンラート お前、わしのローラ(手を伸ばして更に近づく)

ローラ、アルバートに絡りつく

アルバートはローラを襟へてウンラートの行手に立ふさがる

ウンラート (暫らくその顔を覗くやうにして凝視、と動物のやうな叫聲を發して指を曲げて飛びつく)

アルバート ホツ(一撃を加へる)

ウンラートくづおれて板舖に倒れる

キーバート (ローラに) 尻に角、お前は出た、出た(手で押しやる様にする)

舞臺では例の『わたしやどうして

この様に……』を奏してゐる。

第二幕 (5)

学校の門の前

ウンラート、暗い街燈に凭れかゝつて立つてゐる、大きく見開いた眼はあてどなく、空間を眺めつゝしてゐる

雪が降つてゐる  
遠く——微かに『わたしやどうしてこの様に……』のバンドが聞えてゐる

ウンラート わしは誰だ、わしは、どうして此處に立つてゐる(眩く)ローラ……(口疾に)ローラ、ローラ、ローラ……(聲、高に)ローラ(反響に耳を澄ます)……(Aria)身顛ひする體からものを撒いながら棄てる所作をする跟めきながら歩き出す、学校の門にぶつゝかる)歸つて來た……歸つて來た、本當だるうか、これは……(鐘を鳴らす、耳を澄ます眩く)長かつた……長かつた……長かつた……

門が内部から開かれ、灯を提げた

使丁 出て來て、灯を上げて見る  
その外套の袖の下をくゞつてウンラートは影のやうに、そして吸ひこまれるやうに門内に消える

第二幕 (6)

教室

やうやく、物の輪廓が認め得られる程度の明るさ、ウンラート扉を排して音なく入り來り、跟めきながら教壇に上る椅子にかける、卓の上を撫でさする、立上る、低聲で何かつぶやくと、くづおれるやうに再び椅子に坐し卓を抱くやうにして前方に伏す  
灯を提げた使丁が入つて來る、傍に近づく

使丁 わたしは知つてゐます……先生……先生……(忽ちその手を引いて後退りする)先生！(背後から抱くやうにして起さうと試みる、しかし卓の一角を握つた手が容易に離れない)

窓の外雪、霏々と降つてゐる。  
——幕——  
例の『わたしやどうしてこの様に……』をレビードして奏す

編輯後記

春！浪花座更新第一劇場三月公演をトップに中座の曾我廻家五郎劇創立三十年記念興行、角座の成美園歸演、それから五日から開演の松竹座名物「春のおどり」等々、華かな前奏曲を以つて先づ道頓堀の春の幕は上りました。

阪東壽三郎等更新の第一劇場に對して、忌憚なき意見なり指示なりを求めましたところ早速玉稿を寄せられた諸家に、茲に重ねて御禮を申し上げます。劇場當事者は勿論、本誌愛讀の諸氏にとつても非常に有益な記事だと存じますので是非熟讀あらんことを切望いたします。

此度の創立三十年記念に因んで頂いた曾我廻家五郎氏の「創立三十年の思ひ出」も亦興趣津々たる特別

その他各座各劇團に就ての東西諸家の一粒選りの玉稿は、愈よ本誌の眞面目を發揮せしめて餘りあるものです。

例に依つて、映諧欄も益々充實して來ました「讀者から讀者へのページ」(喫煙室)には、讀者諸氏の熾んなる投稿を希望します。

今月は豫想外に發行日が遅れて甚だ遺憾です。次號からは必ず五日までに……と、御惠稿の諸家並に讀者諸氏へ、お詫びの辭に代へさせて頂きます。

終りに、目下第一劇場上演中の名作「嘆きの天使」の上演臺本が本誌に輯録出來たことを此上もなき誇りとしてこの後記の筆を擱きます。

(大橋 照 夫)

昭和六年三月一日發行

雑誌「道頓堀」第五十四輯

◆ 誌代は前金でお拂ひを願ひます。

◆ 郵券代用は一割増にて御注文を願ひます。

◆ 御相談の上廣告掲載の需めに應じます。

廣告取扱所

大阪電報通信社

大阪市中區中之島二丁目

廣告の御用は電通または當編輯部廣告係へ御申越し下さい

特價金參拾錢(郵費五圓)

昭和六年二月二十八日印刷

昭和六年三月一日發行

大阪市南區久左衛門町八番地

松竹土地建物興業株式會社

編輯者 鳥 江 鏡 也

大阪市東區橋南町一丁目

印刷者 北 島 竹 次 郎

大阪市東區橋南町一丁目

印刷所 桃介印刷株式會社

大阪市南區久左衛門町八番地

松竹土地建物興業株式會社

發行所 道頓堀編輯部

電話 二二四〇番  
六六九五番



大市は値下げと  
別格式料理で

大喝采

登録出願中

モターソン  
エロなべ付

長堀料理

~~~~~  
す必は會宴御

~~~~~  
へ市大の堀長  
~~~~~

別格式

五色田樂  
たけのこ  
筍御飯

大阪長堀橋  
エロなべ  
肉と料理  
乙女ダンス  
有藝仲居

大市

電話船場

三〇八〇  
四一五〇

別

電南(二四〇番)  
六六六番

昭和二年十月廿五日第三種郵便物認可  
昭和六年二月二十八日發行  
昭和六年三月一日發行

く 輝 は 美

# 粉白ブラク

清く氣高く麗  
はしいこの純  
眞味化粧美は  
クラブ白粉



# 粉洗ブラク

「道頓堀」 第五十四輯 第六年三月號

一部金參拾錢